764
112

0054729000
0054729-000

764−112

北海道の口碑伝説

北海道庁・編

日本教育出版社

昭15

AID

北海道の口碑傳説

764
112

北海道廳編

北海道の口碑傳説

日本教育出版社刊行

764
112

序

我が國運の隆昌前古比なく、學術の進步亦瞠目に値するものあるは是れ一に明治以降範を歐米に採り上下孜々として勵精せる結果にほかならず。然れどもその極、遂に自國の歷史と傳統とを顧みざるの弊を生み、甚だしきは異邦の文化に心醉して祖國を忘るゝの徒すら現るゝに至れるは、我等の記憶に尚新たなる所なり。

思ふに現在は過去と分ちて考察すべきものに非ず、卽ち二者を一環として始めて正しき現在の理解に達し、更に將來を推して文化の向上を期するを得るなり。これ歷史と傳統の尊ばるゝ所以にして、些々たる民間

の傳承も之を忽諸にする能はざる理由亦玆に存す。

本道は往昔夷族活動の舞臺たりしのみならず、所謂先住民族穴居の地として幾多の遺蹟を有す。隨つて府縣に於て已に湮滅に歸せる土俗異習のなほ傳へらるゝもの尠からず、實に本道こそ考古民俗學上特殊の位置を占むる重要なる府庫と謂ふべきなり。

本廳是を以て夙に道内に於ける口碑傳說の編纂を畫し、爾來全道各支廳市町村の熱心なる協力を得て專ら資料の探求蒐集に努めつゝありしが、今次漸く稿成り之を鉛槧に附するを得たり。

匆忙の間、自ら遺漏なきを期しがたきも、以て時局下道民の鄕土愛を昻め、道史傍證の一助たるを得ば幸甚なり。

上梓に方り管見を敍べて序となす。

昭和十四年十二月

北海道廳長官　戸塚九一郎

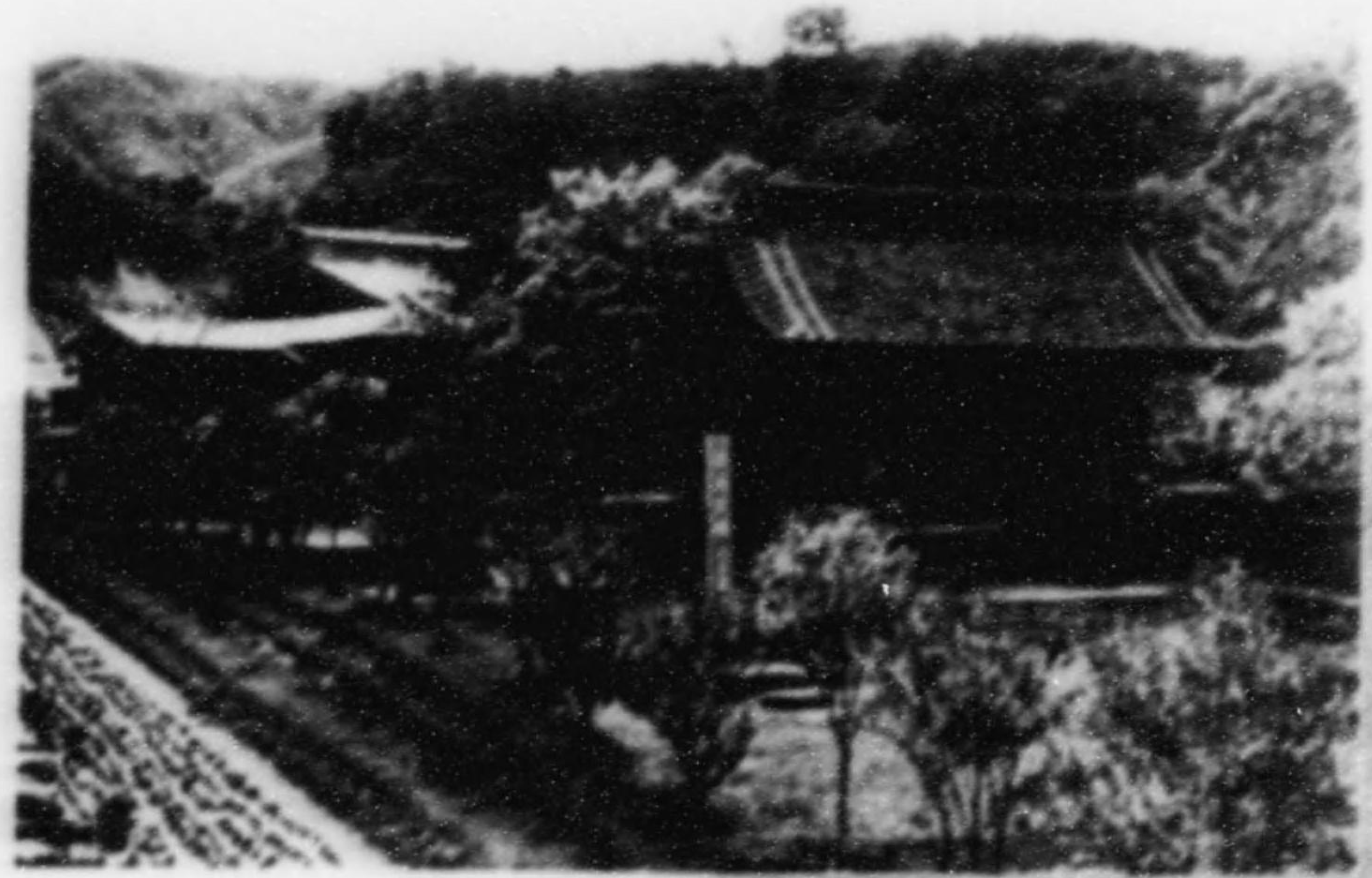
写真は何れも昭和十二年九月四日津軽要塞司令部検閲濟

(上)福山城
(下)同城城門
渡島支廳

要塞法ニ依リ昭和十一年九月
四日津輕要塞司令部許可濟

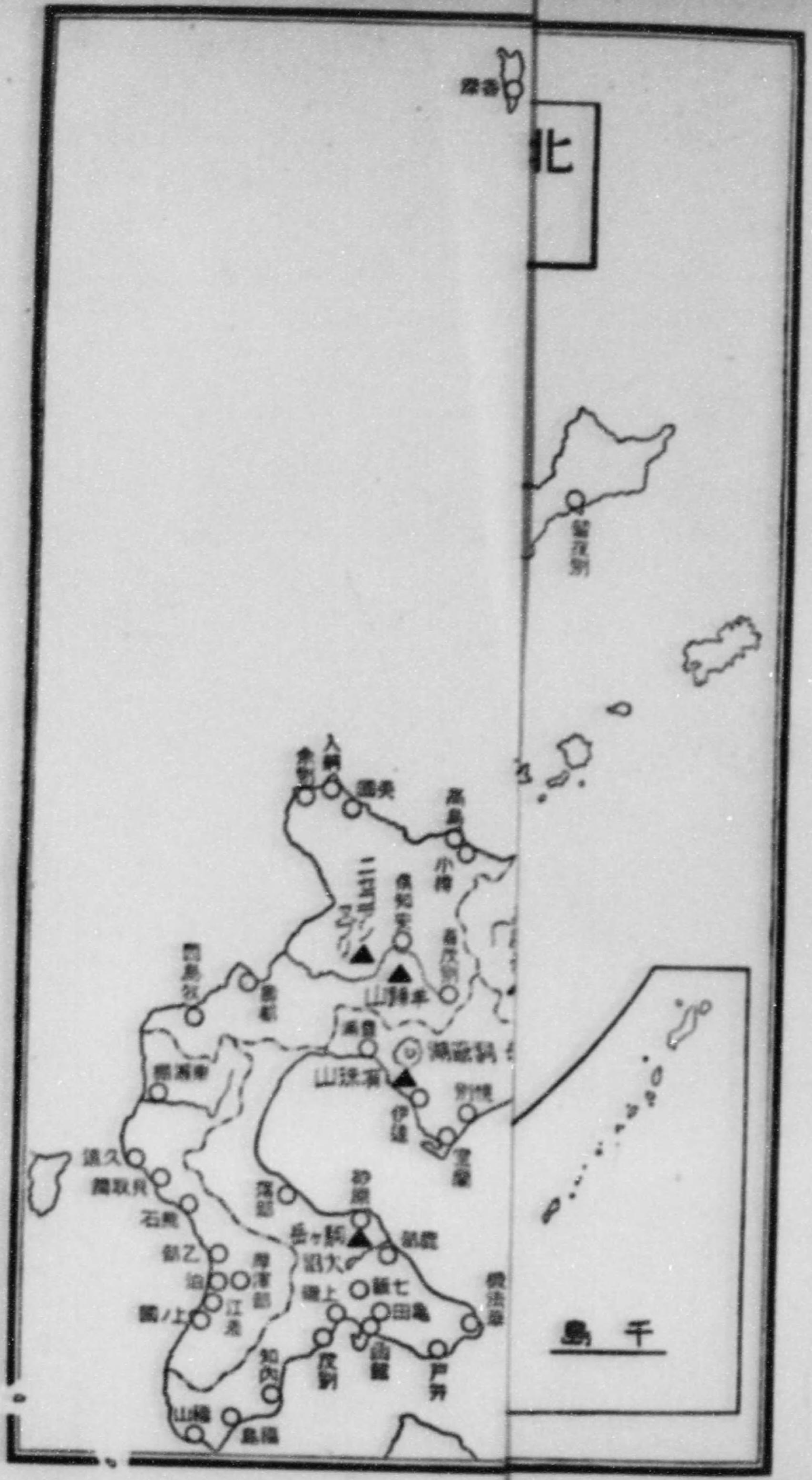
（上）福山城
（下）同城城門
渡島支廳

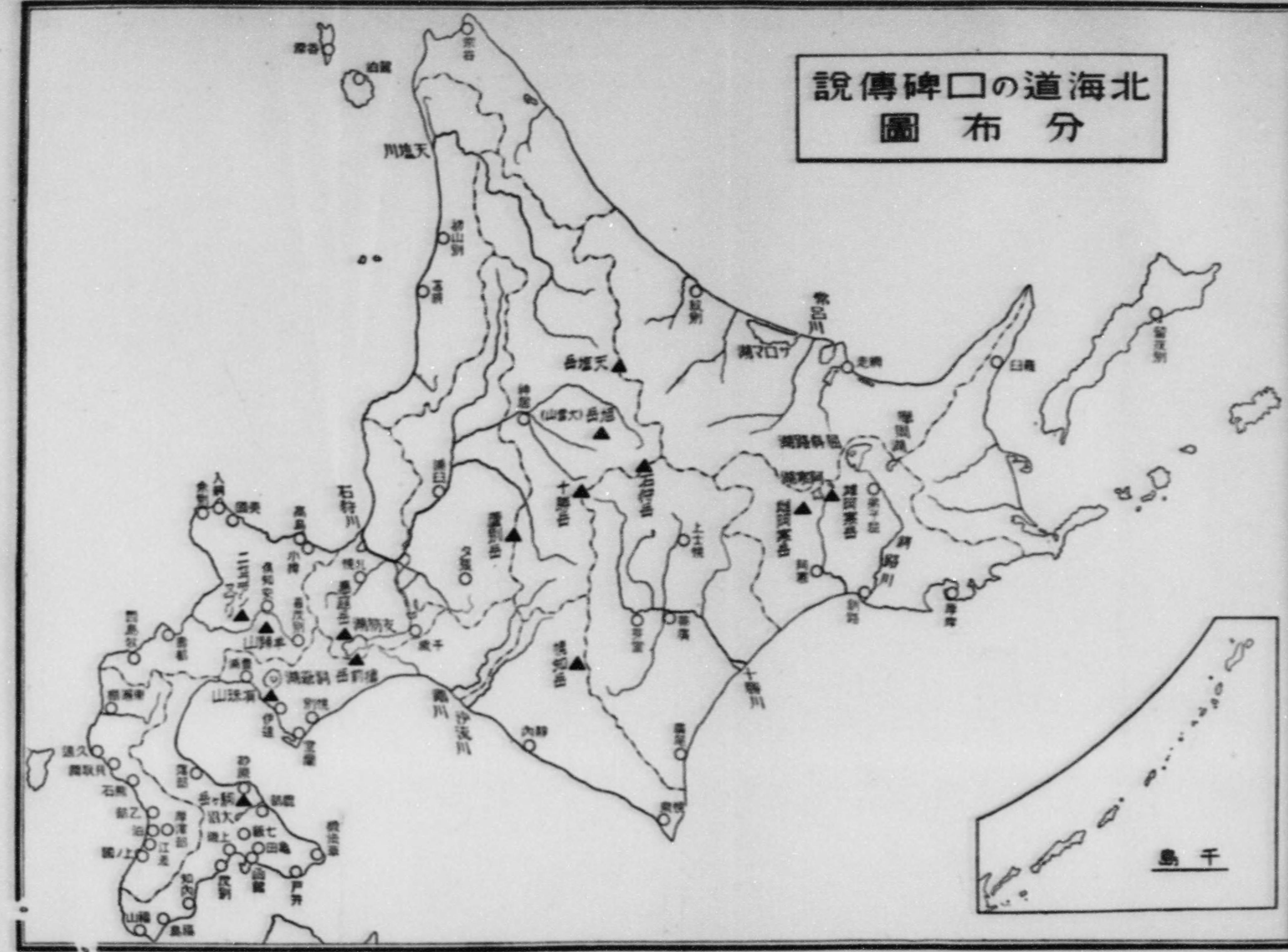
(上)門昌庵(檜山支廳)
(下)アイカップ岬(釧路國支廳)



(上)門昌庵(檜山支廳)

(下)アイカップ岬(後志國積丹)


北
千島
小樽
羊蹄山
洞爺湖
有珠山
伊達
駒ヶ岳
大沼
七飯
亀田
函館
戸井
江差
上ノ國
乙部
知内


北海道の口碑傳說
分布圖
天塩川
石狩川
十勝川
釧路川
常呂川
沙流川
千島

例言

一、本書の編纂は昭和九年伊綿社寺兵事課長（現内務省神社局指導課長）の提唱に依つて開始せられ、歴代學務部長竝に社寺兵事課長指導の下に道内各支廳市町村の協力を得て、今次上梓の運びに至れるものなり。

一、本書は各支廳市町村の調査資料に基き、略々道内各地の口碑傳說を收錄せりと雖も尙若干の遺漏なしとせず、これ等は他日機を得て追補增訂せんとす。又草創日淺き地にありては、口碑傳說と稱すべきものを有せず、新興都市旭川市の如きは其の一例とす。

一、本書の編纂は、主として本廳囑託栖文七之に當り、文學士小林勝人一部の校訂に從へり。なほ資料の蒐集整理竝に刊行に關する事務は、社寺兵事課中村主任屬、堀田屬の努力に俟つところ多し。

北海道の口碑傳說

目次

石狩支廳

千歲郡千歲村

一、千歲神社の木像……一
二、キウスのチヤシ……一
三、セイコタン……[illegible]
四、支笏湖……[illegible]
五、トパトミ……[illegible]
六、オセツコチの狐……[illegible]
七、オサツクマオコナイの語原……[illegible]
八、ストクンネヒの語原……[illegible]

九、フレドイヒ……三

渡島支廳

松前郡福山町

一、闇の夜の井戸……四
二、臥龍梅……五
三、手長池……五
四、血脈櫻……六
五、玄狐稲荷……七
六、博知石……八
七、將軍地藏……八
八、大石佛……一〇
九、與次郎兵衛……一一
一〇、寛狩と狭狩の話……一二
一一、阿吽寺の不動尊……一三
一二、廣峯大明神……一四

一三、柱の木と大蛇……一五
一四、五百羅漢……一五
一五、鴨⿰江の柳と龜石……一七
一六、村正の刀……一七
一七、宮切澤……一九
一八、劍道の達人……二〇
一九、三本松……二一
二〇、義經と辨慶……二一

松前郡福島村

二一、神託による改村……二一
二二、乳房檜……二三
二三、船隠し洞窟……二三
二四、タヅラ森……二三

上磯郡知内村

二五、姥杉……二三
二六、雨石松……二四

二七、矢越岬……二五

上磯郡茂別村

二八、矢不來天滿宮の御神體……二五
二九、矢不來の由來……二六
三〇、御神體の靈異……二六
三一、花嶺の鳥居……二七
三二、社殿の不思議……二七
三三、權姫物語……二八
三四、道明風……二八

上磯郡上磯町

三五、三ツ谷村の起り……二九

龜田郡七飯村

三六、七飯村古戰場……三一

龜田郡龜田村

三七、四稜郭……三三
三八、赤沼大明神……三三

龜田郡戸井村

三九、館跡……三三
四〇、罪人追放の會所……三四
四一、武井の島に傳はる話……三四

龜田郡椴法華村

四二、惠山權現……三四
四三、賽の河原……三五

茅部郡砂原村

四四、駒ヶ岳に關する傳說……三六
四五、砂原村の起り……三六
四六、大字掛澗村の起り……三七
四七、砂原村部落名の由來……三七

茅部郡鹿部村

四八、內浦權現堂……三八

茅部郡落部村

四九、土穴……三八

五〇、栃の木……三九

檜山支廳

檜山郡厚澤部村
一、稲倉石……四〇
二、城の倍砦趾……四〇
三、太鼓山……四一
久遠郡久遠村
四、太田神社の傳説……四一
檜山郡上ノ國村
五、右權の濱……四三
六、赤坂の土に殘る蝦夷の怨靈……四四
七、泰平山の龍燈……四五
八、竹の輪切りと小石の煮締め……四六
檜山郡泊村
九、眞言宗觀音寺……四七
一〇、泊館趾……四八
一一、木食上人の地藏尊……四八
爾志郡乙部村
一二、乙部木村の開祖……四九
一三、館の岩……五一
一四、姫川……五一
一五、鮪岬の鮪……五三
爾志郡熊石村
一六、門昌庵縁起……五四
一七、雲石の由來……六六
久遠郡貝取澗村
一八、寄場の話……六八
瀬棚郡東瀬棚村
一九、兜野……七〇
檜山郡江差町
二〇、鰊の神様……七一

二一、夷宮と蛇神……七三
二二、追分傳說……七三
二三、獅子舞の由來……七五
二四、笹山の神狐……七六
二五、順正寺の怪異……七七
二六、鴎島の傳說……七八
二七、やらずの明神……七九
二八、八方にらみの龍……八〇
二九、雄龍雌龍……八一

後志支廳

虻田郡倶知安町
一、マツカリヌプリの語原……八三
積丹郡余別村
二、神威神社の緣起……八三
美國郡美國町
三、女郎子岩……八五
高島郡高島町
四、高島のお怪……八七
五、メノコプミキの傳說……八七
六、玄武丸の砲彈……八九
七、赤岩洞窟の行者……九一
八、忍路高島七地藏……九三
九、赤岩の恵比須像……九四
積丹郡入舸村
一〇、義經とシララ姫……九六
虻田郡喜茂別村
一一、シリベシ致齣の陸……九七
島牧郡西島牧村
一二、黄金澤……九八
一三、黄金澤の靈壺……九九
一四、黄金の弔鐘……九九

一五、男沼女沼の主……九九
壽都郡壽都町
一六、辨慶の土俵……一〇〇
一七、辨慶の足跡……一〇〇
積丹郡余別村
一八、神威岩……一〇一

空知支廳

夕張郡夕張町
一、砂金採取の跡……一〇七
樺戸郡浦臼村
二、鶴沼……一〇七

上川支廳

上川郡神居村
一、運上番屋の跡……一〇九

留萌支廳

苫前郡苫前村
一、金寶院の十一面觀世音菩薩……一一三
二、大日如來の畫幅……一一三
三、三毛狐の話……一一四
四、先住民族の遺蹟……一一四
苫前郡初山別村
五、金毘羅岬……一一六

宗谷支廳

宗谷郡宗谷村
一、不動のお水……一一七
二、東風石……一一七
三、コロボツクル……一一八
禮文郡香深村

四、桃岩……一二九
五、見内神威……一二九
六、香深のチャシ……一二九

利尻郡鴛泊村

七、鴛泊古戰場……一三〇

網走支廳

網走郡網走町

一、チパシリ……一三三

紋別郡紋別町

二、紋別山報恩寺の石像……一三八
三、會津藩士の墓碑……一三八

膽振支廳

有珠郡伊達町

一、チャランケ岩……一四一

虻田郡豐浦村

二、岩屋觀音……一四一
三、坂の上觀音……一四四
四、觀音堂境內の名木……一四四

幌別郡幌別村

五、題目石……一四五

日高支廳

幌泉郡幌泉村

一、擢雲大菩薩の由來……一四六
二、一石一字塔……一四七
三、庭野の櫻花……一四七
四、豐似湖の碑……一四八

靜內郡靜內村

五、日高國名の話……一四八
六、靜內町內各部落の字名……一四八

七、染退地方の大海嘯……一四三
八、染退川の話……一四三
九、染退金山の傳說……一四三
一〇、染退酋長シヤクシヤイン……一四四
一一、アイヌ創世の話……一四六

十勝支廳

河西郡芽室村
一、シユブサラ砦趾……一四七
河西郡上士幌村
二、上士幌村名の由來……一四八
三、クワーカヌ……一四八
四、パラトー……一四九
五、イワシナウシ……一四九
廣尾郡廣尾村
六、陣屋趾……一五〇

七、會所趾……一五〇
八、寶物觀音像……一五一
九、道路開鑿の記……一五一

釧路國支廳

厚岸郡厚岸町
一、逆水松……一五四
二、アイカップ岬に纏はる傳說……一五五
三、バラサン岬とピラワカムイ……一五六
川上郡弟子屈村
四、屈斜路湖の義經石……一五六
五、摩周湖の傳說……一五七
阿寒郡阿寒村
六、雌雄阿寒岳……一五七
七、毬藻の傳說……一五八

根室支廳

目梨郡羅臼村

一、義經尻もち岩……一五九
二、蝮蛇岩……一五九
三、觀世音岩……一五九
四、底無の沼……一六〇

國後郡留夜別村

五、三大魔海の由來……一六三
六、爺々山の傳說……一六四

札幌市

一、開拓延命地藏尊……一六五
二、札幌開祖の碑……一六六

函館市

一、函館の地名……一六七
二、尻澤邊……一六八

三、チャチャノボリ……一六九
四、一本木……一七〇
五、龜田八幡宮の緣起……一七〇
六、船魂神社……一七三
七、藥師山……一七三
八、牛王堂の由來……一七四
九、思之松……一七五
一〇、高龍寺のむじな……一七五
一一、穴澗……一七六
一二、夜鳴石……一七八
一三、大石之松……一八〇

小樽市

一、夜光の珠……一八一
二、大蛇を殺した娘……一八五
三、オタルナイの館……一八六

四、有幌稲荷神社の由來……一八八
五、オタモイ地藏……一八八

室蘭市

一、イタンキ濱の傳說……一九〇
二、輪西の語原……一九一
三、繪鞆……一九二
四、祝津……一九三
五、小橋內……一九三
六、大砲山(坊主山)……一九三
七、貝塚……一九四

釧路市

一、舊會所のチヤシ……一九四
二、春採湖畔のポンチヤシ……一九五
三、モシリヤのチヤシ……一九五
四、桂戀のチヤシ……一九六
五、知人岬の神石……一九七
六、知人岬の神橋……一九七
七、堅穴……一九八
八、釧路アイヌの酋長……一九八
九、オキキリマイ……一九九
一〇、クシロとは……一九九
一一、鶴……二〇〇
一二、クシロの津波……二〇〇
一三、鯨退治のウポポ……二〇一

帶廣市

旭川市

一、伏古チヨマトーに絡はる傳說……二〇一

挿入圖版及刷込圖版目次

巻頭圖版

一 福山城（渡島支廳）……一
同城城門（渡島支廳）……一
門昌庵（檜山支廳）……二
アイカップ岬（釧路國支廳）……二
北海道の口碑傳說分布圖……折込

第一圖版　千歲村の口碑說傳布分圖……三
第二圖版　闇の夜の井戸……四
第三圖版　臥龍梅……五
第四圖版　血脈櫻……六
第五圖版　捧知石……八
第六圖版　乳房檜……二二
第七圖版　船隱し洞窟……二二

第八圖版　タヅラ森……三五
第九圖版　毬　杉……三五
第十圖版　雨石松……三四
第十一圖版　矢不來天滿宮……三六
第十二圖版　四稜廓……三三
第十三圖版　賽の河原……三五
第十四圖版　稻倉石……四〇
第十五圖版　城の岱砦趾……四〇
第十六圖版　太鼓山……四一
第十七圖版　原澤部村土橋附近……四一
第十八圖版　太田神社……四三
第十九圖版　久遠村沿岸……四三
第二十圖版　古櫃の濱……四四
第二十一圖版　夷王山……四五
第二十二圖版　神の道……四六
第二十三圖版　眞言宗觀音寺……四七

第二十四圖版　泊館趾……四八
第二十五圖版　乙部本村……四九
第二十六圖版　今金市街より見市岳を望む……五〇
第二十七圖版　館の岩……五一
第二十八圖版　熊　川……五三
第二十九圖版　鮎　岬……五三
第三十圖版　地ペリ山……五五
第三十一圖版　奇巖雲石……六八
第三十二圖版　貝取澗村長磯……六九
第三十三圖版　兜　野……七〇
第三十四圖版　鴎島と瓶子岩……七三
第三十五圖版　獅子舞……七五
第三十六圖版　元順正寺……七七
第三十七圖版　鴎　島……七九
第三十八圖版　八方にらみの龍……八〇
第三十九圖版　雄瀧雌瀧……八一

第四十圖版　後方羊蹄山……八三
第四十一圖版　女郎子岩……八六
第四十二圖版　赤岩中腹の白龍門よりポン赤岩海岸を望む……九〇
第四十三圖版　赤岩山頂の不動岩……九五
第四十四圖版　龍泉寺……九四
第四十五圖版　龍泉寺の地藏尊……九四
第四十六圖版　比羅夫神社……九七
第四十七圖版　辨慶の土俵……一〇〇
第四十八圖版　夕張川本流砂金採取の跡……一〇七
第四十九圖版　鶴沼……一〇七
第五十圖版　金寶院の十一面觀世音菩薩……一一五
第五十一圖版　大日如來の畫幅……一一四
第五十二圖版　金毘羅岬……一一六
第五十三圖版　杏形會津藩士の墓……一二一
第五十四圖版　桂ヶ岡チャシ……一二四
第五十五圖版　二つ岩……一二八

第五十六圖版　帽子岩……一二八
第五十七圖版　納割山報恩寺……一二九
第五十八圖版　報恩寺の石像……一二九
第五十九圖版　會津藩士の墓……一二九
第六十圖版　チャランケ岩……一三一
第六十一圖版　岩屋觀音……一三三
第六十二圖版　觀音堂境内の二本杉……一三五
第六十三圖版　題目石……一三五
第六十四圖版　標裳神社……一三六
第六十五圖版　登似湖……一三八
第六十六圖版　ベラトーアイヌ部落……一四九
第六十七圖版　イワシナウシの岩……一五〇
第六十八圖版　陣屋跡……一五〇
第六十九圖版　諦林寺……一五一
第七十圖版　諦林寺の觀音像……一五一
第七十一圖版　近藤重藏の開鑿したるルベシベツよりビタタヌンケに至る山道……一五三

第七十二圖版　逆水松……一五四
第七十三版圖　バラサン岬……一五六
第七十四圖版　厚岸湖……一五六
第七十五圖版　蝮蛇岩……一五九
第七十六圖版　觀世音岩……一六〇
第七十七圖版　底無の沼……一六一
第七十八圖版　臼嶽……一六三
第七十九圖版　チヤチヤノボリ……一六九
第八十圖版　一本木……一七〇
第八十一圖版　龜田八幡宮……一七一
第八十二圖版　招魂神社……一七三
第八十三圖版　夜鳴石……一七九
第八十四圖版　イタンキ濱とフンベシユマ(岩)……一九一
第八十五圖版　大砲山(坊主山)……一九三
第八十六圖版　綸納小學校前貝塚……一九四
第八十七圖版　春採湖畔のポンチヤシ……一九五

第八十八圖版　モシリヤのチヤシ……一九五
第八十九圖版　桂戀のチヤシ……一九六
第九十圖版　知人岬の紳橋……一九七
第九十一圖版　春採の竪穴……一九八

北海道の口碑・傳說

石狩支廳

千歲村　（千歲郡千歲村役場調）

一、千歲神社の木像

寛文二年奥州の僧圓空なるものが本道に來り、夕張岳に登らうとしたが果さず、夕張川の上流神居古潭に滯留して藥師如來の木像を彫刻し、「ホロシフシベ」の洞穴に納めて此處を去つたところ、大雨が數日に亙つて降つた。或日、圓空は支笏湖を見物するため、今の千歲に至つたところ、不思議にも先の木像が早くも其處に漂着して居たので、早速祠を立てて之を安置した。之が今の千歲神社だと云はれてゐる。

二、キウスのチヤシ

このチヤシは千歲村字キウスに在る。年代は不詳であるが、アイヌの城砦の趾であると云はれて居る。現に其の跡を殘有し、史蹟名勝天然記念物保存法によつて假指定地となつてゐる。

三、モイコタン

モイコタンは、千歳村大字蘭越村に在つて、舊土人の神（オキクルミ）を祀つた土地であると傳へられる。

四、支笏湖

トーカルカムイといふ湖をこしらへた神様が、支笏湖をこしらへあげた時、どの位深いだらうかと試しに測つて見たら、とても深くて大變濡れた。そして意外にも水が甚だ冷たかつたので、神様は怒つて放したところの魚を悉く海へ投げ出してしまつた。そしてたつた一匹アメマス丈けが殘つた。それが現在湖水に殖えたので、外の魚はあまり棲んでゐないのであると云はれてゐる。（姫鱒、鮭などは後で養殖したものである）

五、トバ、トミ（急ぐ戰の意）

トバ、トミは支笏湖に絡んだ一傳説である。昔ユベツから大軍が押し寄せて來た時、廣い平原で篝火を焚いて露營したところが、支笏湖の氷が一夜の中にとけて、みんな湖水に沈んでしまつた。そしてある女の人が一人だけ生き殘つた。この話はその女の人から傳はつたものであるといふ。

六、オセツコチの狐

オセツコチとは吼えるといふ意である。千歳孵化場の附近（詳しくいへば西南へ約三町程で、現在の札幌營林區署千歳苗圃の事務所の前あたりである。）には、昔狐の巣が澤山あつて、村に何か變り事があると必ず鳴くのだつた。それで村の大事を知らせる狐として（チルヌツプカムイ）土人が熊祭りを行ふ際には、併せて狐を祀ることとなつた。

七、オサツクマオコナイの語原

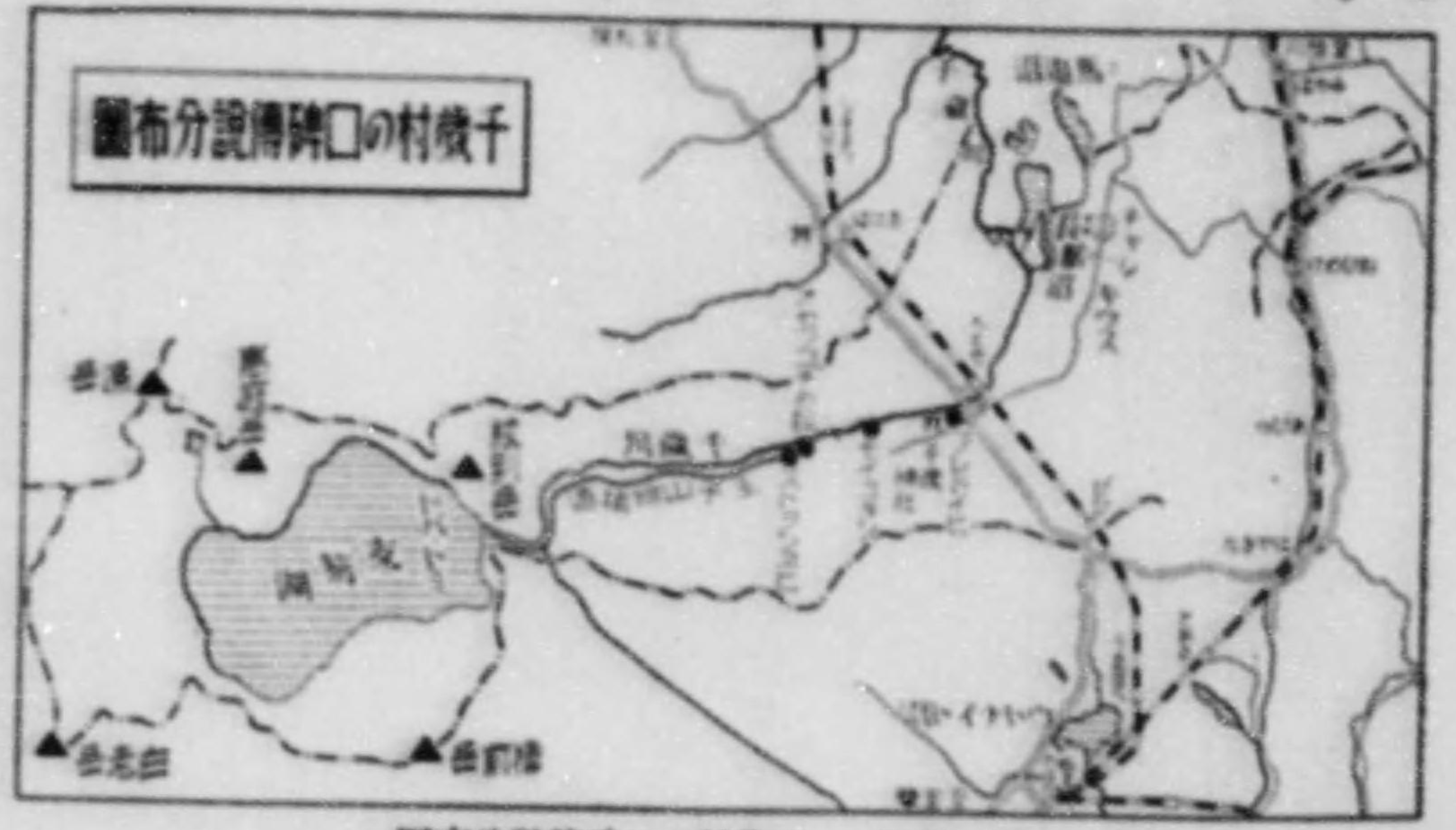
昔、オサツクマオコナイ川（千歳市街の上流約一里十町）に於て、多數の土人が鮭をとつては、竿の様なものをこしらへて魚を乾したと云はれる。オサツクマとは乾し竿、オコナイとは干場のある小川の意である。

八、ストクンネヒの語原

現在の千歳孵化場から西南約五町程隔つた邊には昔多くの土人部落があつた。ある時、ユベツから大軍が攻めて來たので、土人達は逃げて堀へかくれた。そして堀から外へ絶對に出てはならぬと云ふのを、或女がこつそり堀傳ひに川へ水汲みに出た。所が對岸から敵に見つけられ、そこに隱れてゐることが分つて、その部落の土人達は一人殘らずスト（棍棒）で殺されてしまつた。そしてそのストは血で眞黒になつた。それでストクンネヒと云ふのである。クンネヒは眞黒な場所の意である。

九、フレドイヒ

フレドイヒは今の郷社千歳神社境内の崖である。昔こゝは山續きであつたが、津波のために山が流れた。その切れ目が即ちフレドイヒであつて、その當時は赤土であつたが、今は草木が生じて赤土は見えない。フレドイヒとはガケツボ、赤ギレの意味なのである。



第一圖版　千歳村の口碑傳説分布圖

渡島支廳

福山町（一）（松前郡福山町役場調）

一、闇の夜の井戸

闇の夜の井戸は福山城阯内にある。

松前家第十世矩廣の時は所謂藩政弛廢時代であつて、藩主は佞臣を近づけて淫酒に耽り、家老の變死者を五人も出し、其の他の不祥事件も續出し、これがため紀綱紊亂施政宜しからずといふので幕府から戒飭を加へられたことすらあつた。

第二圖版　闇の夜の井戸
昭和十四年一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

時に藩士に大澤多治郎兵衞（一説に丸山某、俗説では悪次郎兵衞）と呼ぶ忠臣があつた。屢々藩主矩廣を切諫したので奸臣輩の忌む所となり、大澤を亡き者にすべく或夜君命と詐り、城内の井戸に藩主愛用の鐵扇を落したから、速かに之を拾ひ上げよと命じ、挺身井中に降りて行く大澤目懸けて、大石を續け樣に抛つたので、大澤は怨を呑んで井中の鬼と化した。

爾來今日まで此の井戸を稱して、闇の夜の井戸又は悪次郎兵衞の井戸と言ひ傳へてゐる。

二、臥龍梅

德川三代將軍家光は梅の盆栽を熱愛する餘り、若し之を傷くるものがあれば立所に手打に行ふ旨を厳達した。大久保忠敎は殊更に之を傷けて君の反省を促した。家光は其の非を悟り鉢を庭に棄てようとした。時に松前家七世の當主公廣が伺候して其の場にあつたが、特に請うて其の梅を拜領し、之を江戸の藩邸に植ゑ「棄鉢の梅」と名付けたが、後居城福山に移植した。現に福山公園に在る臥龍梅は卽ちこれであると傳へられる。

三、手長池

松前家第十二世資廣の室は中納言八條隆英の女であつて、延享二年（二四〇五）十月十八日輿入れをしたが當時巷間に京御前の稱があつた。

第三圖版　臥龍梅
昭和十四年一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

夫君資廣が參覲のため出府して不在中の秋の夜、夫人は物の怪にとりつかれたるもの〻如くフラ〳〵と裏門を出て、的もなく彷徨する中、とある池畔に佇んでゐた。折しも對岸には異樣の眼指しに帕を振る若人が現はれて夫人を麾く。夫人は護身の懐劍に心を引締めつ〻も、「明夜何かの印を持參せよ」と言ひ殘して踵を返した。翌夜夫人は事こそあらめと期待の折柄、明澄の空は一瞬にして黑闇と轉じ、電光雷鳴さへ加はり、颶風は邸内を襲うて凄慘の氣が人に迫ると共に、籬越しに一本の長い手が差し延ばされ、狐に似た一器物が夫人の膝近く捧げられた。夫人は此の異樣な贈物に艶やかな

嘲笑を投げつゝ左手に之を受くるや否や、右手に懐劒拔く手も見せず怪しの手を突き刺した。果然物凄じい騒音が簷下に起り、間もなく天地靜寂に歸り月光朗かに滿庭を照した。スハ大事出來と驅けつけた宿直の武士が血痕を辿り行くと、城外北部に在る一池畔に及んで絶え、不思議や池水は一面血色に濁つてゐた。

爾來人々はこの池を手長池と呼び、皿の形をなした瓷器は、現に松前家の菩提所である法幢寺に秘藏されてゐる。

四、血脈櫻

高徳山光善寺は、天正三年（二二三五）了緣和尚を開基とし、京都百萬遍の末寺である。境内前庭の中央に櫻の老大樹があつて、町の名物八重咲古木の盟主として仰がれてゐる。本幹は先年火災に罹つて旣に枯衰し、辛うじて殘骸を保つ狀態であるが、芽條は新に伸びて之を蔽ひ、宛然毬狀をなして舊狀に復し、春日妖婉の美を發揮して訪客を魅了しつゝある。

第四圖版　血脈櫻

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部許可濟

傳說として次のやうな物語が殘されてゐる。

昔、町内大字生符に柳本傳八なる鍛冶職があつた。或年の春、美貌の娘靜枝を伴つて上方見物に出た。一日吉野に遊び一尼僧と相知り、記念として娘に贈られた一本の稚櫻を土產として歸り、之を菩提所たる光善寺に獻納した。爾來幾春秋、安永の頃御堂改修に際し、此の櫻樹を伐り拂はうとする前夜深更に及び、光善寺第十八世隱譽上人の枕邊に、鮮かなる櫻模樣振袖姿の女性が悄然として佇み「死は明日に迫る身の上、希くは佛果を得んが爲に血脈を與へられよ」と言ふのだつた。上人は其の理由を訊ねたが口を緘して語らず、「深夜なれば明日にせよ」と言へば、「明日を待つこと能はざれば是非に」と請はるゝ儘に本堂に導き、型の如く血脈を授けた。

翌朝上人は切崩される老櫻に名殘りの一瞥を投じた時、葉がくれに動く一紙片を發見した。圖らざりき夫れは前夜不思議な女性に授けた血脈であらうとは、此の不思議な出來事に老櫻の伐株を中止し、却つて一山に命じて盛大な供養を營ましめた。そこで人呼んで血脈櫻と稱するに至つた。

五、玄狐稻荷

松前家第十三世道廣の前室は、前右大臣花山院常雅の息女初姫で明和八年（二四三一）入輿、初姫は日頃京都九條の稻荷を尊崇してゐたから、蝦夷地入輿に當り、九條稻荷は姫の道中を守護するため多數の狐を附添はした。天明八年（二四四八）南部の山伏大昌院なるものが箱館に在り、偶々近海因漁に苦しめるを以て、道廣は大昌院に對して百日の修法を命ぜられた。大昌院は每夜辨天濱の海中に飛び込み、經文一卷づつを讀誦しつゝ苦行を開始した。その第一夜より辨天堂の上に世に珍らしき一疋の黑狐が籠つて遂に九十九日に及んだ。即ち滿願の前夜、大昌院の身邊に黑狐が現れて曰ふには「自分は京都九條の狐であつて、初姫君入輿の砌御見送の爲渡道した者である。姬君御逝去の後、他の狐は皆故郷へ歸つたが、圖らずも知内の狐と契りを結び、子まで設けたため歸鄕の機會を逸した。然るに天明二年國主御獵の爲知内へ赴かれし際、路傍に隱れて行列を拜觀する自分は、不運にも殿の御目に止まり、珍らしき黑狐よ、早く打ち取れとの御諚に我は藩士厚谷作藏の筒先に敢へなく落命、今尙魂魄浮び得ずして此の土に彷徨せり。若し靈を祀るに一祠を以てせば、永く城下の守護に當らん。此の由藩士藤倉八十八に傳へられよ」と。越えて享和二年（二四六二）城下唐津内澤奧に

一社、知内に末社を建てて共に玄狐稻荷と呼んだ。

六、博知石

博知石町の中央路傍に高さ四尺五寸、弧の長さ約一丈五尺程の巖の洞穴があり、人呼んで博知石となし、町名の由來は之に基くと云はれる。

傳說に、武田信廣（松前藩祖）蝦夷統制以前、對岸南部津輕より年々渡來する漁師は、此の石の附近に於て難破船艀からざるを見て、船魂神を勸請せんとし、同輩の中に石工の心得ある德藏なる者に掘鑿を依賴した。德藏は三年の日數を費し互巖に洞穴を穿ち、愈々勸請せんとする前夜、此の洞穴に於て漁師達は酒宴を催し剩へ博奕をさへ試みた。是を目擊せる德藏は、折角精進せる洞窟が一夜にして其の神聖を冒瀆されたのを慨し、其の中に引籠り絕食遂に憤死した。依つて此の石を博知石と呼ぶに至つたといふのである。

第五圖版　博　知　石

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

福山町（二）（松城小學校調）

七、將軍地藏

福山の北に地藏山と將軍山とが、形よく並んで美しい景觀を表してゐる。地藏山には多くの石佛が安置されて將軍山に及んでゐる。八十八ケ所に石佛が配置されてゐるので、地人は八十八ケ所ともいふ靈地である。此の佛像は土地の富豪や、京阪、馬關方面から本道に渡つた航海者、豪商達が、航海の安全を祈願して寄進したもので、多く京阪、馬關で造つて持つて來たもので、石は花崗岩や青御影といふ類で雨露にさらされてゐるが今でも形は少しも變じてない。年號を見るに總べて文久以前のものである。此の中に松前家寄進の掘り不動明王や、花崗岩で七尺餘りの立ち不動明王があつて、嚴めしいお姿をなされてゐる。

地藏山から將軍山に渡る峽にはお穴がある。文久年間、福山町中川原町の質屋輪島某が、念願あつて福山町神明の石工高橋磯吉に賴み掘鑿した。磯吉は輪島の念願を諒として、一人の力にて三ケ月間休みなく働き、掘り了せて善光寺三尊の佛像を刻み、此のお穴に安置した。此の時の山開きは、近村よりも人出多く、半鐘臺を建て、鐘打ちならし賑かなこと想像以上であつたといふ。

此の山の堂祠はお穴の眞向ひにあつたので、その頃佐藤大玄といふ僧が、翌年お穴に石段を造る豫定であつたが遂に出來ずに終つたので、お穴から鐵鎖を下げて攀るに便にしたが、今はそれもない。昔堂祠のあつた所は誠に絕佳の景勝で、有名な鄉土の俳人鶴庵旭の建てた芭蕉碑がある。お堂は後年地藏山麓に建てられたが今はない。最近になつて數年七月中に山開きがあつて此の寺跡で讀經が修せられ、土地の信者がお山巡りをするので賑かである。その頃福山には石工多く、神佛を刻むに巧な人では尾崎武兵衞や池田藤助などが名人といはれた。藤助の刻んだ佛像は八十八ケ所にもある。

此の二つの山は、一つには石佛を多く安置してあるので地藏山といひ、一つには松前氏三世義廣公が戰捷を祈り、將軍

地藏を祀つたから將軍山といふのだと傳へられてゐる。此の地藏尊は甲冑を着てゐる石佛であるが、維新前には地藏堂の中に祀られてゐたもので、今もその跡は殘つてゐるが、こゝに奇しき話が殘つてゐる。明治元年德川家脫走兵が海陸から官軍である松前を攻めた。此の時不思議にも將軍山から數千の矢玉が飛來して大に脫走兵を惱したが、衆寡敵せず福山城は落城した。賊兵は福山入城後不思議な矢玉の飛び來つた將軍山を調べたが、將軍地藏の他に何物もなかつたので此の地藏の仕業となし、無慘にも地藏の眼を刳り、海中に投げ棄てた。翌年世は平定せられたが、一夜漁夫の網に入つて再び發見せられ、今は八十八ヶ所を古刹阿吽寺に安置し信仰を集めてゐる。

八、大石佛

名刹光善寺本堂の西に東面して慈眼溫和な大石佛が安座ましましてゐる。丈は一丈にも及ぶと思はれる。此の佛の由來は天明三年の頃に福山神明町に、大黑柱のかげに坐ると舞臺が見えぬと言はれた大きな芝居小屋があつた。正月十五、六日は興行があつて、十六日は老若男女殊の外多く入場し、立錐の餘地もなく、場內の四方の壁には手燭數多くかけられ、燭光煌々として名優の舞伎に歡樂して餘念なかつたが、此の年は降雪多く、殊に此の日は音もなく雪は降り積もつたので、小屋の屋根は積雪の重みに耐えず烈しい音響と共に觀衆の頭上に落下した。しかし身動きならぬ大入とて俄かに逃げ去られず、今迄の歡樂境は阿鼻叫喚修羅の巷となり、遂に避難しおくれた者が下敷となり、數百の死傷を出した慘事を惹起したのであつた。此の亡者の靈を弔慰せんため有志相謀り、光善寺住職德本氏を訪ひ、神明山から石を切り出して此の大石佛を作り御堂を以て覆ひ石佛堂と稱して、今の石川林檎園の隣地に安置したのであつた。香煙絶えることもなかつたが、土地の衰ふるに從つて詣る者も少くなつたから、明治初年に此の御堂は廢せられ、石佛は善男善女光善寺金佛講中の手によつて引かれ、川原町、小松前町、湯殿澤を通り光善寺の坂を經て今の所に安置せられたのである、經堂の横にある六角塔も昔は石佛堂にあつたものである。

九、墨次郎兵衞

松前藩十世矩廣公の頃であつた。墨次郎兵衞と俗に稱せられた腕利きの武士があつた。（大澤多治郎兵衞と稱す。一說には丸山某とも呼ぶ。）彼は上在石崎の生れで幼時から機敏で他の子供と異なるところがあり、木の枝を伐りその先を尖らして、川を上る鮭、鱒をついて捕へるに百中したといふ。また手拭の如き布を輪にむすび、渕を上る鮭、鱒をその輪をくゞらして布の兩端をしめて捕ふるに巧みであつた。長ずるに及んで士を志し、人を介して藩士某の仲間となり、次第に立身して足輕となつたが、藩主參覲の或る年に墨次郎兵衞の主藩士某も殿の御供をすることになつたので墨次郎兵衞も主について出府することになつた。出府してからの彼は、當時辻斬の流行した時とて彼も本腕を試したいと思つて一夜赤合羽に饅頭笠の身仕度で飄然と松前邸を出た。其の夜は五月雨の墨を流したやうな暗夜だつた。行く程に一人の武士らしき者が彼方から來た。行き交す一瞬抜くよと見るまに彼の武士らしき者の刄のため斬りつけられたが、然し身を交したので傷は輕微であつた。彼の武士は確かに切りつけたと思つて刀を檢するに血の痕はない。彼の武士は墨次郎兵衞の手練に驚嘆して何人なるかを知るため、斬られて歸る墨次郎兵衞を尾行したが、それとも知らず彼は松前邸に入つた。居所を確めた彼の武士は此の腕利きの名を知らんものと、每夜見張つた末遂に相見ることが出來て互に名を名乘り合つたといふ。彼の武士は南部藩のものであつた。是から墨次郎兵衞の名は知れ渡り、やがて士分に取立てられ身分ある士となつたが、忠勤を勵み槍術に於ては非凡の譽があつたといふ。

一〇、寛狩と狭狩の話

昔稲山の白河町に鯛崎寛狩と鯛崎狭狩といふ二人の武士が居た。二人は共に魚釣を好んだ。或日寛狩は辨天島へ釣に行つたが、此の日はどうしたものか一尾もとれない、あきれはてゝ糸をまいて歸らうとしたら、竿に應へがあつたので心躍り引上げたところ不思議にも圓い石が釣鈎にかゝつてゐるので、鈎からとつて何心なく海に投げて此處を切上げ、根部田近くの常々の釣場に行き糸を下げたがこゝも亦今日は一尾も釣れない。どうしたものかと思つてゐる折りしも、手に應ふるから糸を上げたところ不思議にも先に辨天島で釣り上げて捨てた圓い石であつた。餘りの不思議さに家に持ち歸つたが、是は必ず神の仕業であらうと思つて其の石を熊野神社に納めたが、此の石はその時の大さよりだんだん大きくなつたと、坂口某が或人に語つたといふ。

さて又狭狩は度々根部田の方に太公望に行つた。或日例の如く釣りに出かけたが此の日は珍しい大漁であつた。夜も遲くなつたので急いで家路を歩んだ。畫内のあたりまで來たとき、狭狩の家の定紋をつけた提灯を持つた仲間が彼方から來て、坊様〳〵と呼ぶので返事をすると次第に近づいて來て、餘りおそいのでお迎ひに來た。この暗の夜であるから道に躓いては怪我をするから私の刀の小尻を握つてはなしてはならぬといふ。狭狩は實にもと思つて仲間の刀の小尻を握るに毛があるので不思議に思ひ、さては人を欺す狐はこれかと心に考へて離さぬやうにかたく握つた。やがて建石野に來ると仲間はともすると山の手へゆかうとする。狭狩は、そちらは山である、道はこゝであると引戻すことが度々であつたが遂に狭狩の家に歸りついた。玄關口で今戻つたと家の仲間を呼ぶと彼の迎へに行つた仲間は身をもだいて逃げやうとする。狭狩は放さじと小尻を愈々確かと握つた。仲間が出て來て見ると一人の仲間が狭狩に小尻を握られて苦しんで

ゐるので驚いた。狭狩は仲間に命じて此の客は大切である小屋に入れて表から錠をしておけと命じたから、件の仲間は今はにげられず一夜を小屋に明かした。翌朝狭狩は件の男を小屋から引きだしたところ狐であつて刀の小尻と見せたのは尾であつた。狭狩は汝は幸に自分の手に抑へられたから命を助けてやるが、此の後は必ず人を欺く行ひをしてはならぬとこん〳〵と諭して放してやつた。

一一、阿吽寺の不動尊

古刹阿吽寺の御本尊は弘法大師の自作と傳へられる靈驗著しき御佛である。此の不動尊の御姿を表はした御守りを身につけてゐると、不思議にも災難をのがれることが出來ると言はれてゐるので尊信極りない。昔此の寺の住持が此の明王に供ふる御神酒を寺男に買はせた。寺男は御神酒を買求めて寺の下の新坂橋まで來ると、生れつき酒が好きなので急に呑みたくなりどうしても我慢が出來ない。詮なく惡いこととは思つたが、不動尊に奉上る心で川水に少しばかり流して幾分心に安んじ、德利に口をつけて口呑し、幾分德利に殘して素知らぬ顔をし棚に上げて置いた。翌朝になつて住持は御神酒を不動尊に供へようと昨夜寺男に命じて買はせた酒を棚から持ち出したところ、餘り量が少いので不審に思つて寺男を叱責した。寺男は正直に昨夜の罪を白狀してあやまつたが住持は其の不行狀を責めて許さない。すると奧の內陣から嚴かに「御神酒は受けた、寺男を責むるな」と聲がした。それはこの不動尊の御聲であつた。そのため寺男は住持に許された。或る年正月に此の尊像や數多くの御佛に鏡餅をお供へしたが、毎夜〳〵鼠が出て此の鏡餅を食ふので住持は殆ど防ぐ術もなく困じ果て、或る朝明王の前に坐して何分今夜から鼠がお供へしてある餅を食はぬやうにと御願ひした。其の夜も更け翌朝何心なく常の如く住持は勤行に明王の御前に行つたところ、御手にせられてあつた天國の寶劍に

鼠が見事にさゝれてゐた。之を見て今更に靈驗のあらたかなのに恐れて代劍を差上げて、天國の寶劍は別に秘藏した。その後は絶えて鼠は餅を食はなかつたといふ。

此の尊像の御前で昔から葬式を行ふことを愼しんでゐるが、或る時某といふ人が此の寺の下寺で葬式を營み、その歸途この不動尊の前に御詣りした、すると棺に火がうつり、消さうとしたが消えないで遂に燒死したと語つた人があつた。

一二、廣峯大明神

御維新の頃に松前氏の家老で松前監物といふ方があつた。此の家の祖に村上廣峯といふ廉直の人があつた。十世矩廣公の頃であつた。殿樣は年若く行狀修まらず亂政で酒色にふけつて士民は苦んだ。廣峯は六十餘歳であつたが、主家を思ひ度々諫言申上げたが更に御聞き入れがない。廣峯が御前へ出ると、また老爺が來たかと澁面をせられて更に御改め下さらぬ。或日廣峯は見るに忍びず、藩主の御居間の次の間にまかり出てまた言を極めて御諫言申上げたが、些しも顧み下さらぬので、廣峯は、誠に情けないことである、斯くまで御諫めしてもお聞き下さらぬからには、此の見苦しい世に生きて永らへる命こそ惜しい、今は是まで、村上廣峯の腸を御覽下されと、腹かき切つて腸を白扇にのせて差出し、村上廣峯一命を捨てゝ御諫め申すといつてその場に言切れたので、流石に藩主も前非を後悔せられて其の後は仁政の殿となり永く世を治められた。また廣峯には後嗣がなかつたので殿樣の弟の方を嗣とされて其の家を後に傳へられたが、此の家から名士が多く出たといふ。後に在所の人々相謀り、寅向の上、山の上町に祠を建てて祀つたが、その祠を建てる時に城に向け西に面して建てようとして柱をたてたが、城を見るを望まぬとて一夜のうちに柱は南面してゐたので、祠は遂に南面に建てられた。はじめは法華寺日貞上人別當で廣峯大明神といつたが、後に廣峯神社と稱した。この祠は今はないが、社は腐つてゐて祠の下の敷は今も廣峯樣の敷と世人は呼んでゐる。

一三、桂の木と大蛇

神明町德山大神宮の御本殿の横に、何百年か經たと思はれる桂の巨木がある。御神木になつてゐるが、手を左右に上げて連ねて此の木の周りに立てば十人も並べる大きい木である。

昔この宮の別當白鳥某の枕頭に一夜白髮の翁が現はれて、我は此のバツコ澤の奥に住居する大蛇である。此の澤を出て大海に乘り出し、やがては天に昇り龍となり度いと常々つとめてゐるが、我の桂の木は大きくて枝がさはりとなつて出られないから、どうか我の木を切つてくれとの夢を見た。けれども大蛇が大海に出る時は、雷を呼び大雨を降らし大洪水となり、此の波に乘つて出るものといふので別當は大蛇を大海に出し度くは思ふが、そのため福山の市街が大洪水に流されるので遂に此の樹を切らずに今に至つたといふ。

一四、五百羅漢

法幢寺の松前氏墓所の直ぐ上は今畠となつてゐるが、そこに月誧山宗圓寺といふ寺があつた。此の寺は七世公廣公が先考盛廣公の冥福を祈つて寛永七年法幢寺住職宗堢和尙に命じて建立されたものである。それ故に盛廣の諡名月誧山宗圓大居士から山號寺號をとつて月誧山宗圓寺といつたといふ。

さて宗堢和尙は藩命を蒙つたが、如何なる規模に作つたらよいかと種々に考へた末に、木造の大佛を造つて供養するのが何よりと心付いたが、然しどこでどうして造つたらよいかと考へてゐた。會々渡る人が津輕の今別は大きな樹の木のあるところであるから、彼處へ行つて見るとよいと言つたので人をやつて注文することになつた。今別には淨土宗の

某寺といふのがあつた。此の寺に貞傳といふ年若い僧があつたが、中々の出來物であつたので村人の敬信を集めて居つた。貞傳はその年の始に、今年雪が消えたたら松前から大佛を造る木の注文が必ず來るから、今雪のある中に枝の澤の奥にある楡の大樹を伐り、山出ししておいたらよいと村人に言つた。德高き貞傳の言ふことであるから、村人は此の言を聞き入れ、その樹を伐り橇をもつて山出しにかかつたが、中途まで來ると何分木が大きいので重みのため橇は雪に喰入つて一寸も動かぬ。村人は困じ果てゝ此の事を貞傳の庵に來て告げた。すると貞傳はさもあらう、私が行つて動くやうにしてやらうとて其の場所に行つて御經を誦じながら橇の周圍を三度めぐり、今度は輕くひけるからといふので村人に牽かして見ると、易々と引けるので村人は愈々貞傳を尊信した。やがてその楡の木は貞傳の寺内に運ばれて保管された。春ともなり雪のとけそめた頃、奇しくも松前から貞傳の豫言した通り、大佛にする用材の注文の使者が來たので村人は又びつくりした。そして彼の楡の巨材は松前の使者に賣渡されたが、貞傳は請はるゝまゝに海上穩和な日に、楡の巨材とその大きな枝とを船積にして使者と共に今別を船出して松前に渡つた。それから貞傳は圓滿慈悲の大佛を刻んだが、安座の御佛の高さが一丈余で誠に見事なので信仰が厚かつた。やがて本堂に安置され枝をもつて五百體の羅漢像を一心に造ることになつたが、三百八體を刻んだ時に木の枝はつきてしまつた。この羅漢の顏はさまざまで、何れも佛らしい佛樣であるといふので信仰を集めたが、中には亡者となつた自分の肉親の者の顏に似てゐる羅漢もあるといふので、それを我が親とし、或は子として崇めまつる者も多かつた。そして此の風は今日にまで及んでゐる。貞傳は念願である五百體を遂に刻み得ないで入滅したが、後になつてバツコ澤の奥に桑の大きいものが多いのを見つけて伐り出し、佛師に賴り百九十二體を刻ませた。併し大きさ二尺程で前のよりも小さく顏もみえない樣な御姿で、貞傳の作とは似もつかぬものが出來上つたといふ。宗圓寺は明治三十七、八年頃小樽に移轉したので、大佛も五百羅漢も今は福山にない。

一五、鴨緑江の柳と龜石

福山公園松前神社前の池邊に大きな柳がある。この柳は豐臣秀吉の朝鮮征伐の時に彼の地に渡つた宗氏が、二、三寸の柳を數多持つて來たのを、五世慶廣公が名護屋の陣營に行つた時、秀吉公から拜領して松前に持歸り庭前に植ゑたものだといふ。またその根元に大きな龜石がある、此の龜石は光善寺第二十四世淨譽上人が山門を營む心から、毎年多になり閑散な時に漁師の信徒を集め、折戸濱、根部田濱から龜石を橇で運ばせた。大分石も集まりいよ〳〵山門を營むことになつた時、淨譽上人は入寂されて其の事は止んだ。後二十六世の上人の時に鐘樓堂を移轉して鐘堂をかねた山門が作られ、淨譽上人の志は果されたが、龜石は遂に使用されずに終つた。此の石の一つを持つて來て風致を添へたのがあの根元の龜石であるといふ。

一六、村正の刀

御維新も近い頃である。戸澤某といふ足輕がゐた。此の者は内地で人を殺し福山へ逃れて來て何喰はぬ顏をして善人になりすましてゐた。生れつき小才のある者であつたから間もなく某氏へ婿入りをし、後仕官して足輕となり實直に働いてゐた。併し酒好きのためいつも貧乏してゐた。

或る時、金策に窮して日頃知合の某寺の僧侶が小金をもつてゐることを知り、この僧から若干の金を借りた。日頃親しき仲なれば僧も數日の間といふから貸したが、戸澤は容易に返さないので僧は戸澤に遇ふ毎度に催促してゐた。或晩湯殿澤の經堂寺横にある西館へ上る坂を此の僧が通りかゝると、偶々戸澤に行き遇つたのでまた返金を迫つたが、戸澤

は道では話もならぬから其處のそば屋へ入つて話をしようと僧を誘つた。二人はそば屋に入り、そばを食べながら妥協が出來て返金の日を定め打揃つて機嫌よく外に出た。その夜は眞に暗の夜であつた。僧は提灯を持つてゐたが、戸澤は餘りに物凄い夜であるから寺までお送りするといふので、寺町に通ずる羽黒様のお宮の前の通りを進んだ。此處は人家のない谷間である。

戸澤は提灯持は先だとて、僧を先にして自分は後を歩いてゐた。光善寺の墓場に出る土橋の上に來た時に、戸澤は不意に僧の持つてゐた提灯を打消した。僧は驚き逃げんとしたが、時已におそく戸澤は後から一刀のもとに袈裟掛に僧を切つてしまつた。そして死體を傍の草深い谷間に投げ捨てゝ我が家に歸つた。

翌朝佐藤作右衛門といふ石工が、光善寺の墓を造作するため行つて働いてゐると、烏が物狂はしげに騒ぐので谷間に下りて見ると、僧が切られて死體となつてゐる。驚いて此の由を町役所に訴へ出た。だん〳〵詮議して見ると、どうも戸澤某の仕業らしいと云ふことになつた。戸澤はお調べを受けると直ぐ白狀したので打首になることになつた。其の時の上使は保田甚八といふ藩士であつた。戸澤の所持してゐる刀を見ると中々の業物であつたので己の家に持ち歸つた。さて甚八に一人の娘があつたが、その頃崇廣公が江戸から連れて來られた武士に村緒五郎といふのがあり、仲々出來物であつたので、甚八は娘を五郎のもとに嫁がせることになつた。嫁入る時に娘の守り刀として彼の戸澤の所持してゐた名刀を與へてやつた。村緒は中々腕利きだが飲酒家で、然も酒癖の甚だよくない人物であつた。明治元年春の頃だつた。村緒は自宅の奥の一間を大工某といふ者に貸してゐたが、此の大工は評判の孝行者で母と二人暮しである。此の大工某と妻との間に不義の行ありと村緒は疑を持つてゐた。醉うて歸宅すると日頃の疑を妻に物語つたが、妻はかゝることはないと答へたが聞き入れない。村緒は逆上して愈ゝ亂暴するので大工某も堪りかね、自分も潔白であることを辯解して村緒の心を鎮めようとしたが、村緒は益々狂ひ立ち妻が嫁入りの時持參したかの名刀を持ち出し、大工の止めるのも聞かずに妻を切り倒してしまつた。血を見るといよ〳〵興奮して逃げまどふ大工にも切りつけたが、大工はやうやくにして裏口から逃げだした。

村緒は憤怒やるかたなく、不圖見ると大工の母が怖れふるへて居る。逃げんとするのを一刀に切り倒した。それから妻の里方である保田甚八の家に行つた。折柄甚八は留守中で、甚八の妻が玄關に出るとそれを一刀に切らんとしたが、甚八の妻は武道の嗜みがあつたので、長押にかけてある薙刀をとつて立向はんとして、薙刀に手をかけた刹那後から切られた。村緒は愈ゝ猛り立ち、日頃より親しき友、新田某をも切らんものと出かけた。新田某は學問があり數多の弟子を集めてゐた人であつて、此の夜も沐浴人の弟子が居たところへ押入つたのであるが、弟子たちは逃げ去つてしまつた。村緒は新田に切り付けたが、燭鈎に妨げられて切ることはできない。次に新田の妻に切りつけたが、僅かに疵がついた位であつた。新田は非凡の腕であるから尋常に立ち合ふと村緒はかなはぬので、此の家を引き上げ我が家に歸つた。此の騒ぎは忽ち届け出されたので、役所から松方某といふ人が打捕りに向かふことになつた。其の頃中川原に貸座敷業を營む博奕打ちの親分松河屋といふものが目明しをつとめてゐた。彼は松方の命で捕縛するため村緒の家に行き樣子を見ると、村緒は名刀を研ぎ手入れの最中であつたが、松河屋やその子分等に抗し得ないで捕はれた。そして數日の後に建石野の首切澤で打首にされたが、一時は非常な騒ぎであつたといふ。彼の名刀は村正の刀であつたとのことである。

一七、首切澤　　松山町

建石野に首切澤といふ所がある。死刑を行ふときには皆此處で打首にしたといふ。明治二年松前藩が一旦幕軍に占領された福山城を回復した後に、脫走兵に組した者を詮議して捕へた。十數人もあつたであらう、その中に今の警察のあるところにあつた牢の前に莚をしき其の上に坐らせられ、荒繩で後手に縛られ、檜板に首を結び付けられたまゝ五日間晒し者になつた二人があつた。この二人は脫走兵に內通して一時は仲々の勢で金紋ちらしの駕籠いた程であつたが、晒し者になつてから日々に惡罵され、わるさをされて憐れな姿であつた。死刑の日になると裸馬に俵を鞍にして之に乘せられ、理由書をした板を持つたものゝ後について、町中を引きまはされ、建石野の首切澤に連れて行かれた。その日は陰慘な霧深い日であつた。首切澤には莚張りの小屋があつて其の中に入れられた。やがて深く掘られた溝の前に引き出されて首を切られた。この二人は脫走兵に內通した町人で皆に憎まれてゐたので、誰一人憐みをかけるものもなかつたといふ。

一八、劍道の達人

松前藩士に村田小藤太忠氏といふ人と和田藤兵衛といふ人があつた。幕末から明治初年にかけての劍道の達人である。一日此の二人は立合ふことになつた。

互に隙をねらつたが仲々打入る隙もない。たゞ二人は構をとつた丈であつた。やがて如何なる隙を見たのか小藤太は、藤兵衛に面と打ち込んだが藤兵衛は確かに受けとめたと觀衆は見た。併し藤兵衛は參つたといつて鄭重に挨拶をして引退つた。並み居た人々は不思議に思つて「あなたは確に受け止めたのに參つたといふのは どうしたのか」と訊いたら「面は受け止めたが其の次にすばやく入つた胴を受けとめることは出來なかつた」といつた。人々の目には太刀先が鋭く鮮りに速く、胴を打つた太刀を認めることが出來なかつたのだといふ。

一九、三　本　松

松城町の馬坂の上に石を積んだ小高い所がある。今若い松が繁つてゐる。昔は此處も城內で、此の下に濠があつて橋をかけてあつたが、石垣の高さ七八間もあらうと思はれる位高いものであつたといふ。此處に三本松があつた。天を摩すやうな大きな木で遠くからも見られ、北側のは一番大きくて父、中央のは一番小さくて子供で南側のは二番目に大きいので母であるといふ。兩側の親松は中央の子松に夏の暑さを防いでやり、冬の日は枝をもつて寒風を防ぎかばひ、秋の月など親子三人は睦じく語り合ふのだといふ。此の三本松は今は枯れて無い。

二〇、義經と辨慶

馬形から見ると、將軍山の東面した中腹に中央のくびれた大きな岩が見える。此の岩は辨慶が背負つた岩で、くびれてゐるのは荷繩のあとだといふ。また將軍山の頂に露出した岩があり、此の岩の表面に二の字の形が喰込んでゐる。これは義經が足駄をはいて步いたあとだといふ。此の山の何里か奧に平地があつて、昔そこで義經と辨慶が舟を作つたといひ傳へられて居る。

福島村（松前郡福島村役場調）

二一、神託による改村

福島村は往昔アイヌ語で「ヲリカナイ」「シカオヒ」「キルカナイ」と唱へて一定しなかつた。ところが寛永元年正月十六日（今より約三百十年前）字濱中に鎭座する月崎神社の祭神月夜見命の神託に依つて福島村と改稱し、毎年一月十六日を改村記念日として同神社に參拜することになつた。當時不漁凶作のために戸數も四十戸位に減少したのであつたが、かく神託によつて村名を改めてから村勢が次第に繁榮して今日に至つた。

二二、乳房檜

本村川濯神社の境内に形狀乳房に似た檜がある。同社は明應元年に創建されたもので樹齡は不明であるが、相當年數を經たものと認められる。産婦が之に祈る時は必ず靈驗があると稱され、乳乞ひの祈願をなすものが頗る多い。

第六圖版　乳房檜

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

二三、船隱し洞窟

元和三年より寛永元年まで秋田の者が私かに渡航して、船をこゝに繋ぎ、山を越えて綱配野に至り金を採掘したことが露顯し、松前藩では蠣崎右衛門源利廣を出張させて器具を沒收し追放した。そして金掘り連は日本へ（當時内地を日本と稱した）へ逃げ歸つたといふ。

第七圖版　船隱し洞窟

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

二四、クヅラ森

福島村字館の澤に在る。天正三年五月十三日、當村館古山の館主常盤井治部大輔藤原武衡が、館の澤館主である蝦夷の酋長クヅラケンと戰ひ之を亡した。其の死骸及び所持品を埋藏した所がこのクヅラ森であると云はれる。

知内村

（上磯郡知内村役場調）

二五、姥杉

本村字元町姥杉神社の舊跡に在る。周圍十二尺全長十三間あつて樹幹十尺位のところより枝條がある。樹幹の中央は東北に面し、地上三尺にして特徴のある樹瘤がある。其の形は恰も乳房のやうなので人呼んで乳瘤といふ。樹齡凡そ四百餘年と認められる。

この樹は古來よりの傳説を有してゐる。即ち乳不足に苦しむ人は、乳兒を懷に此の杉に祈願し、若干の米を該樹に供へ後それを受けて家に歸り之を炊いて食するときは、効

第九圖版　姥杉

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

第八圖版　クヅラ森

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

福島村は往昔アイヌ語で「ツリカナイ」「シカオヒ」「キルカナイ」と唱へて一定しなかつた。ところが寛永元年正月十六日（今より約三百十年前）字濱中に鎭座する月崎神社の祭神月夜見命の神託に依つて福島村と改稱し、毎年一月十六日を改村記念日として同神社に參拜することになつた。當時不漁凶作のために戸數も四十戸位に減少したのであつたが、かく神託によつて村名を改めてから村勢が次第に繁榮して今日に至つた。

二二、乳房楡

木村川濯神社の境内に形狀乳房に似た楡がある。同社は明應元年に創建されたもので樹齡は不明であるが、相當年數を經たものと認められる。産婦が之に祈る時は必ず靈驗があると稱され、乳乞ひの祈願をなすものが頗る多い。

第七圖版　船隠し洞窟

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

二三、船隠し洞窟

元和三年より寛永元年まで秋田の者が私かに渡航して、船をこゝに繋ぎ、山を越えて綱配野に至り金を採掘したことが露顯し、松前藩では蠣崎右指門源利廣を出張させて器具を沒收し追放した。そして金掘り連は日本（當時内地を日本と稱した）へ逃げ歸つたといふ。

第六圖版　乳房楡

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

二四、クヅラ森

福島村字館の澤に在る。天正三年五月十三日、當村館古山の館主宮盤井治部大輔藤原武衡が、館の澤館主である蝦夷の酋長クヅラケンと戰ひ之を亡した。其の死骸及び所持品を埋藏した所がこのクヅラ森であると云はれる。

知内村

（上磯郡知内村役場調）

二五、姥杉

木村字元町姥杉神社の舊跡に在る。周圍十二尺全長十三間あつて樹幹十尺位のところより枝條がある。樹幹の中央は東北に面し、地上三尺にして特徴のある樹瘤がある。其の形は恰も乳房のやうなので人呼んで乳瘤といふ。樹齡凡そ四百餘年と認められる。

この樹は古來よりの傳説を有してゐる。卽ち乳不足に苦しむ人は、乳兒を懷に此の杉に祈願し、若干の米を該樹に供へ後それを受けて家に歸り之を炊いて食するときは、効

第九圖版　姥杉

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

第八圖版　クヅラ森

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

驗著しく忽ち乳量の增加すること頗る妙であると謂ふのであつて、附近の村民一般は深く之を確信してゐる。

この樹は文應年間本村の神官大野重一の妻の遺骨を埋葬した箇所に記念として植ゑたもので、村民達は之を姥神と稱して敬ひ祀つてゐる。姥杉神社の稱はこれによつて起つたのである。

二六、雨石松

知内村字元町雨石神社の舊跡にある。周圍十一尺全長十五間の巨松であつて、樹幹五尺、三叉と寫り東南西の三方に岐れて居る。内西方の一枝は枯損して只二枝（枝といふより寧ろ幹に近い）を存するのみである。樹齡は四百餘年と思料され、人呼んで雨乞ひの松と云つてゐる。村民の信仰最も厚く旱天數十日に渉り、農漁村民等難澁の際、この樹に祈願し、神酒を供して之を祭れば必ず週日を出でずして大雨沛然として來ること間違ひなしと傳へられて居る。姥杉と相對して好一對の奇木といふべきである。この樹は木村の神職大野重敎氏の祖重一（了德院）なるものが文應元年百五歲を以て歿し、此處に葬られたのであるが、後其の記念として植樹したものであると云ふ。村民は之を祀つて、雨石神社と稱して居る。（雨石神社は村社に合祀されてゐる。）

第十圖版　雨石松
昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

斯く古き歷史を有し村民一般の信仰も深いところから、この樹の保護もよく行屆き、現在の樣な老齡を保つことが出來たのであると云はれる。

二七、矢越岬

知内村の西南端の稍ゝ海中に突出したところを矢越岬といふ。海拔百餘尺の斷崖絕壁で波濤の激しく碎ける所、頗る凄絕の感を起さしめる。

寶曆年間荒木大學頭が幕命を奉じて木道檢分のため渡航し、一日武運長久を禱らんため、試みに松前郡福島の丘より、しばし祈念を籠めて一箭を放つたところが、其の箭は虹を畫いて遙か前方の岬を越えて、一つの巖上に立つた。依つて之より矢越岬と名づけたと云ふことである。なほ岬の上に一小祠があるが、之は此の時の創建にかゝり矢越八幡宮といふ。靈驗頗る顯著なりといふので、夏季入漁の漁夫の信仰が頗る厚い。

茂別村（上磯郡茂別村役場調）

二八、矢不來天滿宮の御神體

文和年間、モンベツ海岸（今の矢不來）に稀代の大松一株が、波のまに〳〵漂著した。相集まつた蝦夷共は頗る奇異に思ひよく視ると、その枝と枝との間に丈二尺位の木像のあるのを發見して大いに驚いた。これこそ我等を守護する神樣であらうといふので、相謀つて矢不來の地に勸請した。蝦夷達は、もとより菅公の像とは知る由もなく、只その御姿の神々しさに打たれ、地名ヤギナイをカムイヤモンケナイと改め厚く之を尊崇した。

なほ文和は今から約五百六十年前の年號である。カムイは蝦夷語で神樣の意。この松は今は存しないが、其の子松が

驗著しく忽ち乳量の增加すること頗る妙であると謂ふのであつて、附近の村民一般は深く之を確信してゐる。

この樹は文應年間本村の神官大野重一の妻の遺骨を埋葬した箇所に記念として植ゑたもので、村民達は之を姥神と稱して敬ひ祀つてゐる。姥杉神社の稱はこれによつて起つたのである。

二六、雨石松

知内村字元町雨石神社の舊跡にある。周圍十一尺全長十五間の巨松であつて、樹幹五尺、三叉と爲り東南西の三方に岐れて居る。内西方の一枝は枯損して只二枝（枝といふより寧ろ幹に近い）を存するのみである。樹齡は四百餘年と思料され、人呼んで雨乞ひの松と云つてゐる。村民の信仰最も厚く旱天數十日に渉り、農漁村民等難澁の際、この樹に祈願し、神酒を供して之を祭れば必ず週日を出でずして大雨沛然として來ること間違ひなしと傳へられて居る。姥杉と相對して好一對の奇木といふべきである。この樹は本村の神職大野重教氏の祖重一（了德院）なるものが文應元年百五歲を以て歿し、此處に葬られたのであるが、後其の記念として植樹したものであると云ふ。村民は之を祀つて、雨石神社と稱して居る。（雨石神社は村社に合祀されてゐる。）

第十圖版　雨石松

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部檢閲濟

斯く古き歷史を有し村民一般の信仰も深いところから、この樹の保護もよく行屆き、現在の樣な老齡を保つことが出來たのであると云はれる。

二七、矢越岬

知内村の西南端の稍ゝ海中に突出したところを矢越岬といふ。海拔百餘尺の斷崖絕壁で波濤の激しく碎ける所、頗る凄絕の感を起さしめる。

寶曆年間荒木大學頭が幕命を奉じて本道檢分のため渡航し、一日武運長久を禱らんため、試みに松前郡福島の丘より、しばし祈念を籠めて一箭を放つたところが、其の箭は虹を畫いて遙か前方の岬を越えて、一つの巖上に立つた。依つて之より矢越岬と名づけたと云ふことである。なほ岬の上に一小祠があるが、之は此の時の創建にかゝり矢越八幡宮といふ。靈驗頗る顯著なりといふので、夏季入稼の漁夫の信仰が頗る厚い。

茂別村　（上磯郡茂別村役場調）

二八、矢不來天滿宮の御神體

文和年間、モンベツ海岸（今の矢不來）に稀代の大松一株が、波のまに〳〵漂著した。相集まつた蝦夷共は頗る奇異に思ひよく視ると、その枝と枝との間に丈二尺位の木像のあるのを發見して大いに驚いた。これこそ我等を守護する神樣であらうといふので、相謀つて矢不來の地に勸請した。蝦夷達は、もとより菅公の像とは知る由もなく、只その御姿の神々しさに打たれ、地名ヤギナイをカムイヤモンケナイと改め厚く之を尊崇した。

なほ文和は今から約五百六十年前の年號である。カムイは蝦夷語で神様の意。この松は今は存しないが、其の子松が

成長して直徑八尺に及んでゐる。

二九、矢不來の由來

長祿年間、茂別家政（下國安藤八郎式部大輔と稱す）が矢不來に館した時、偶〻蝦夷胡沙魔允の亂が勃發し、勢甚だ猖獗であつた。志苔與倉前字倶岸脇木松前等一帶の館主は皆賊勢に抗しかね或は死し或は遁れた。この時獨り下國の家政、上ノ國の蠣崎氏のみ敢て屈しなかつた。

家政はこの役に於て蝦夷を引き受け大いに戰つたが、彼等の毒矢は一箭も館まで届かず、味方の放つ箭は續々醜夷の胸を貫いたので、さしもの夷軍も遂にこの館を拔くことが出來ず敗走した。家政及郎黨等はこの奇瑞を見ていたく感激し、これ偏に奉祀する所の菅公神靈の加護によるものであるとした。以後ヤンケナイの地名をなまつてヤギナイといつたので、矢不來の字を配して矢不來（やきない）と呼ぶに至つたといふことである。

第十一圖版　矢不來天滿宮

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部許可濟

三〇、御神體の靈異

何時のことであつたらうか、下國氏の某の代に天滿宮の御神體の破損が餘り甚しいといふので修理することになり、京師のなにがしといふ名工に之を托した。工師は之を見て讃嘆措かず、その工作のいかにも巧みで、生けるが如き御神容にひたすら恐懼してゐた。齋戒沐浴精進の結果成るに及んで之を下國氏に報じた。乃ち重臣某がお迎のため京に上り、かの工師の許を訪れた。工師の「こなたへ」といふ案内のまゝに奥まつた一室に入ると、あら不思議、五基の寸分違はざる御像が床に置かれてあつた。某は不思議に思つて「これは一體どうしたことです」と問ふと、工師は「御神體があまり巧みに出來て居たから、恐れ多い事ですが斯道研究のために四體を模造しました。試みに御身の眞と信ずる一體をおとり下さい」といふた。某は主家の守護神とは云ひながら、目のあたり拜したことは極めて稀く、殊に心得なき彼は暫し躊躇して見てゐたが、その中の一體がその御目をギロリと動かし「我こそ」と云つた樣に覺えたから早速之であると指した。工人も大いに驚き「專門の自分が見てすら兎もすれば間違ふのに君はどうして之を知り得たか」と云つた。そこで某はかく〳〵の次第とその話をしたところが、工人も吃驚して今さらながら神威のあらたかなのに感じ合つたといふことである。

因みに御像の兩眼は黄金である。

三一、花輪（かわ）の鳥居

この鳥居は今も舊矢不來天滿宮の社地に殘つてゐる。明治以前函館の國領某が之を運び來つたが、揚げるのに困難であつたので遂に海中に放棄した。それを後年何人かがこゝに建設したものであると傳へられる。此の鳥居の上部を見ると大小の石塊が累々として乘つてゐる。これは深夜他人に見られない樣に、後向きに石を投げ、鳥居の上に乘れば卽ち願望が叶ふといふ言傳へがあるからである。

三二、社殿の不思議

ある年、村民達が此の社殿を道路に向けて建て、翌日行つて見ると一夜のうちに社殿は南に向きを變じて居る。人々は驚いて色々な方法で舊のやうに直さうとしたが、いつかな動かず、困却の折柄、通りかかつた一老人がこの態を見て

成長して直徑八尺に及んでゐる。

二九、矢不來の由來

長祿年間、茂別家政（下國安藝八郎式部大輔と稱す）が矢不來に館した時、偶〻蝦夷胡沙慶允の亂が勃發し、勢甚だ猖獗であつた。志苔與倉前字俱岸脇本松前等一帶の館主は皆賊勢に抗しかね或は死し或は遁れた。この時獨り下國の家政、上ノ國の蠣崎氏のみ敢て屈しなかつた。

家政はこの役に於て蝦夷を引き受け大いに戰つたが、彼等の毒矢は一箭も館まで届かず、味方の放つ箭は續々醜夷の胸を貫いたので、さしもの夷軍も遂にこの館を拔くことが出來ず敗走した。家政及郎黨等はこの奇瑞を見ていたく感激し、これ偏に奉祀する所の菅公神靈の加護によるものであるとした。以後ヤンケナイの地名をなまつてヤギナイといつたので、矢不來の字を配して矢不來（やぎない）と呼ぶに至つたといふことである。

三〇、御神體の靈異

何時のことであつたらうか、下國氏の某の代に天滿宮の御神體の破損が餘り甚しいといふので修理することになり、京師のなにがしといふ名工に之を托した。工師は之を見て讃嘆措かず、その工作のいかにも巧みで、生けるが如き御神容にひたすら恐懼してゐた。齋戒沐浴精進の結果成るに及んで之を下國氏に報じた。乃ち重臣某がお迎のため京に上り、かの工師の許を訪れた。工師の「こなたへ」といふ案內のまゝに奥まつた一室に入ると、あら不思議、五基の寸分

第十一圖版　矢不來天滿宮
昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部許可濟

違はざる御像が床に置かれてあつた。某は不思議に思つて「これは一體どうしたことです」と問ふと、工師は「御神體があまり巧みに出來て居たから、恐れ多い事ですが斯道研究のために四體を模造しました。試みに御身の眞と信ずる一體をおとり下さい」といふた。某は主家の守護神とは云ひながら、目のあたり拜したことは極めて尠く、殊に心得なき彼は暫し躊躇して見てゐたが、その中の一體がその御目をギロリと動かし「我こそ」と云つた樣に覺えたから早速之であると指した。工人も大いに驚き「專門の自分が見てすら兎もすれば間違ふのに君はどうして之を知り得たか」と云つた。そこで某はかく〳〵の次第とその話をしたところが、工人も吃驚して今さらながら神威のあらたかなのに感じ合つたといふことである。

因みに御像の兩眼は黃金である。

三一、花幽（かゆう）の鳥居

この鳥居は今も舊矢不來天滿宮の社地に殘つてゐる、明治以前函館の國領某が之を運び來つたが、揚げるのに困難であつたので遂に海中に放棄した。それを後年何人かがこゝに建設したものであると傳へられる。此の鳥居の上部を見ると大小の石塊が累々として乘つてゐる。これは深夜他人に見られない樣に、後向きに石を投げ、鳥居の上に乘れば卽ち願望が叶ふといふ言傳へがあるからである。

三二、社殿の不思議

ある年、村民達が此の社殿を道路に向けて建て、翌日行つて見ると一夜のうちに社殿は南に向きを變じて居る。人々は驚いて色々な方法で舊のやうに直さうとしたが、いつかな動かず、困却の折柄、通りかかつた一老人がこの態を見て

「こは神意なり、神意に悖るは恐れあり。御神もと津軽南部より漂ひ參りしもの故、その地の方御氣にかゝり、かくは向かせ給ふなるべし」と申したので人々「さもありなん」といふ譯で止めにした。後火災にかゝり再建した時も亦同様のことがあつたと傳へられる。

三三、犧姫物語

茂邊地川には鮭を産すること多く、夷人は之を捕へて生計を立てゝ居た。後年下國氏がこゝを領してからも領民達はこの川の鮭を得て居たが、ある年のこと栗の實が落ち川の面に秋の月影の碎くる頃となつても、鮭が一尾も川に入らず、かゝる事が數年に及んだから、これを以つて生計を立てゝ居る茂邊地の住民達は非常に困つた。偶々領主の夢枕に立つて「汝の愛姫を海神に捧げれば漁は前年に倍するであらう」と告ぐるものがあつた。驚き覺めて後は怏々として樂しまなかつた。此の家の姫は芳紀十八、容姿は花のやうであつた。父君の物思ひに耽けるのを見ては心安からず、屢々そのわけを父に質ねた。ある夜父は遂に先夜の事を明かした。そして「お前は何にも心配することはない」と告げた。姫は之を聞いて暫し熟考してゐたが、やがて「領民多數のため犧牲となりませう。どうぞ先だつ不幸をお許し下さい」と驚き止めようとする父の手を振切つて戸外に出た。斷崖の上から望めば巴港の水は深く藍を湛へ、折柄の秋月に照らされて銀鱗の躍るが如く見えた。姫は合掌して領民並に父君の爲に祈ること數時、やがて數十丈の斷崖より身を躍らした。急を聞いて走り來つた家の子郎黨達が岸に至つて見ると、姫の姿は既になく、海面には唯白沫の散るのが見えるだけであつた。この後茂邊地から鮭を産することは舊に倍するやうになつたとのことである。

三四、道明風

安東盛季が南部義政に敗れて渡村するとき、小泊より乗船したけれども如何にしても船が出なかつた。氣を焦つて居つたところが、ふと陣中に重代の如意輪觀音（貞任より傳はる）を忘れたことに心付き、直ぐに人を忍ばして無事之を入手した。偶々從ふ所の法師道明といふものが、この觀音像に對し心魂籠めて祈つたから巽風（所謂ヤマセ）が忽然として吹起り、無事矢不來へ着くことが出來た。時は嘉吉三年十二月十日のことであつたから、今でも十二月十日の巽風を道明風といふさうだ。

因みに右觀音は、今の矢不來天滿宮の社地である觀音澤に堂を立てゝ祀り、後にその場所を觀音澤と稱へた。此の觀音像は慈眼寺の福山移轉と共に福山に至り、後廢寺となるに及んで福山阿吽寺に安置したとのことである。

上磯町 （上磯郡上磯町役場調）

三五、三ツ谷村の起り

年代は不詳であるが、宗山甲斐守並にその次男丈之助が家老平野與八郎、平野善五郎、平田清三郎、松本平八郎其の他士卒數十名を引率して出羽國から渡來し、當村字樓岱の麓と云ふ所へ來て居を構へ宗山村と唱へた。當時こゝに三柱の神社と稱する一社があつた。天正元年九月十日平野善五郎が此の宮へ鰐口一個を奉納し、此の時始めて大祭を行つた。その後幾年か經て松前家と激戰に及んで遂に打負かされ、宗山父子共に相原周防守の館へ逃走して潜伏した。其の時家老平野與八郎は志海苔村へ落行き、松本平八郎の一子は龜田村へ落ちて行つた。其の際丈之助に一子があつて、此の子

に再び旗揚げさせようとして系圖一卷と一刀を添へて下男佐藤八藏へ預け、護衞として立退かしめ當濱海岸に至つた。そして三軒の家を建設して細々煙を揚げ、この三棟を取つて三つ家と唱へ、夫れより追々増殖して七十戸に至つた。そして家を谷と替へて三つ谷村と稱した。又、平野善五郎が死して長男喜八郎の代となり、平田清三郎の長男清六の代となつて戸口は倍するに至つた。宗山村にある三柱の神社を敬ひ、二名の者が率先して村中の協力を求め、寶暦元年九月十日此の神社を三ツ谷村に遷し、此の時又大祭を行つた。其の後に至り松木平八郎の一子が佐藤八藏の寶刀を所有して居ることを松前家へ告げ、其の功に依つて士分に取立てられた。八藏も止むを得ず右寶刀を松前家へ献上し一代五合扶持を給はつた。もつとも丈之助の子は幼少の時死んでしまつたと云ふ。文政二年の四月佐藤彥右衞門世に出て名主となつた。此の時當村村端の海岸海產干場を戸切地村へ渡すと云ふ議が起つた。村人は頗る不服で一同其の筋へ出願して陳情した。其の罪によつて彥右衞門は退役となつたが、地所は遂に戸切地村に奪はれてしまつた。文政六年四月松前家鷹待の用として松木平八郎を始め品川通治、高井彌榮、秋山昌八の四名が、當村字大質沼と申す所へ數多の人夫を引連れて來て鷹を捕つた。夫れより每年來て鷹を捕へて幕府に献上した。仍つて此の場所を近年迄松前家鷹待場と稱した。安政六年三月に至り、當村裏手を幕府で始めて開墾し、稱して御用畑と云つた。慶應二年中二十六戸移住し來つて三好村と稱した。明治元年叛軍の殘黨が來つて松前藩と戰つた時、平野善五郎の奉納した鰐口は遂に紛失してしまつた。

明治十二年四月三ツ谷村三好村の兩村が合併して谷好村となつた。

また村社三柱の神を稱して稻荷社と唱へ、寶暦元年九月十日の建立である。寺は淨土宗で紫山甲斐守の墓守りとして寶暦二年四月追設されたものである。

七飯村（龜田郡七飯村役場調）

三六、七飯村古戰場

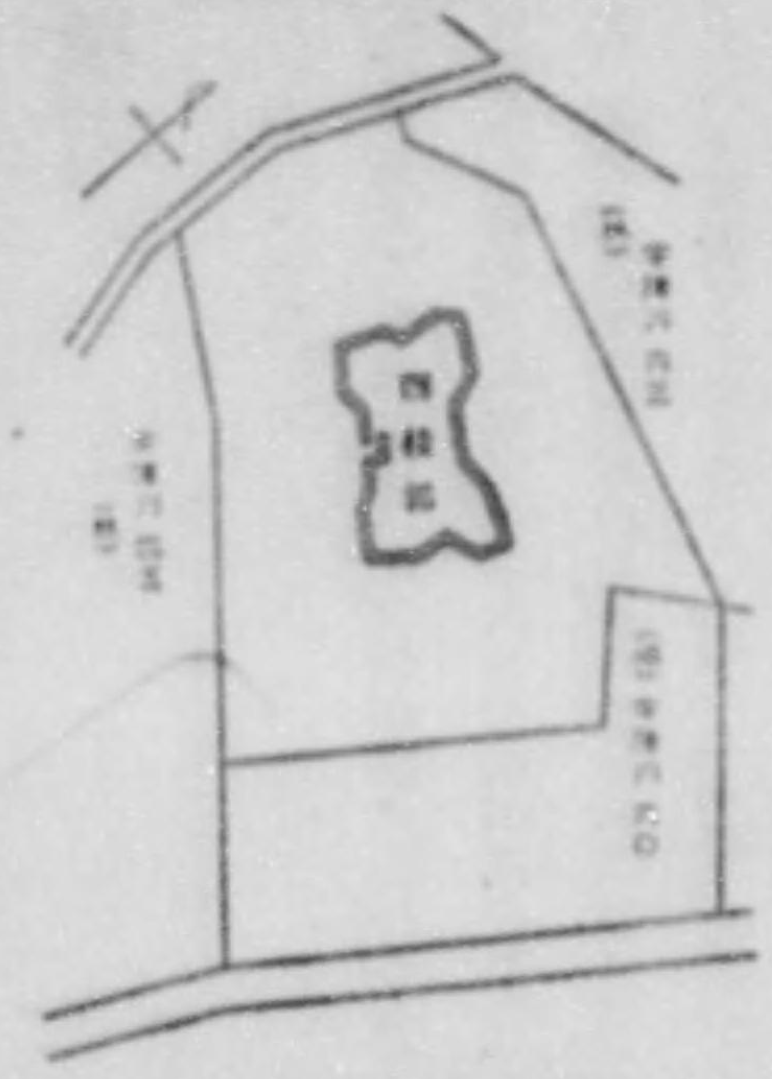
長祿年間相原周防守政胤が七重濱の戰に敗れ、更に城山（大字藤城村に屬す）の砦を奪はれ、茅部郡に逃れようとして騎馬で大沼を渉り、駒ケ岳に至つて鞍を乾かし、馬に秣飼ひしたと傳へられる。又永正十年六月蝦夷が亂をなし、大擧して松前城を攻め、城將相原周防守季胤防戰大いに力めたが及ばず、其の二姫を茅部郡の同族に託せん爲隙を得て逃れた。既にして大沼湖畔に至り、沼を渡らうとしたけれども舟がない。しかも蝦夷は烟塵を立てゝ追ふこと益々急である。季胤は進退谷まつて、ふと向ふ岸を眺めると天なるかな一艘の小舟が浪に漂うてゐる。喜んで駒を躍らして湖水に入り、將に彼岸に近づかんとするに及んで、蝦夷亂射すること驟雨の如く馬先づ斃れた。季胤は鞍上に立つて二姫を顧みたが見えず、恨を呑んで馬と共に溺んだ。既にして二姫も父を追うて此處に來り蝦夷と奮闘したが衆寡敵せず、石を結んで相擁して沼に沈んだ。武田義廣は季胤父子を救はうとして急騎追蹤したが遂に遲かつたと云ふ。現に古跡の存するものは大字藤城岱（官有林）の山腹に横たはり、相原周防守の城址と稱する石垣と、其の上邊に當り井戸跡と稱する所に清水の滾々として湧出するものがある。又大沼湖中に相原周防守が鞍を乾かしたと傳へられる所謂鞍掛石がある。

龜田村 （龜田郡龜田村役場調）

三七、四稜郭

龜田村字陣川、龜田川を左に臨む緩傾斜地に方六百坪の砲壘跡がある。之を四稜郭と云ひ村民は舊臺場と稱して居る。戊辰の役、五稜郭を本營とせる賊軍の築いたものであつて地形高く、函館市街を一望の下に瞰下することが出來る。五稜郭を距ること約三十町、賊は之に據つて七飯方面より進軍する官軍を遮らんとし、砲數門を備え之に立籠つたと云はれる。

戊辰の年五月十六日、即ち五稜郭總攻撃の前夜、官軍は少數の兵をして夜龜田川を徒渉し壘下に伏せしめ、更に一部隊は別に赤川村の山手より拂曉壘の背後に迂回し、相當の距離に現れた時賊軍は之を發見して專ら之と應戰中、壘の伏兵は時こそ到れと喊聲高く肉薄したので、賊軍は急遽狽狽壘を棄てゝ潰走したと、附近住民の傍觀した者の口碑に傳へられてゐる。



第十三圖 四稜廓

三八、赤沼大明神

字赤川村の北方赤沼の邊りにあつて、神體は蛇身であると傳へられる。沼は南北に長く東西は短かい。水面を望むと凄蒼の氣人に迫るを覺ゆる。之に關する迷信的傳說を擧げると

一、病む者が大明神に祈願すると何病と雖も全快する、特に眼病を患ふ者は沼の水で洗ふと忽ち治癒するといはれる。

二、願望あるものは參詣して水上にオサンゴ（米金錢などを白紙に包みたるもの）を投じ、其の投じたオサンゴが直ちに沈むときは神の受け給うたしるしで願望成就疑なく、若し浮いて沈まないときは神の拒否したもので其の願は神助を得ることが出來ないと信じられてゐる。

三、田植の時、水の不足することがあつたならば、村人一同團體を組んで赤沼に詣で、雨乞をするときは必ず雨が降ると云ひ傳へられ、旱魃の時には近鄕十數里の村から、雨乞に來る者が少くないと云ふ。

字赤川の北端に赤沼大明神の遙拜所がある。四尺位の石に赤沼大明神と題し、明治四十二年五月十七日村內有志の建てたるものである。同社の祭日は每月七日と定めてある。

（龜田村鄕土誌に據る）

戸井村 （龜田郡戸井村役場調）

三九、館　址

今を去る六百餘年前、岡部六郞左衞門の構へたと傳ふる館址がある。現在の戸井村役場所在地が即ちそれである。昭

和五年十二月迄右に因んで地名を館鼻と稱したが、其の後町名改稱の結果館町と稱するに至つた。

此の附近の土中から矢の根石、石斧、土器等が屢々發掘せらるゝのを見れば、故老の言も成程と思はれる。

四〇、罪人追放の會所

幕府時代現錢龜澤村字石崎と戸井村字小安との間に會所を設け、當時の重罪人の額に燒印を附し、上は鉄石（兩志郡と思料す）下は小安を限つて之を放ち、所謂國拂ひにしたと云ふ。

四一、武井の島に傳はる話

武井の島に昔ムイといふ貝類の一種と鮑と一大決戰を行つた地點で、この時に鮑が敗北したので本島より以東には絶對鮑の棲息を許さず、「ムイ」は本島以西に於ても棲息自由の協定をなしたと謂はれる。而して本島より以東には今なほ（僅少はある由なるも）鮑の繁殖を見ないのは不思議とされてゐる。

椴法華村　（龜田郡椴法華村役場調）

四二、惠山權現

惠山は昔江山と稱した。椴法華村の東西に聳ゆる海拔六百十七米の奇岩重疊たる鐘狀大山を形成し、東正面の噴火裂口よりは濛々たる熱氣を噴出してゐる。

主峰山頂に達すれば奇岩怪石隨所に横たはり、脚下千仭の斷崖には太平洋の怒濤が水煙りを上げて居て展望絶佳、全く仙境の感がある。南端に一宇の祠堂があつて惠山權現と稱し、古來靈山として廣く知られ一般の崇敬をあつめて居る。傳ふる所に依ればその開基は實に七百年の遠き昔であつて、由來多くの修驗者が登山して苦行修養のため參籠をしても、神秘不可思議な事が續出するので第一夜を明かすや蒼くなつて下山するを例としたと傳へられる。第八十四代順徳天皇の御代、淨土宗の開祖法然上人の門下四抜證空上人の高弟に、洛南深草眞宗院西山派の圓空立信と云ふ僧があつた。常に鉈一挺を携へて佛像を刻みながら諸國を遍歷したが、蝦夷地に佛化を布くため渡島し、惠山に參籠して自作の佛像將軍地藏尊、秋葉權現、金比羅權現三體を安置し、合祀したと傳へられるが紛失して之を知る者がない。今から百三十數年前、村民相議つて金佛を山頂に勸請し、爾來本村守護として祭祀を行つて來たが盜難に罹り、次いで極彩色の木像（神佛習合時代の作）一體を勸請した。其の後盜難を懼れ、山頂より一時本村字矢尻濱辨天堂に遷し山頂と共に祭祀を行つてゐたが、後本村字島泊權現堂に祀り今日に及んでゐる。

第十三圖　賽の河原

昭和十四年十一月二十七日
津輕要塞司令部許可濟

四三、賽の河原

惠山の中腹平野を成す所は昔一大火口底であつたと傳へられる。そこを賽の河原と稱し、昔から地藏尊を祀り崇敬する者が多い。岩石小石を塔狀に積み重ねた地域十數町に及び、其の數無數であつて、風雪に崩壞飛散する事無く、試みに惡戲をなして之を崩しても、翌朝はちやんと舊形に復すと傳へられる。

和五年十二月芝石に因んで地名を館鼻と稱したが、其の後町名改稱の結果館町と稱するに至つた。此の附近の土中から矢の根石、石斧、土器等が屢々發掘せらるゝのを見れば、故老の言も成程と思はれる。

四〇、罪人追放の會所

幕府時代現錢龜澤村字石崎と戸井村字小安との間に會所を設け、當時の重罪人の額に燒印を附し、上は鯱石（龜志郡と思料す）下は小安を限つて之を放ち、所謂國拂ひにしたと云ふ。

四一、武井の島に傳はる話

武井の島は昔ムイといふ貝類の一種と鮑と一大決戰を行つた地點で、この時に鮑が敗北したので本島より以東には絶對鮑の棲息を許さず、「ムイ」は本島以西に於ても棲息自由の協定をなしたと謂はれる。而して本島より以東には今なほ（僅少はある由なるも）鮑の繁殖を見ないのは不思議とされてゐる。

椴法華村　（龜田郡椴法華村役場調）

四二、惠山權現

惠山は昔江山と稱した。椴法華村の東西に聳ゆる海拔六百十七米の奇岩重疊たる鐘状火山を形成し、東正面の噴火裂口よりは濛々たる熱氣を噴出してゐる。

主峰山頂に達すれば奇岩怪石隨所に横たはり、脚下千仞の斷崖には太平洋の怒濤が水烟りを上げて居て展望絶佳、全く仙境の感がある。南端に一宇の祠堂があつて惠山權現と稱し、古來靈山として廣く知られ一般の崇敬をあつめて居る。傳ふる所に依ればその開基に實に七百年の遠き昔であつて、由來多くの修驗者が登山して苦行修養のため參籠をしても、神秘不可思議な事が續出するので第一夜を明かすや蒼くなつて下山するを例としたと傳へられる。第八十四代順徳天皇の御代、淨土宗の開祖法然上人の門下四流證空上人の高弟に、洛南深草眞宗院西山派の圓空立信と云ふ僧があつた。常に鉈一挺を携へて佛像を刻みながら諸國を遍歷したが、蝦夷地に佛化を布くため渡島し、惠山に參籠して自作の佛像將軍地藏尊、秋葉權現、金比羅權現三體を安置し、合祀したと傳へられるが紛失して之を知る者がない。今から百三十數年前、村民相議つて金佛を山頂に勸請し、爾來本村守護として祭祀を行つて來たが盜難に罹り、次いで極彩色の木像（神佛習合時代の作）一體を勸請した。其の後盜難を懼れ、山頂より一時本村字矢尻濱辨天堂に遷し山頂と共に祭祀を行つてゐたが、後本村字島泊權現堂に祀り今日に及んでゐる。

第十三圖　賽の河原

昭和十四年十一月二十七日　許可要塞司令部檢閲濟

四三、賽の河原

惠山の中原平野を成す所は昔一大火口底であつたと傳へられる。そこを賽の河原と稱し、昔から地藏尊を祀り崇敬する者が多い。岩石小石を塔状に積み重ねた地域十數町に及び、其の數無數であつて、風雪に崩壞飛散する事無く、試みに惡戲をなして之を崩しても、翌朝はちやんと原形に復すと傳へられる。

今より百二十數年前、北海航路開發の快男兒高田屋嘉兵衞が、日高幌泉場所に航行の途中惠山岬で遭難したのは、惠山權現の神威を冒瀆したためであるといふので、觀音像の碑石を建立して、航海安全を祈願したと傳へられる。碑は三影石で臺石に「海上安全」兩側に「文化六年己巳正月」「高田屋船中」と刻し、佛像は慈顏佛生に溢れ、稀に見る傑作で定めし名工の作であらうと想はれる。

砂原村

（茅部郡砂原村役場調）

四四、駒ケ岳に關する傳說

駒ケ岳は一名內浦岳とも稱する。寛永十七年大噴火をして近海暴漲し、出漁中溺死したものが七百餘人に及んだと言ふことである。

安政三年八月二十六日（午前十一時頃と云ふ）再度噴火し、降灰四方に飛散し、村民は擂鉢を冠つて避難し、幸に厄害を被らなかつたとのことである。

四五、砂原村の起り

今を去る四百年前即ち天文の頃、陸奧國津輕郡瀨田村の權四郎なるものが、每年鰊漁期に至れば漁夫を伴ひ當地に來て漁業に從事し、初秋になると歸國するのを例とした。此の頃今の沼尻に槲の老樹があつた。其の周圍に、土窟を設け舊士人が五六人居住してゐたので、此の地をサハラと稱したと言ふことである。後十數年を經て津輕方面より十餘戶來住した。元龜二年に至り戶數三十二戶となつて一村を構成し、砂原村と稱した。享保十一年松前藩では木村頭取として近江の彌右衞門なる者を置き、砂原村を根據として、今の落部村支茂無部川境までに至る收稅の業務に當らしめ、安永七年鷲木村豐島甚人なる者を小頭として公私諸般のことを取扱はしめた。寛政四年、鷲木村現森町管內を分村した。當時戶數七十餘戶に達し、海產豐かで移住するもの年一年に增加し、遂に一村として獨立するに至つたと言はれる。

四六、大字掛間村の起り

寛歷二年、南部の人巳之助といふ者の一家六人が創めて來住し、其の後年を逐うて移住するもの多く、文化十二年には戶數四十戶に達し、砂原村と分離したのであると云はれる。

四七、砂原村部落名の由來

字紋兵衞砂原は、紋兵衞なる者が創めて此の部落を開拓せるに因るものであると言はれる。

字四軒町は今を去る三百年前には戶數四戶ありしに由ると言はれる。

字會所町は昔南部藩の會所があつたに由ると言はれる。

字渡澗は元噴火灣の入江であつたが、二百數十年前、海水の作用によつて陸地に化し、名付けて渡島と稱したが、後訛つて渡澗となつたのであると言はれる。

字相泊は本村の東端乃ち噴火灣の入口に障壁となつて沖出し、アヒノ風（北西の風）此の處に止まると言ふ意義より出たものであると言はれる。

字度杭崎はトダイ（草名）の繁茂せる所であつたので、左樣に名付けられたものであると傳へられる。

字場中は漁場の中央であつたのによつて名付けられたものであると云はれる。

字小石崎は往時小石の多かつたことよりして名付けられたものであると云はれる。

字押出は駒ケ岳噴火の際泥土を押出し、此の部落をなしたと傳へられる。

四八、內浦權現堂

無格社內浦權現堂の建立年代は不詳であるが、代々松前藩の崇敬厚く例祭には特に代參させたといふことである。又漁業家は之を信仰すれば、大漁を授かると言ひ傳へられ、現今でも近村よりの參詣者が多い。

鹿部村

（茅部郡鹿部村役場調）

四九、土　穴

鹿部村字鶴泊の大沼電鐵株式會社所屬温泉プール附近の臺地に、鹿部海岸に向かつて牛の鼻型様の土穴數個がある。穴居住民の跡とも又蝦夷人の作つたものであるとの說もあるが明瞭でない。兒童の其の穴及び附近に遊ぶものは、惡胃に侵されるといふ傳說がある。

落部村

（茅部郡落部村役場調）

五〇、栃の木

木村字入澤に高さ二十米周圍七米に餘る栃の木がある。樹齡八百年以上と謂はれ、若し此の木を伐ると出血し、其の人に奇禍が忽ち下ると傳へられる。古來龍神を祀り、爾乞其の他祈願をなすものが多い。

檜山支廳

厚澤部村

（檜山郡厚澤部村役場調）

一、稻倉石

第十四圖版　稻倉石

稻倉石は厚澤部村大字鶉村にある。山水奇岩の配合頗る趣があり、秋の紅葉の頃の景色は又一入絶佳である。維新の當時松前軍と賊將松岡四郎次郎との激戰の跡で、松前軍の敗走した所であると傳へられて居る。

二、城の岱砲址

厚澤部村大字館村の東南丘陵一帶を指す。溪川、鰔野川夫れ〳〵前面を流れ、後方は山嶽重疊起伏し頗る要害の地である。舊松前藩主は戊辰の役に際して、賊軍に備ふるがため

第十五圖版　城の岱砲址

に、此の地を相して一砦を營んだ。されど工事の未だ成らざるうちに稻倉石に大勝を博したる賊軍の來襲に遇つて遂に燒盡され、現在は木障の土臺石、門柱の燒殘り、古井戸の跡等に僅かに往時が偲ばるるのみである。

この時の戰に於て勇僧三上超順が力戰奮鬪して、敵を悩ましたのは、今なほ人口に膾炙する所である。

第十六圖版　太鼓山

三、太鼓山

太鼓山は厚澤部村大字俄虫村にある。頂上で大地を踏めば底鳴りを生じて、恰も地中が空洞かの如く感ずる爲にこの名がある。安野呂、土橋、並に隣村泊村の原野及び蜿々たる厚澤部川の下流から遙かに海上迄すべて一望の中に在つて、風光極めて絶佳である。春は躑躅、秋は紅葉に滿山錦繡の美をまとひ四時行遊するものが頗る多い。

第十七圖版　厚澤部村土橋附近

久遠村

（久遠郡久遠村役場調）

四、太田神社の傳說

傳說によると、享德三年春、若狹の國より武田信廣が一族七十餘人を率ゐて北上

檜山支廳

厚澤部村

（檜山郡厚澤部村役場調）

一、稲倉石

第十四圖版　稲倉石

稲倉石は厚澤部村大字鶉村にある。山水奇岩の配合頗る趣があり、秋の紅葉の頃の景色は又一入絶佳である。維新の當時松前軍と賊將松岡四郎次郎との激戰の跡で、松前軍の敗走した所であると傳へられて居る。

二、城の岱砦趾

厚澤部村大字館村の東南丘陵一帶を指す。濁川、鰔野川夫れ／＼前面を流れ、後方は山嶽重疊起伏し頗る要害の地である。舊松前藩主は戊辰の役に際して、賊軍に備ふるがために、此の地を相して一砦を營んだ。されど工事の未だ成らざるうちに稲倉石に大勝を博したる賊軍の乘勝に逢つて遂に燒盡され、現在は本陣の土臺石、門柱の燒痕り、古井戸の跡等に僅かに往時が偲ばるるのみである。

この時の戰に於て勇僧三上超順が力戰奮鬪して、敵を惱ましたのは、今なほ人口に膾炙する所である。

第十五圖版　城の岱砦趾

第十六圖版　太鼓山

三、太鼓山

太鼓山は厚澤部村大字俄虫村にある。頂上で大地を踏めば底鳴りを生じて、恰も地中が空洞かの如く感ずる爲にこの名がある。安野呂、土橋、並に隣村泊村の原野及び蜿々たる厚澤部川の下流から遙かに海上迄すべて一望の中に在つて、風光極めて絶佳である。春は躑躅、秋は紅葉に滿山錦繡の美をまとひ四時行遊するものが頗る多い。

第十七圖版　厚澤部村土橋附近

久遠村

（久遠郡久遠村役場調）

四、太田神社の傳說

傳說によると、享德三年春、若狹の國より武田信廣が一族七十餘人を率ゐて北上

第十八圖版　太田神社

するや、先づ奥尻島に停船し、遙んで對岸の情勢を探らんものと輕船を艤して、人なき地を相して上陸した。偶ゝ川の下流に土人三名が、巍峨として屹立せる山嶺を仰いで一心に拜し居るのを認め、召して地名と其の禮拜する所以を問うた。土人の答へて曰ふには、あの山頂に靈神があり「オホタカモイ」と稱へ奉り、疾病災厄を救ひ航海の安全を護り、其の靈驗甚だ顯著で、昔から蝦夷地の守護神として尊崇する所であると。信廣之を聞き卽ち登つて巖窟に到り、此の山を本殿となして太田山大權現の尊號を奉り、武運長久、一身息災を祈り信仰頗る深かつた。爾來航海者は孰れも其の安全を祈願せざる者はなく、社前の沖合を通る和船は皆帆を下して通過したので、此の岬角を名づけて帆越岬と呼んだといふことである。

いひ傳へによると凡そ船舶の大小を問はず太田山前面の海上を航海する時は、帆を下さなければ進行の自由を失つてしまつたとのことである。

文政元年寅八月、津輕濱田村の人で山内助右衛門なる者が、窟内に銅宇を造つて不動明王（見海郡重子大天狗 妙多羅重子小天狗）の銅像を安置した。

傍らには黒森山云々の彫刻があるが、年代は詳かでない。是れより覺宮の行者等或は半年或は一年の長きに渡つて參籠

第十九圖版　久遠村海岸

するものがあつて祈願者は年と共に益々多きを加へ、信教者の區域も一道三府十七縣に亙り、或は遠く樺太朝鮮を除す るものあり、或は講社を結んで代參を立てるもの等もあつて、毎年の大例祭日（舊曆六月二十八日）の如きは、實に數十里の遠方から來て參籠するものも少くなく、當日のみ遠來の參詣者が年々一千人を下らなかつたといふことである。

慶應三年に至り始めて山麓の海岸に拜殿を營んで參拜者の便宜に供した。

上ノ國村（檜山郡上ノ國村役場調）

五、古櫃の濱

コシヤマインの大亂に、武田信廣が七重濱に寄偽父子を斬つて上ノ國の花澤館に凱旋すると、蠣崎季繁は大いに喜んで彼の殊勳を賞し、之に配するに養女を以てし、新に洲崎館（今の北村砂館神社の附近）を造つてこの若き新婚の武將夫妻を移した。

寛政三年五月の頃、洲崎館の西海岸に當り、夜な夜な奇怪なる光が現れ、その噂は次から次へと傳はつて、附近住民の恐怖は一方でなかつた。そこで信廣は圓蔵院秀延なる法師に、その正體を見屆けんことを申し付けた。秀延は仰を畏み日暮を待つて濱邊に行くと、果して遙か沖の方から金色がきらめき、見る見る中に岸へ岸へと近寄つて來た。何ものならんと渚に走り寄り來るものを熟々見れば、それは一個の古櫃であつた。秀延は合點がゆかず、櫃を破つて中を見ると奇怪なる哉、黄金の毘沙門像が安置せられてあつた。是に於て不審の謎は漸く解けて、村人は皆安堵するに至つた。

するや、先づ奥尻島に停船し、進んで對岸の情勢を探らんものと輕船を艤して、人なき地を相して上陸した。偶ま川の下流に土人三名が、巍峨として屹立せる山嶺を仰いで一心に拝し居るのを認め、召して地名と其の禮拝する所以を問うた。土人の答へて曰ふには、あの山頂に靈神があり「オホタカモイ」と稱へ奉り、疾病災厄を救ひ航海の安全を護り、其の靈驗甚だ顯著で、昔から蝦夷地の守護神として尊崇する所であると。信廣之を聞き卽ち登つて巖窟に到り、此の山を本殿となして太田山大權現の尊號を奉り、武運長久、一身息災を祈り信仰頗る深かつた。爾來航深者は孰れも其の安全を祈願せざる者はなく、社前の沖合を通る和船は皆帆を下して通過したので、此の岬角を名づけて帆越岬と呼んだといふことである。

第十八圖版　太田神社

いひ傳へによると凡そ船舶の大小を問はず太田山前面の海上を航海する時は、帆を下さなければ進行の自由を失つてしまつたとのことである。

文政元年寅八月、津輕濱田村の人で山内助右衞門なる者が、崖内に祠宇を造つて不動明王（昆迦羅童子大天狗 矜多迦童子小天狗）の銅像を安置した。

第十九圖版　久遠村沿岸

豪には黒森山云々の彫刻があるが、年代は詳かでない。是れより眞言の行者等或は半年或は一年の長きに渡つて參籠するものがあつて祈願者は年と共に益〻多きを加へ、崇敬者の區域も一道三府十七縣に亘り、或は遠く幣帛祭粢を獻ずるものあり、或は講社を結んで代參を立てるもの等もあつて、毎年の大例祭日（陽曆六月二十八日）の如きは、實に數十里の遠方から來て參籠するものも少くなく、當日のみ遠來の參詣者が年々一千人を下らなかつたといふことである。慶應三年に至り始めて山麓の海岸に拝殿を營んで參拜者の便宜に供した。

上ノ國村

（檜山郡上ノ國村役場調）

五、古櫃の濱

コシヤマインの大亂に、武田信廣が七重濱に蠣崎父子を斬つて上ノ國の花澤館に凱旋すると、蠣崎季繁は大いに喜んで彼の殊勳を賞し、之に配するに養女を以てし、新に洲崎館（今の北村砂館神社の附近）を造つてこの若き新婚の武將夫妻を移した。

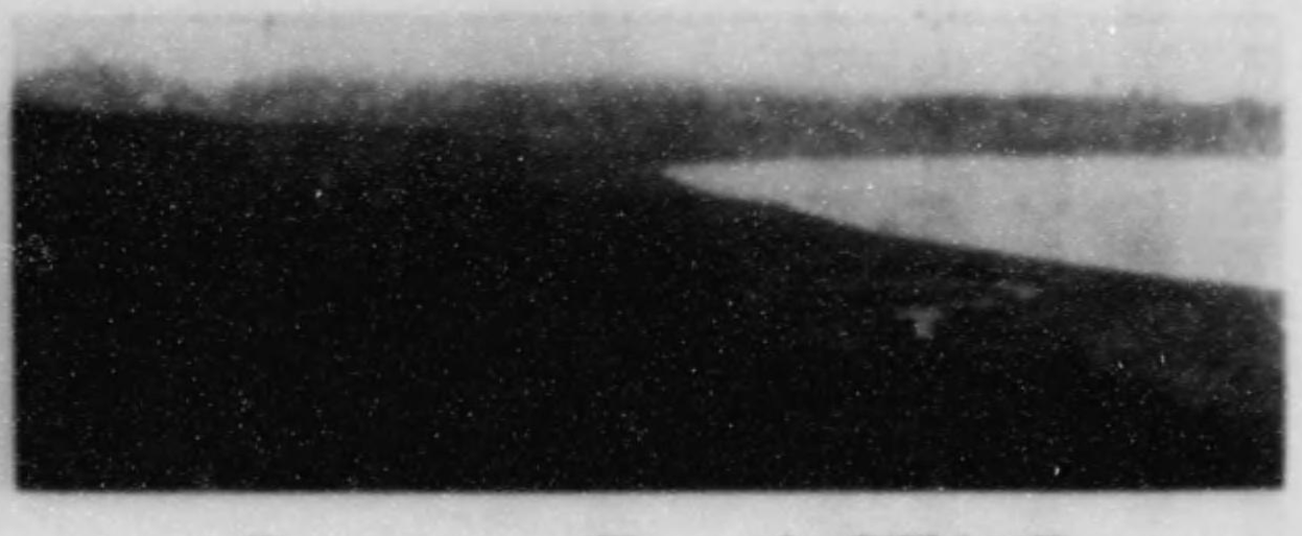
寬政三年五月の頃、洲崎館の西海岸に當り、夜な夜な奇怪なる光が現れ、その噂は次から次へと傳はつて、附近住民の恐怖は一方でなかつた。そこで信廣は韻職院秀嵓なる法師に、その正體を見屆けんことを申し付けた。秀嵓は仰を畏み日暮を待つて濱邊に行くと、果して遙か沖の方から金色がきらめき、見る見る中に岸へ岸へと近寄つて來た。何ものならんと渚に走り寄り來るものを熟々見れば、それは一個の古櫃であつた。秀嵓は合點がゆかず、櫃を破つて中を見ると奇怪なる哉、黄金の毘沙門像が安置せられてあつた。是に於て不審の謎は漸く解けて、村人は皆安堵するに至つた。

毘沙門像は北方鎭護の神である。信廣は何かの瑞祥ならんと小躍りして打ち喜び、直ちに洲崎館の北丘に祠を建てて之を祀つた。

これが卽ち毘沙門堂で、明治維新に至るまで毘沙門天王社又は毘沙門堂と稱へて居つたが、明治維新となるに及んで、社地が信廣の洲崎館の跡であるのに因んで砂館神社と改稱した。秀延が毘沙門の眞像を拾ひ上げたと言ひ傳へられて居る海岸は、卽ち今の古櫃の濱である。

六、赤坂の土に殘る蝦夷の怨靈

智勇兼ね備はる信廣が、季繁の客將となつて以來、アイヌ等は戰ふ度每に敗亡の憂目をなめ、その領域は次第に狹められて行つた。そこで信廣は多くの蝦夷共より、常に不倶戴天の仇敵と目されて居た。果然各地の蝦夷は蜂起し、一擧に上ノ國を攻め討たんとの策略をめぐらした。逸早く之を察知した信廣は、ひそかに陣を夷王山の南方八幡野に敷いてその來襲を今や遲しと待ち受けた。そして强弓の譽れ高き信廣の矢は忽ちにして數多の蝦夷を殪したが、敵軍は多勢であつて、新手に加ふるに新手を以てし、而も意氣甚だ旺盛で味方の屍を乘超え乘超えて突擊し來り、茲に彼我共に火花を散らし肉彈相搏つの白兵戰が展開された。然し寡は遂に衆に敵せず、さしも名將と謳はれた信廣も戰ひ利なく、八幡野の東北赤坂まで追ひつめられ、今や彼が最後とも見えたが、信廣は鮮血滴る大刀を地に突きたて跪づいて暫し八幡大菩薩を念じた。折しも不意に湧き起る喊聲に驚いて眼を見開けば、あら不思議や野山の草木



第二十圖版　古櫃の濱

は百萬の兵馬となつて蝦夷を追擊し、海上は風なきに激浪山をなし、河水は、雨なくして漲り溢れ、山嶽は鳴動するといふ一大奇蹟…………、信廣を追ひつめ來つた蝦夷共も、全く恐怖に襲はれて度を失ひ、バタ〳〵と仆さるゝに至つた。

今でも赤坂の土が赤褐色を呈して居るのは、信廣に斬られた千人の蝦夷の血によつて染め出されたものと云はれて居る。而もこの赤坂の土には蝦夷の怨靈が今尙留つて降雨を頻りに至らしむると言ふことである。

偶々小砂子石崎方面から旅をして上ノ國に來る者がこの八幡野を橫切り、赤坂の土の草鞋に附着したのを知らないで其のまゝ旅を續ける時は、必ず降雨の厄に逢ふべしと言ひ傳へられて居る。

故に赤坂を通つて來た旅人は、必ず小川に草鞋をひたし、この赤土を洒ぎ落してから又行をつづけたと言ふことである。この川は足洗川と呼ばれて今も無心にせゝらぎの音をたてゝ流れてゐる。

七、泰平山の龍燈

泰平山は海拔千二百尺で其の姿は頗る平凡ではあるが、頂上に噴火口の如き擂鉢形の大なる洞穴がある。昔からこの穴は大澗の「大人の穴」に通じて居たと言ひ傳へられてゐる。「大人の穴」と言ふのは其の穴の附近にあつた岩が、その昔一步能く幾里かを步んだと謂ふ巨人に甚だ酷似して居るために、名づけたものだと云ふ。

この穴から四百間程離れて居る海岸に、窓石といふ門の形をした岩があつて、その端は恰も階段の如く漸次低くなり

第二十一圖版　夷王山

毘沙門像は北方鎭護の神である。信廣は何かの瑞祥たらんと小躍りして打ち喜び、直ちに洲崎館の北丘に祠を建てて之を祀つた。

これが即ち毘沙門堂で、明治維新に至るまで毘沙門天王社又は毘沙門堂と稱へて居つたが、明治維新となるに及んで、社地が信廣の洲崎館の跡であるのに因んで砂館神社と改稱した。秀超が毘沙門の聖像を拾ひ上げたと言ひ傳へられて居る海岸は、即ち今の古櫃の濱である。

六、赤坂の土に殘る蝦夷の怨靈

智勇兼ね備はる信廣が、季繁の客將となつて以來、アイヌ等は戰ふ度毎に敗亡の憂目をなめ、その領域は次第に狹められて行つた。そこで信廣は多くの蝦夷共より、常に不倶戴天の仇敵と目されて居た。果然各地の蝦夷は蜂起し、一擧に上ノ國を攻め討たんとの策略をめぐらした。逸早く之を察知した信廣は、ひそかに陣を夷王山の南方八幡野に敷いてその來襲を今や遲しと待ち受けた。そして强弓の譽れ高き信廣の矢は忽ちにして數多の蝦夷を殪したが、敵軍は多勢であつて、新手に加ふるに新手を以てし、尚も意氣甚だ旺盛で味方の屍を乘超え乘超えて突擊し來り、茲に彼我共に火花を散らし肉彈相搏つの白兵戰が展開された。然し寡は遂に衆に敵せず、さしも名將と謳はれた信廣も戰ひ利なく、八幡野の東北赤坂まで追ひつめられ、今や彼が最後とも見えたが、信廣は鮮血滴る太刀を地に突きたて跪づいて暫し八幡大菩薩を念じた。折しも不意に湧き起る喊聲に驚いて眼を見開けば、あら不思議や野山の草木

第二十圖版　古櫃の濱

は百萬の兵馬となつて蝦夷を追擊し、海上は風なきに激浪山をなし、河水は、雨なくして漲り溢れ、山嶽は鳴動するといふ一大奇蹟…………、信廣を追ひつめ來つた蝦夷共も、全く恐怖に襲はれて度を失ひ、バタ〳〵と仆さるゝに至つた。

今でも赤坂の土が赤褐色を呈して居るのは、信廣に斬られた千人の蝦夷の血によつて染め出されたものと云はれて居る。尚もこの赤坂の土には蝦夷の怨靈が今尙留つて降雨を頻りに至らしむると言ふことである。

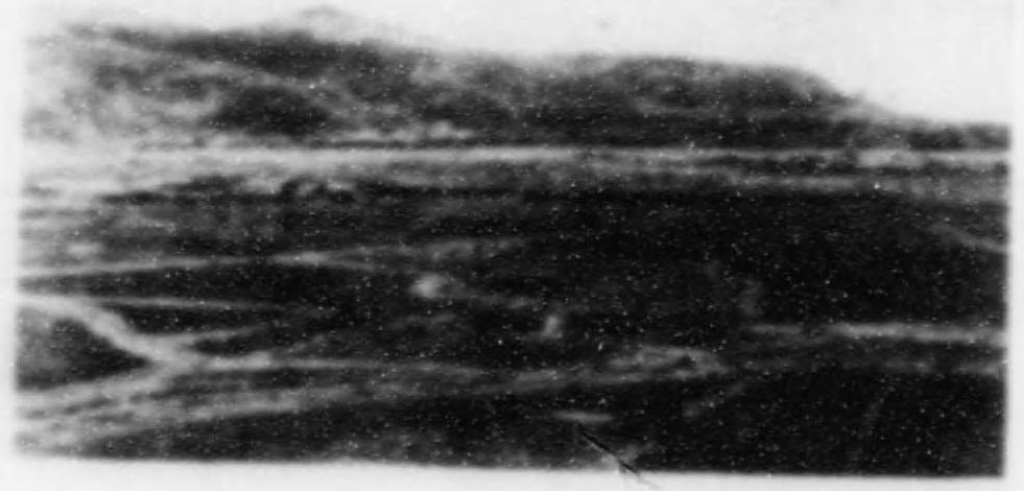
偶々小砂子石崎方面から旅をして上ノ國に來る者がこの八幡野を橫切り、赤坂の土の草鞋に附着したのを知らないで其のまゝ旅を續ける時は、必ず降雨の厄に逢ふべしと言ひ傳へられて居る。

故に赤坂を通つて來た旅人は、必ず小川に草鞋をひたし、この赤土を洒ぎ落してから又行をつづけたと言ふことである。この川は足洗川と呼ばれて今も無心にせゝらぎの音をたてゝ流れてゐる。

七、泰平山の巍聳

泰平山は海拔千二百尺で其の姿は頗る平凡ではあるが、頂上に噴火口の如き擂鉢形の大なる洞穴がある。昔からこの穴は大澗の「大人の穴」に通じて居たと言ひ傳へられてゐる。「大人の穴」と言ふのは其の穴の附近にあつた岩が、その昔一歩能く幾里かを步んだと謂ふ巨人に甚だ酷似して居るために、名づけたものだと云ふ。

この穴から四百間程離れて居る海岸に、窓石といふ門の形をした岩があつて、その端は恰も階段の如く漸次低くなり



第二十一圖版　夷王山

つゝ延びて、その最先端は海中に沒入して居る。これを峠の道と呼んで居る。

何時の頃からか海峠がこの洞窟を通つて山峠の許へ通ふ樣になつた。滿潮の夜は山の洞穴とても等しく水を增すために海峠は「大人の穴」から通つて居たが、干潮の時にはその岩の「峠の道」の階段を上つて夷王山から八幡野を通つて遠山の峰を渡り、二里に近い山道を登つて通つたとのことで、その龍燈は村人の眼にもよく見えたと云はれ、所謂「峠の道」は龍峠の日每通ふところから附けられた名前だと云ふことである。泰平山の洞穴が海に通ずる證左として、洞穴には常に小蟹が戯れ、海草も亦生育してゐたといはれる。或時一人のアイヌが洞穴と大人の穴とが果して通じて居るか否かを試みるために、犬を泰平山の洞穴に投げ込み一目散に逃げ歸る途中、叢に横臥してゐた大蛇を見て遂に悶絕したが、犬はそのまゝ洞穴を通過して難なく海岸に出たと云はれて居る。

第二十二圖版　峠の道

八、竹の輪切りと小石の賞締め

コシヤマインの亂も平ぎ、北海の風波全く治まつたので、信廣は先づかゝる叛亂の跡を絕つにはアイヌ等を攏取するに如くはなしと考へ、一日多數のアイヌ等を花澤館に呼び集めて、盛宴を催した。山海の珍味膳に溢れ、款待の限りを盡した。宴正に酣なる頃、信廣は襟を正して曰ふには、「遠來の好意に對して何等酬ゆべきものがないのはお恥かしい次第であるが、只こゝに蠣崎家の懇親の者に限つて頒つ住肴がある。これは先祖よりの恒例として漫りに變へるべきものではないが、今後長く和親を修めるしるしにもと思つて汝等にも供した、十分味つて貰ひたい」と頻りに勸めた。それは椀に竹の輪切の吸物と猪口に黑い小石の賞メとを付けたのであつた。アイヌ等は有難さに唯々感激し、一齊に箸を取つて椀のものを食はんとしたが堅くして一向齒も立たず、隣席の者はと視るに皆同樣である。更に猪口のものをとつて試食するに益々堅くして如何ともできず、一方信廣はと見れば悠然として竹の輪切をさもおいしさうにバリ〳〵と食し、更に小石をも食べて居るのを見るに、恰も軟かい菓子でも食べてゐるやうである。アイヌ等は之を見て愈々怖れをなし、こは尋常の人ではない必ずや「神樣ならん」と思ひ、これより信廣を崇敬すること神の如く、叛亂を起すものは絕えてなくなつたと云ふ。

信廣の食べたのは實は筍の輪切りと賞メの黑豆とであつたのである。

泊　村

（檜山郡泊村役場調）

九、眞言宗觀音寺

眞言宗觀音寺は御室御所眞光院僧正の門弟旭威法印の開基で、嘉吉元年辛酉の歲の創立に係る。後蠣崎民部大輔光廣の次男高廣が、永正甲子の年西部泊館の主となつたが、間もなく剃髮して沙門となり僧名を永快と稱した。この永快阿闍梨が當寺の開祖と謂はれる。又其の後慶長十五年庚戌の歲に至り、花山院忠長卿が事に因つて佐渡國

第二十三圖版　眞言宗觀音寺

つゝ延びて、その最先端は海中に沒入して居る。これを神の道と呼んで居る。

何時の頃からか海神がこの洞窟を通つて山神の許へ通ふ樣になつた。滿潮の夜は山の洞穴とても等しく水を增すために海神は「大人の穴」から通つて居たが、干潮の時にはその岩岩の「神の道」の階段を上つて夷王山から八幡野を通つて蓮山の峰を渡り、二里に近い山道を登つて通つたとのことで、その龍燈は村人の眼にもよく見えたと云はれ、所謂「神の道」は龍神の日毎通ふところから附けられた名前だと云ふことである。泰平山の洞穴が海に通ずる證左として、洞穴には常に小蟹が棲れ、海草も亦生育してゐたといはれる。或時一人のアイヌが洞穴と大人の穴とが果して通じて居るか否かを試みるために、犬を泰平山の洞穴に投げ込み一日數に逃げ歸る途中、叢に横臥してゐた大蛇を見て遂に悶絕したが、犬はそのまゝ洞穴を通過して難なく海岸に出たと云はれて居る。

第二十二圖版　神の道

八、竹の輪切りと小石の煮締め

コシヤマインの亂も平ぎ、北海の風波全く治まつたので、信廣は先づかゝる叛亂の跡を絕つにはアイヌ等を撫馭するに如くはなしと考へ、一日多數のアイヌ等を花澤館に呼び集めて、盛宴を催した。山海の珍味膳に溢れ、款待の限りを盡した。宴正に酣なる頃、信廣は襟を正して曰ふには、「從來の好意に對して何等酬ゆべきものがないのはお恥かしい次第であるが、只こゝに蠣崎家の懇親の者に限つて頒つ住肴がある。これは先祖よりの恒例として淺りに變へるべきものではないが、今後長く和親を修めるしるしにもと思つて汝等にも供した、十分味つて貰ひたい」と頻りに勸めた。それは椀に竹の輪切の吸物と猪口に黑い小石の煮〆とを付けたのであつた。アイヌ等は有難さに唯々感激し、一齊に箸を取つて椀のものを食はんとしたが堅くして一向齒も立たず、隣席の者はと視るに皆同樣である。更に猪口のものをとつて試食するに益々堅くして如何ともできず、一方信廣はと見れば悠然として竹の輪切をさもおいしさうにパリ／＼と食し、更に小石をも食べて居るのを見るに、恰も軟かい菓子でも食べてゐるやうである。アイヌ等は之を見て愈々怖れをなし、こは尋常の人ではない必ずや「神樣ならん」と思ひ、これより信廣を崇敬すること神の如く、叛亂を起すものは絕えてなくなつたと云ふ。

信廣の食べたのは實に筍の輪切りと煮〆の黑豆とであつたのである。

泊　村　（檜山郡泊村役場調）

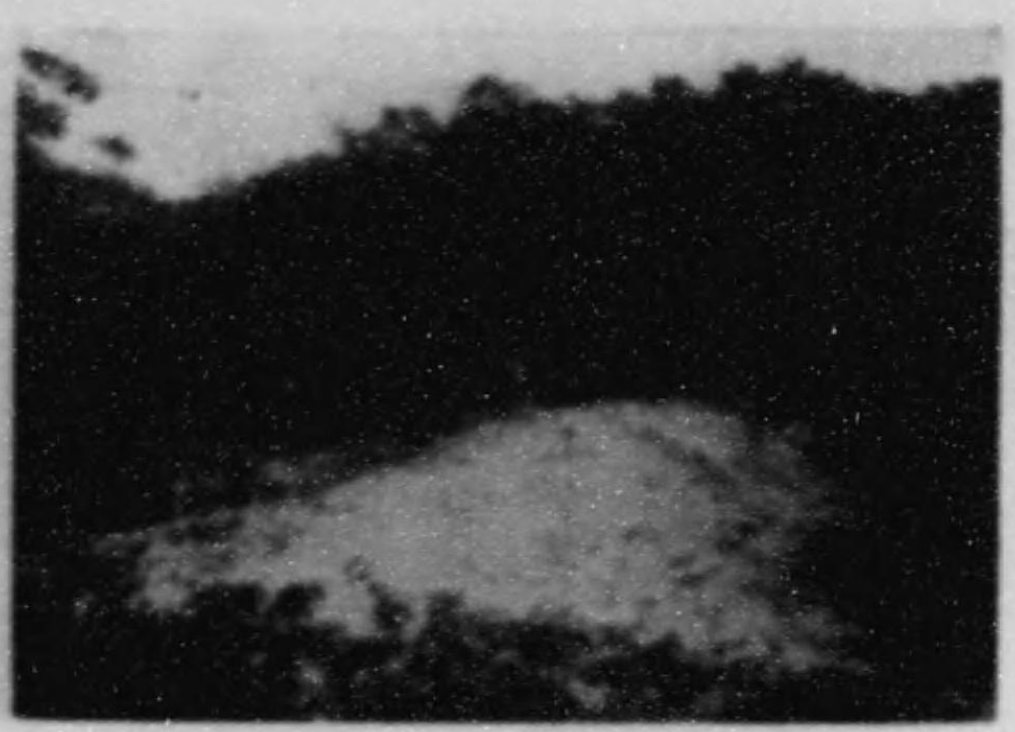
九、眞言宗觀音寺

眞言宗觀音寺は仁和寺御所眞光院僧正の門弟龍嚴法印の開基で、嘉吉元年辛酉の歲の創立に係る。抑蠣崎長部大輔光廣の次男高廣が、永正甲子の年西部泊館の主となつたが、間もなく剃髮して沙門となり僧名を永快と稱した。この永快阿闍梨が當寺の開祖と謂はれる。又其の後慶長十五年庚戌の歲に至り、花山院忠長卿が事に因つて佐渡國

第二十三圖版　眞言宗觀音寺

に遷されることになつた時、疾風のため本道爾志郡熊石村（元雲石村と云ふ）に漂流し、それより更に當寺へ遷住されて遂に再興の祖となつたと舊記にある。但し安政三年丙辰十月九日の夜、不幸にも火を發して寶物や什器は殆ど燒失してしまつた。

一〇、泊館趾



第二十四圖版　泊館趾

泊館趾と稱せられる位置は泊村の南端にあつて、市街を距ること二町、丘陵の中腹にある。南北は丘陵に倚り、北は狹谷に隔てられ、西は日本海を一望に收むる景勝地である。今は眞言宗觀音寺の境内で八百二十二坪、丘陵を均らして平坦な地となつてゐる。隨つて館趾として今之を見る事は出來ない。觀音寺の記錄に文龜元年（一說には永正元年）松前藩主第二代光廣の次子二郞高廣を以て泊館の主となす、といふことが見えてゐる。（前出觀音寺の項參照）

一一、木食上人の地藏尊

觀音寺に木食上人の作と傳へられる高さ七尺余の子安地藏尊が安置せられてある。上人は木食の生活に入つてから都城婆村至る處を巡錫し、遂に海を越えて遙々福山に渡り、西海岸を辿つて熊石村門昌庵を訪れ、江差に有緣の地を見出して此處に凡そ二ヶ年間錫を留め、安永九年再び江差を後に福山から船出したと傳へられる。

本地藏尊は當時の作でもと地藏町の堂宇に安置せられてあつたが、明治に至つて今の觀音寺に移し奉つたとの事である。

乙部村　（爾志郡乙部村役場調）

一二、乙部本村の開祖

第二十五圖版　乙部本村

慶長の初め頃、上杉家の臣宇田民部なる修業者が、近藤市兵衞、福原利右衞門及び其の弟五郞兵衞の三人を從へて、南部地方より渡島の途中、東南の强風に吹流されて今の奥尻島に漂著し、九死に一生を得た。何分にも茫漠たる蘆原、蓊鬱たる森林のみで一軒の人家とてもなく、實に凄然たる處であつた。處が不圖東方遙かの海上に突兀たる島様の山々（黑嶽、見市嶽、江差の八幡山等であらう）の現出せるを望んで、彼の山々こそ陸續きで蝦夷地の大陸であらうと、勇氣を鼓し順風に乘じて同所を解纜した。海上恙なく今の久遠郡の地（大田崎村であらう）に到著した。この地は奥尻以上に森林は深く、鳥獸の叫び聲のほか人聲は一向に聞えず、何處にも畑を認むる事はできなかつた。其の上糧食も缺乏して甚しく困難を極めた。遂に坐ながらにして餓死を待たんよりは、死する迄も人家の發見に努むるに如かずとなし、再び船に乘つて、海岸に沿ひつゝ南航し、日沒に至つて漸く當村姫川の河口に達するこ

に遷されることになつた時、疾風のため本道爾志郡熊石村（元雲石村と云ふ）に漂流し、それより更に當寺へ遷住されて遂に再興の祖となつたと舊記にある。但し安政三年丙辰十月九日の夜、不幸にも火を發して寶物や什器は殆ど燒失してしまつた。

一〇、泊館趾

第二十四圖版　泊　館　趾

泊館趾と稱せられる位置は泊村の南端にあつて、市街を距ること二町、丘陵の中腹にある。南北は丘陵に倚り、北は狹谷に隔てられ、西は日本海を一望に收むる景勝地である。今は眞言宗觀音寺の境内で八百二十二坪、丘陵を均らして平坦な地となつてゐる。隨つて館趾として今之を見る事は出來ない。觀音寺の記錄に文龜元年（一説には永正元年）松前藩主第二代光廣の次子二郎高廣を以て泊館の主となす、といふことが見えてゐる。（前出觀音寺の項參照）

一一、木食上人の地藏尊

觀音寺に木食上人の作と傳へられる高さ七尺余の子安地藏尊が安置せられてある。上人は木食の生活に入つてから郡城塞村至る處を遍歷し、遂に海を越えて遙々福山に渡り、西海岸を廻つて熊石村門昌庵を訪れ、江差に有緣の地を見出して此處に凡そ二ヶ年間錫を留め、安永九年再び江差を後に福山から船出したと傳へられる。

本地藏尊は當時の作でもと地藏町の堂宇に安置せられてあつたが、明治に至つて今の觀音寺に移し奉つたとの事である。

乙部村

（爾志郡乙部村役場調）

一二、乙部本村の開祖

慶長の初め頃、上杉家の臣字田民部なる修業者が、近藤市兵衞、福原利右衞門及び其の弟五郎兵衞の三人を從へて、南部地方より渡島の途中、東南の强風に吹流されて今の奧尻島に漂著し、九死に一生を得た。何分にも茫漠たる蘆原、鬱蒼たる森林のみで一軒の人家とてもなく、實に凄然たる處であつた。處が不圖東方遙かの海上に突兀たる島様の山々（黑嶽、見市嶽、江差の八幡山等であらう）の現出せるを望んで、彼の山々こそ陸續きで蝦夷地の大陸であらうと、勇氣を鼓し順風に乘じて同所を解纜した。海上恙なく今の久遠郡の地（大田崎村であらう）に到著した。この地は奧尻以上に森林は深く、鳥獸の叫び聲のほか人聲は一向に聞えず、何處にも烟を認むる事はできなかつた。其の上糧食も缺乏して甚しく困難を極めた。遂に生ながらにして餓死を待たんよりは、死する迄も人家の發見に努むるに如かずとなし、再び船に乘つて、海岸に沿ひつゝ南航し、日沒に至つて漸く當村姫川の河口に達するこ

第二十五圖版　乙　部　本　村

とが出來た。ところがその時不圖火光とは異なる一つの光りを八幡山の中腹に見出して、人々は不審に堪へず、行つて檢べたところが月桂の老樹地上五六尺の處に木瘤があつて、光りは之から發してゐることが判つた。旣に日は暮れはてたがために、止むなく一行は其處に宿ることゝした。最早人力の及ぶ所ではない。此の上は唯々神のお力に依るのみであるといふので、民部は一心に祈禱を捧げ、その結果南方に人家ありとのお告げを得た。其の夜は草を敷いて褥とし、木の葉をあつめて覆ひとして、よもすがら越し方行末のことどもを案じ廻らし、星屑の瞬く空を仰いで夢も圓らかに結ばず、東方の白むのを待つて晝尙暗い八幡山の樹林を縫ひ、荊棘を踏み分け南方を指して前進した。そして遂にある高所に達し、遙に木立を透して前方を眺めると、一縷の人烟が微かに立ち登り、昨夜のお告げの空しくなかつたことを心から喜んだ。疲れ果てた心身も爲に勇氣百倍し、谷を渉り山を越え道なき道を辿り辿つて、遂に一軒のいぶせき草屋に達した。其處は卽ち現在の瀧ノ澗の地であつて、アイヌの住家である。お互に言語は通ぜず、手眞似で空腹を訴へ辛うじて食を得て蘇生の思をなした。

第二十六圖版　今金市街より見市岳を望む

後出發地に歸つた民部は老樹月桂の傍に、さゝやかなる祠を營み、市兵衛は現在の津花町近藤七之丞宅附近に、利右衛門は津花町門屋敷に、五郎兵衛は津花町川瀬金四郎宅附近に各々居を構へた。この人達が卽ち當村の開祖なのである。

以上に關する記錄は海嘯や火災の爲に已に消失し、現在では何等參考に供すべきものはなく、唯古老の口傳を記したに過ぎない。

當時上ノ國、泊地方より出漁者があつたものか、或は又アイヌ人のものか不明であるが、姬川に沿うて假小屋があつたと言ふ事を附記して置く。

一三、館の岩

館の岩は、風化によつて年々其の形狀を損じ、往年の奇景は認め難いけれども、丹波與作の死と共に其の名は高い。

昔、乙部木村の樋村喜右ヱ門方に岩といふ下女があつたが、同じ村の丹波與作なる者と通じ、男は喜右ヱ門に迫り、岩を貰ひ受けたいと申込んだ。ところが喜右ヱ門は容易に之を許さなかつた。其の後岩は、喜右ヱ門の勸めによつて養子を迎へる事となり、愈々結婚の當夜を迎へた。與作は策をめぐらして岩を呼び出し、今の寺島雄太郎宅の濱手にあたる木材の堆積せる處に於て、岩を其の木材で擊殺し、その足で朋友を訪れ、死の良法を質ねた。朋友はかゝる事情ありとは夢にも知らず、冗談だと思つて館から飛べと答へた。すると與作は其の足で直に館に至り、かの絕壁の上より飛び下りて死んでしまつた。後人は此の物語を歌謠に作つた。其の一節に曰く、

丹波與作は館からはねた、可愛いお岩を角挾み。

第二十七圖版　館　の　岩

一四、姬　川

乙　部　村

とが出來た。ところがその時不圖火光とは異なる一つの光りを八幡山の中腹に見出して、人々は不審に堪へず、行つて檢べたところが月桂の老樹地上五六尺の處に木瘤があつて、光りは之から發してゐることが判つた。旣に日は暮れはてたがために、止むなく一行は其處に宿ることゝした。最早人力の及ぶ所ではない。此の上は唯々神のお力に依るのみであるといふので、民部は一心に祈禱を捧げ、その結果南方に人家ありとのお告げを得た。其の夜は草を敷いて褥とし、木の葉をあつめて覆ひとして、よもすがら越し方行末のことどもを案じ廻らし、星屑の瞬く空を仰いで夢も圓らかに結ばず、東方の白むのを待つて晝尙暗い八幡山の樹林を縫ひ、荊棘を踏み分け南方を指して前進した。そして遂にある高所に達し、遙に木立を透して前方を眺めると、一縷の人烟が微かに立ち登り、昨夜のお告げの空しくなかつたことを心から喜んだ。疲れ果てた心身も爲に勇氣百倍し、谷を渉り山を越え道なき道を辿り辿つて、遂に一軒のいぶせき草屋に達した。其處は卽ち現在の瀧ノ澗の地であつて、アイヌの住家である。お互に言語は通ぜず、手眞似で空腹を訴へ辛うじて食を得て蘇生の思をなした。

第二十六圖版　今金市街より見市岳を望む

後出發地に歸つた民部は老樹月桂の傍に、さゝやかなる祠を營み、市兵衛は現在の津花町近藤七之丞宅附近に、利右衛門は津花町門屋敷に、五郎兵衛は津花町川瀨金四郎宅附近に各々居を構へた。この人達が卽ち當村の開祖なのである。

以上に關する記錄は海嘯や火災の爲に已に消失し、現在では何等參考に供すべきものはなく、唯古老の口傳を記したに過ぎない。

當時上ノ國、泊地方より出漁者があつたものか、或は又アイヌ人のものか不明であるが、姬川に沿うて假小屋があつたと言ふ事を附記して置く。

一三、館の岩

館の岩は、風化によつて年々其の形狀を損じ、往年の奇景は認め難いけれども、丹波與作の死と共に其の名は高い。

昔、乙部木村の種村喜右ヱ門方に岩といふ下女があつたが、同じ村の丹波與作なる者と通じ、男は喜右ヱ門に迫り、岩を貰ひ受けたいと申込んだ。ところが喜右ヱ門は容易に之を許さなかつた。其の後岩は、喜右ヱ門の勸めによつて養子を迎へる事となり、愈々結婚の當夜を迎へた。與作は策をめぐらして岩を呼び出し、今の寺島雄太郎宅の濱手にあたる木村の堆積せる處に於て、岩を其の木村で毆殺し、その足で朋友を訪れ、死の良法を質ねた。朋友はかゝる事情ありとは夢にも知らず、冗談だと思つて館から飛べと答へた。すると與作は其の足で直に館に至り、かの絕壁の上より飛び下りて死んでしまつた。後人は此の物語を歌謠に作つた。其の一節に曰く、

丹波與作は館からはねた、可愛いお岩を角挾み。

第二十七圖版　館　の　岩

一四、姬　川

乙　部　村

乙部本村の北端を流るゝ姫川は、昔シヤモ（和人）地とアイヌ（蝦夷）地との境であつたと云ふ。

姫川の名の由來は昔この川上に上味屋（味屋は秋味ふ屋の意）と下味屋とがあつて、この味屋で獲つた鮭の運上料（稅金）は代々松前家の姫君のお化粧料として徵收せられた爲に、姫川と稱せられたといふのである。

一五、鮪岬の鮪

第二十九圖版　鮪　岬

乙部村大字三ツ谷村と同村蚊柱村の村界に、海岸深く突き出て居る丘がある。名を鮪岬といふ。附近一帶は楓林である。又蚊柱村社、諏訪樣の社殿も一段目立つて聳えて居る。此處は昔鰊の本場といはれ殷賑な光景を呈したものだ。

その頃のこと、鮪岬突端近くに（蚊柱村側）大鮪が棲息して居た。その棲んだ穴は水面より凡そ十二三尋で、奧深い棚の樣であるといふが、誰も穴の中の樣子については知らなかつた。又この水面より約五六丈程上の岩壁に、畑地のやうな樣をなせる平岩（一名畑岩）に、一本木と呼ばれる一本の大きな楓の樹が生えて、枝振り面白く海面になびいてゐた。年月は詳らかでないが、約二百年程昔、鰊の豐漁時代

第二十八圖版　姫　川

のこと、この大鮪と大蛇との鬪爭物語がある。

鮪岬を去る凡そ七丁山手の一丘陵チセリ山（俗名チングリ）山に、大蛇が棲んで居た。或る晴天の日、かの一本木に大鮪が二本の足を卷きつけ、日向ぼつこをして居るのを件んの大蛇が見つけて近づき、直ぐ樣戰を挑んだ。人々は門口に出て見物したが、薄氣味惡く誠に物凄い有樣であつた。鮪は二本足で相手をして居たが、形勢非なるを見て更に二本を增加し、勝敗は容易に決しなかつた。

鮪は更に危險と見て足を增した。大蛇は尾を一本木に卷きつけ、猛烈に鮪の足に噛みついた。事容易ならじと鮪は得意の墨潮を吹きちらして姿を隱しては爭ひ、遂に大蛇を征服した。

其の後明治時代に入つて漁業家が、毎年五六月頃その附近でホツキ貝を採集してゐると、かの大鮪が怒つて暴れ出し、大波を捲き起すので、漁民恐怖の一つとなつてゐた。後にこの鮪は江差鷗島に移したと言ひ傳へられる。そしてその頃から鰊漁も少くなつたと云ふことである。鮪の棲んだ穴は、現在芥で埋まつて、大浪の時には、その邊一帶の海面が濁ると云はれてゐる。

明治三十八年、有名な一本木は九月二十三日の大暴風（北風、この邊ではシモカゼと云ふ）のため吹き折られ、根元より約三尺程を殘して、他は海中に落ちたが、その頁木は行衞不明となり、此れ亦漁民不可思議の一とされてゐたといふ。但し殘つた根元は今尙殘存してゐるのである。

第三十圖版　チ　セ　リ　山

乙部本村の北端を流るゝ姫川は、昔シヤモ（和人）地とアイヌ（蝦夷）地との境であつたと云ふ。

姫川の名の由來は昔この川上に上味屋（味屋は秋味ふ屋の意）と下味屋とがあつて、この味屋で獲つた鮭の運上料（稅金）は代々松前家の姫君のお化粧料として徴收せられた爲に、姫川と稱せられたといふのである。

一五、鮪岬の蛸

第二十九圖版　鮪　岬

乙部村大字三ツ谷村と同村蚊柱村の村界に、海岸深く突き出て居る丘がある。名を鮪岬といふ。附近一帶は楓林である。又蚊柱村社、諏訪樣の社殿も一段目立つて聳えて居る。此處は昔鰊の本場といはれ殷賑な光景を呈したものだ。

その頃のこと、鮪岬突端近くに（蚊柱村側）大蛸が棲息して居た。その棲んだ穴は水面より凡そ十二三尋で、奥深い欄の樣であるといふが、誰も穴の中の樣子については知らなかつた。又この水面より約五六丈程上の岩壁に、畑地のやうな樣をなせる平岩（一名畑岩）に、一本木と呼ばれる一本の大きな楓の樹が生えて、枝振り面白く海面になびいてゐた。年月は詳らかでないが、約二百年程昔、鰊の豐漁時代

第二十八圖版　姫　川

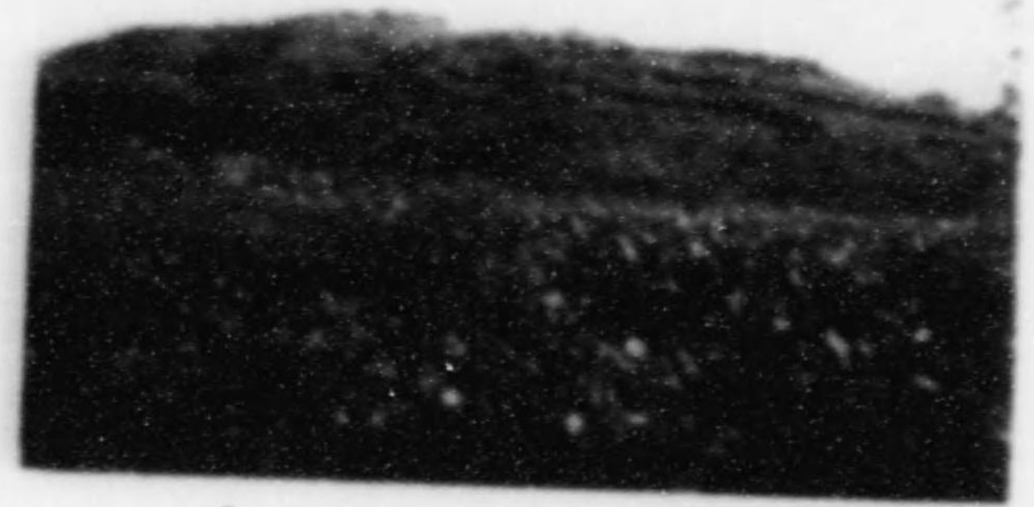
のこと、この大蛸と大蛇との闘爭物語がある。

鮪岬を去る凡そ七丁山手の一丘陵チモリ山（俗名チンダリ）山に、大蛇が棲んで居た。或る晴天の日、かの一本木に大蛸が二本の足を卷きつけ、日向ぼつこをして居るのを件の大蛇が見つけて近つき、直ぐ樣戰を挑んだ。人々は門口に出て見物したが、薄氣味惡く誠に物凄い有樣であつた。蛸は二本足で相手をして居たが、形勢非なるを見て更に二本を增加し、勝敗は容易に決しなかつた。

蛸は更に危險と見て足を增した。大蛇は尾を一本木に卷きつけ、猛烈に蛸の足に噛みついた。事容易ならじと蛸は得意の墨潮を吹きちらして姿を隱しては爭ひ、遂に大蛇を征服した。

其の後明治時代に入つて漁業家が、毎年五六月頃その附近でホツキ貝を採集してゐると、かの大蛸が怒つて暴れ出し、大波を捲き起すので、漁民恐怖の一つとなつてゐた。後にこの蛸は江差鷗島に嫁したと言ひ傳へられる。そしてその頃から鰊漁も少くなつたと云ふことである。蛸の棲んだ穴は、現在芥で埋まつて、大涸の時には、その邊一帶の海面が濁ると云はれてゐる。

明治三十八年、有名な一本木は九月二十三日の大烈風（北風、この邊ではシモカゼと云ふ）のため吹き折られ、根元より約三尺程を殘して、他は海中に落ちたが、その巨木は行衞不明となり、此れ亦漁民不可思議の一とされてゐたといふ。但し殘つた根元は今尙殘存してゐるのである。



第三十圖版　チ　モ　リ　山

鯖岬に棲息した大蛸の移動についての他の一説として、大蛸は泊村五厘澤温泉附近の大沼に轉し、今でも蛸穴と稱する空洞が現存して居るとも云はれる。

熊石村（爾志村熊石村役場調）

一六、門昌庵縁起

門昌庵開祖柏巖峰樹禪師は、寛永十年、越後蒲原郡出雲崎に生れ、長じて文武兩道に達し、後武を以て身を立てんとし諸國を遍歴修業して、明歷元年、廿三の年、北海道松前福山に渡り、一日法源寺に詣で、雲霸柏巖禪師の禪學を提唱さるゝを聞き、翻然として感ずる處あり、忽ち武を擲つて師の門に投じて出家したのである。

爾來師に侍すること十三年、其の間刻苦精勵日夜倦まず、遂に禪道の奧義を極め、德望一世に高く、名僧智識として遠近ひとしく景慕するに至つた。時に寛文五年、師年卅五の秋、藩主の特請により、法幢寺六世の住持となつたのである。

法幢寺は藩主松前侯歷代の菩提所であるから、禪師は時の藩主矩廣の信任最も厚く、一般民衆の歸依讃仰は活佛の名を捧げて惜まなかつた。

矩廣は參禪學道の傍、詩和歌なども禪師を師として嗜み、常に法幢寺にあつて禪師の謦咳に接することを何よりの樂しみとして居た。

然るに、如何なる宿世因業の絡まりであつたらうか、柏巖禪師はこの矩廣の爲に、無慘の最期を遂ぐるに至つたのである。

當時の松前藩は、其の歷代を通じて、最も繁盛を極めた時代であり、又其れと共に遊惰にも流れたのである。

由來松前藩の財源は、無盡藏な沿岸一帶の漁場を内地人に請負はしめ、其の稅金を以て唯一の收入とし、又往來の船舶には一々課稅を賦して、船改めと云ふものをした、而して漁獲物の石數などは、すべて船役人の手加減に依つて定まつたのである。

一日千金を爭ふ商船と漁船、殊に天候に依つて進退すべき帆船が檢査の爲に其の自由を得ず、是れ程苦痛なるものはない。

泣く子と地頭には勝たれず、何れも贈りものをして、認可を得るを常とした。

是れがため、一度船役人たることを得ば門前俄かに市をなし、三年間無役無祿たるも、妻室を賣つてなほ餘り有りと云ふ豪勢さであつたので、藩士の船役人を望むは重臣家老職を願ふよりも甚しと云ふ狀態であつた。

當時の藩中に於て、誠忠無二、實に一藩の柱石とも謂はるべきは主君矩廣の叔父にして且つ後見の地位にある、家老松前泰廣其の人であつた。

併し乍ら、泰廣は常に江戸表に在藩してゐたため、親しく藩政を見ることは殆んどなかつた、斯うした時代に當つて、藩主矩廣は、年僅かに七歲にして父高廣の後を繼ぎ、殿中にて多くの婦女子の手に由つて成人したので、聰明なりと雖も、又一面放縱なる點も少くなかつた。

尤も矩廣の晩年は、大に善政を布き治績の頗る見るべきものがあつたので、五代慶廣と十四代章廣と共に、松前家の三英主と名づけられるに至つた。

今も福山法幢寺に矩廣直筆の大涅槃像の一軸が現存して居る。之は矩廣が晩年懺悔の生活を物語るものである。士氣尚武の念既に去り、主君又幼年なり、此の間に乘じて、私腹を肥さんとする奸臣の出づる又當然であつた。時は延寶四年、藩主矩廣十八歲、徐々に主君を籠絡して、己の威福を恣にせんとする奸臣の巨魁、杉村治持、酒井好種の四人相謀りて、藩中美人の譽高き一味の奸臣、明石種直の娘を說いて、主君未だ正室なし、若し寵幸を得ば、吾等之を執りなし必ず正室と成さんと、言葉巧みに殿中に入れて侍女となし、彼等又主君の恩寵を一身に集めんとした。

若き藩主矩廣は、彼の女を幾江と命名して愛すること限りなく、月の夕花の宴、必ず幾江を座右に侍せしめ、奸臣の一黨又傍より興を扶けて、日夜歡樂を恣にした。奸臣の一味は秘かに事の成れるを喜んだのである。然るに、此の事端なくも、江戸在藩の家老松前泰廣の聞く處となり、如是き徵綠の臣下より、正室を迎ふる事あらば、後日必ず禍起らんと直に國老に訴へて、正室を定むることになつた。

矩廣年十九の秋、京都の公卿、唐橋侍從菅原在庸の姫君、雪の方と申される美しき奥方を迎へることになつた。然るに、新婚の夢まどかに、閨房の語らひ未だ濃かなる翌年の七月、無慘にも奥方は事を企らむ奸臣達の爲に毒殺されて、憐れ芳紀十八の盛りを一期として、北海の嵐に散つて了つたのである。而し大奸は大忠に似たりで、奸臣達は常に矩廣に随侍して巧言令色ひたすら寵愛を恣にして居る輩であるから、公をして何の疑ひも起さしめずに、胡魔化しおほせたのである。

未だ一年も充たぬ中に、奸臣ばらの手に愛妻を奪ひ去られた若き藩主の胸は哀傷の情を癒すべくもなかつた。幾江僅かに主君の憂鬱を解くと雖も、彼の女素より才學あるに非ず、典雅あるにも非ず、唯紅色醇醴酒を資くるのみであり、矩廣の如き、多趣味にして放恣なる者の、永く此の單調なる淫樂に堪へ得るわけはない。

哀慕の念やるかたなき矩廣は、一日二三の近侍を伴ろて、郊外の海濱を微行して歸るさ、或る家の垣根越に、琴の音に和して洩れ來る、妙へなる聲を耳にした。

思はず垣間を見れば、殘照の光りを滴る綠の黑髮に映ひ盡し、やさしき手を絃上に泳がせ、朱唇を振はして唄ふ其の顏、殿は哀傷の念も忽ち飛んで、其の場に呆然と立ち盡くしたのである。

自恣奔放に育てられた領主のこと、何んで其の儘に打捨て置かうか、早速召し出して侍女にと厳命を下したのである。殿の御意にかなつた娘は、丸山小町とあだなされた、藩士丸山久治郎兵衞清康の妹喬子であつた。（劇に暗の夜の久治郎兵衞とあるは此の人の事である。）

喬子には、假りに亡父の遺言した許嫁があつた。彼は江戸勤番中、他藩の武士と聊かの事より、口論をなし、途に相手二人を斬つて逐電して了つた。許嫁の約はすでに破れてしまつたが喬子は夠相見るの日もがなと、節を守つて居たのであつた。殿より御召しの命を受けても、少しも榮譽とは思はず、寧ろ貞節の缺けんことを恐れて、虔んで辭退するばかりであつた。

是が非でも我意を通さずばおかぬ封建時代の暴君、如何なる理由にも借す耳は持つて居らぬ、泣いて嫌がる喬子を無

理やりに御殿に引出した。

素より賢明なる喬子のこと、いつ迄も無益の意地は張つて居ない。かくなる上はと覺悟をきめて、禮儀正しく忠義に勤めて媚びずへつらはず、淡々としてなすべきをなした。賭のない喬子の奉仕振りは、媚を賣つて名を得利を求めんとする數多の侍女の中に在つて、嶄然屹立する富峰の氣高さがあつた。

殿の寵愛は殿の意より違ざからんとする喬子の思ひに反して、日に夜に加はつていつた。名も松江と改められて、以前重用の侍女は皆しりぞけられ、松江一人殿のお傍に侍する様になつた。

斯うなると古い女中共の嫉みは松江の一身に集中された。中にも女中頭の幾江は殿の寵愛を恣にして居た上に奸臣の一味であつたから、默つて見て居る事は出來ぬ、何んとかして殿の正室に直らんと苦心してゐるにも拘らず、松江に殿の寵愛を奪はれて了つた彼女は、一味と共に凡ゆる奸策を用ひて、松江を陷れ様とした。

松前家に家傳の重寶があつた。之は五世慶廣公が豐太閤より賜はつた菓子器で、主君の外何人も手を觸るゝ事を許さぬと云ふ程の重寶であつた。

一日、酒井、故意にこれを打ち碎いて、其の破片を集め、松江の前に持ち來り、

「此の菓子器は御家の重寶なるが、今幾江過つて之を落し碎く、主君若し之れを聞かれなば、必ず幾江の一命を奪ふならん、幾江は近く正室となるべき人なり、今此の過の爲に手討にさるゝ事もあらば、主君は重寶と正室とを一時に失はれ、其の失望如何にも臣下として見るに忍びざる所、御身が今日の光榮は一に幾江等の恩惠に依る事を知らば、御身今其の罪を負ひて主君に詫を乞ひ、幾江の危難を救はれよ。」と云つた。

松江之れを聞いて少時呆然、言を俛れて、云ふべき言葉もなかつた。酒井は更に其の決心を促さんとして、

「御身の兄清康は壯年にして前途遙かなり、若し御身我等の願を聞かずとせば我等亦考ふる處あり、清康の禍福は、吾等の掌中に在るも同然、好く〳〵考へて返答致されよ。」と云ふのだつた。

松江熟々思へらく、妾の御殿に入りしは素より我がためにあらず、只獨りの兄上は未だ年若く榮達を望むこと切なり、然るに、一年ならずして近侍御側頭に惜まれたば如何なる奇禍を買ふやも知れず、彼等の爲に棄つる命と思へば、髮一筋も惜しけれど、兄上のためと思へば、我命素より惜しむに足らず、女の命も役に立つ時はありと、莞爾として笑を含める様、恰も天女の如く、

「酒井様御心配なさるゝな、野菊の一株も御手向け下さるか？」といはれて、流石、奸惡無道の酒井も礑と心に應へて、白刄の頭に下りしが如く、思はず冷汗の背に下るを覺えた。

松江は襟を正して御前に出で其の破片を示して罪を請うた。

主君矩廣手に取りてヂツト之れを視、又自ら之を箱に藏めて、

「之を碎くに餘程骨の折れたることならん、怪我はせざるか、死したる寶の往々人を誤る事は、古來其の例乏しからず、器を破りし其方の手こそ、生きたる寶物ぢや喃！」と聲を放つて事もなげに大笑した。

他人の罪を背負ひて詫をすれば、却つて生きた寶物だと褒められる、酒井等秘かに之を聞いて呟いた。

「馬鹿々々しいかな、夜もろくに眠らずして考へし苦肉の策、却つて松江が功名にならんとは……。」

御側頭明石肖政、あはたゞしく殿の御前に進み、其の破片を差出して

「當家の重寳を破りし者御座りますれば、臣等の役目相立ち申さず乾度糺明して、嚴刑に處し度何卒此旨御許しの程を。」と。

矩廣は平然として、

「予過つて之を破る、役目立たざれば予を嚴刑に處せよ、他の者は糺すこと勿れ。」と云つた。

尙政は言葉もなく何時しか姿を消して行つた。彼等の策謀は事毎に、却つて殿の松江に對する愛を深めるばかりであつた。

兄の淸康は妹松江が殿中に於て、飽なき寵げをうくると聞いて、兄妹の情塲へ赴く、殿が深く信任される、法憧寺柏巖禪師の處へ行つて、妹の譏せられるをお聞き入れなき樣殿に忠言を賴んだのである。

或日（延寳五年十月廿日蛭子講）矩廣は壽金寺淨玄の處へ侍女をつれ微行し、御歌會を催して興を盡し、更に菩提寺に柏巖禪師を訪れて、四方山のお話しをかはし、旣に日沒に及んだが、矩廣は頗る滿悅の體であつた。

其の節禪師は豫て、一度諫言申上げようとして居つた時であり、又淸康の賴みもあつたので、好機逸すべからずと、直ちに壁上に尾州政秀寺の献額を模したる一軸を懸け、織田信長の師傅平手政秀の故事を引いて諄々と忠諫し、更に一步を進め、讒者の言を信じて、松江を損はれる樣の事なきをお諫め申上げた。矩廣は禪師の諫言を深く謝して、機嫌よく歸館したのである。

松江は殿に取つて、こよなきいとしきものであり、松江あるによつて生甲斐ある程の愛寵であつた。松江は殿の心持を察せぬではなかつたが、併し彼女の心に生きてゐるものは、互に末を約した愛人だけであつて、權勢も、富貴も、塵埃ほどの價値も認めなかつた。何物にも碎けぬ松江の純潔はいよ〳〵殿の情炎を煽るばかりであつた。

或夜近侍の細界貞利、酒井好種、吉田信顯、杉村治持の四人、つゝましく殿の御前に進んで、御内密に申し上げたき一大事に御座りますれば、畏れながら御人拂を願ひ奉りますとのことに、矩廣は何事ならんと、眉をひそめつゝも、御側衆を退座させた。

此の四人こそ殿をめぐる佞臣の巨魁である。彼等は恐れ畏んで、

「誠に申し上げ難き事にて御座りまするが、實は松江の事に就いてで御座ります。松江は微祿の身の上ながら殿の御引立に殿中第一の榮耀身に餘りながら、猶他に心を移す不屆者奴に御座りまする、その者は人もあらうに、當家歷代の御靈を預りまする、菩提寺の和尙柏巖にござりまする。松江は佛參に事よせ、柏巖和尙の許へ通ひし事屢々にて、人目をもひき、人の噂にも立ちをる次第にて、尋常一樣の交際とは、誰の眼にも受取れ申さず、甚だ怪しからざる仕儀と存じまする。又或る時は淸凉院（矩廣の祖母）了光院（矩廣の繼母）佛參の砌り、他の侍女にお供仰下されても、松江は老女達の言葉に從はず、さゝいの事にかこつけ、隨意に御伴いたし居りまする樣、聞き及びました。是れなども誠に怪しき仕儀と心得まする、若し萬一殿の御身の上に宜しからざる謀りごとなどござりましてはと存じ心痛のあまり、一寸殿のお耳にお入れ申し度く夜中推參致せし次第にござります。」

賢明なる主君ではあつたが、何分にもまだ漸く廿一、二歲の弱冠ではあり、まことしやかな、近侍の言葉にふと釣り込まれてしまつた。

「よし下れ。」と荒々しい殿の言葉に、四人は心の中に北叟笑をなしつゝ退つて行つた。殿は破れよとばかりに鈴を振り鳴

らした。

松江は急いで、「御用は。」と敷居の上に頭を下げると、「己れ不義者奴――。」といきなり白刄が松江の面上に落ちて来た。松江は「アレツ―」と、身を翻して廊下の方へ逃げ出した。矩廣は後を逐うて追駈ける。「お助け―。」と絹を裂く様な聲を張り上げて逃げる松江を表廣間の口にて近付き、サツト一太刀浴びせた、「アツ。」と松江は其の場に倒れた。（後此の處を松前の濡れ椽と稱した。）

此の騒ぎに、御側付の人々がはせ付ける。御守役の新井田好壽は、今丁度西の丸から登城の折柄であつたので、此の光景を目にとめるが早いか、殿を後よりガツシリと抱き留めた。

好壽が涙乍らの諫言に、漸く猛る心を押し靜めて、刀を其の場へ投げ出した。松江は些少のかすり傷で、危い命を助かつた。

然し矩廣の怒りは容易に解けぬ、松江は臣下にお預けとなり、同時に柏巖禪師は熊石の海邊に流罪と決まつた。上使が法憧寺へ參り、此の旨を告げた時、禪師は唯上意畏りましたとのみ、驚きもせず、敢て原因を極めようともせず、其の儘寃罪に服されたのである。

之が禪師の偉大なる處で、若し禪師が其の原因を極めんとしたならば、當時松前藩の紊亂醜狀は悉く世に暴露され、藩の存在すら危ぶまれるに至つたのであるが、幸に禪師の犠牲的精神に由つて事なきを得、唯獨り藩の紊亂を一身に引受けて流罪を承けたのである。

城中の重役や、近郊の寺院紳主など、禪師の寃罪を雪がうと百方苦心したが、侫臣どもがあくまで殿の心を惑して居たので、如何ともし難く、柏巖禪師は遂に熊石の配所に流され、いぶせき草庵に閉される身の上となつた。

柏巖禪師は誰を恨むこともなく、光風霽月を友として、淸らかなる獨居の生活に甘んじて居た。禪師には寃罪もなく、流罪もなきかの如くであつた。

此の頃矩廣は江戸に在つて、健康常に勝れず、病床に呻吟する日が多かつた。侫臣共は何故か、又殿に讒訴を進めた。「殿の惱みは、熊石に流されたる彼の柏巖の呪ひの祈禱によるもので、彼の柏巖ある以上殿の御惱みは癒るときはありませぬ。」と。

既に心の亂れて居る矩廣である。「己れ憎き柏巖め、早々首を討ちとつて參れ。」と、前後の思慮もなく無慘の命を下した。

時に延寶六年十二月廿二日、細界貞利、松村昌次、明石、酒井等を主班として檢使一行十六人、禪師討取りの命を受けて、曉の霧深くこめたる草庵の外に立つた。

雨戸を叩く音に眼を覺ました禪師は、忙いで戸を引明け、「どなた樣に御座りますか。」と慇懃に頭を下げた。武士の一人は、威猛高に、「御上意だつ。」と怒鳴つた。和尙は少しも騒がず、

「其れは遠方の處、御役目御苦勞に存ずる。先づ〱。」と内へ請じ入れた。

「サテ拙僧に如何樣の御上意に御座りませうか。」と平伏すると、下目に睨んだ上使は、聲嚴かに申し渡した。

「汝柏巖、初め侍女松江と不義をなし、既に討ち首にも相成るべきの處、寛大の思召しを以て、當熊石に配流申し渡されしを御慈悲とも心得ず、尙且つ主君の不辟を祈り奉る由不屆至極、其罪許すべからず、依て斬首を申し渡すべきもの也。」

柏巖禪師、聽き終つて神色自若、

「委細畏まつて御座ります。」と唯一言。稍あつて言葉和らかに、

「出家のたしなみも御座りますれば、暫時御猶豫の程を願ひ度う御座います、首をお渡し致しまする前に、衣服を改め最期の讀經を致し度く存じますれば、此の儀何卒御許し下され度く存じます。」と願つたので、上使も否み難く早く致せと許した。

禪師は急いで支度を整へ、從容として常の如く、音吐朗々日頃信奉する、大般若理趣分經の一卷を讀み了つた。

「ひどく御暇を取らせて相濟み申さぬ、いざ存分にお討ち取り下されい。」と庭前の小川の邊りに端座して首を差伸べた。

電光一閃禪師の首は毒刄のもとに、ころりと落ちた。此の時小川の水は、此の惡逆を悄むかの如く物凄い響を立てゝ逆さまに流れた。今も逆川の名あるは、實にこれが爲である。

偖て檢使の一行は首を桶に納めて、立ち出でようと思ふと、不思議や今まで青天一點の翳もなかつた大空は、見る見る黑雲に閉されて、眞夜中の如き暗さの中に、豪雨は猛然として降り出した。暴風は惡魔の如く恐しい唸りを立てゝ石を飛ばし枝をちぎつていつた。

一行は恐怖の念に震へつゝも、風雨をついて、上の國村、天の川までやつて來たが、川は早濁流滔々と渦を卷いて氾濫して居て、どうしても渡る事が出來ぬ、止むなく江差迄引返した。

其の夜は、江差の圓通寺に泊ることになり、首桶は御堂の內陣に安置して、一行は其の側で御通夜をすることになつた。

其の夜も森々と更けて丁度丑滿の頃、禪師の首桶のほとりから一抹の焔がチョロ〳〵と立ち上つた、あれよあれよと云ふ間に、火焔はます〳〵烈しくなつてメラ〳〵と忽ち天井をなめ盡した。軈て紅蓮の焔は火の波を起し、黑雲は濛々として風を呼び降りしきる豪雨の中に、さしもの大伽藍もバタ〳〵と燒け落ちて了つた。（此のお寺は燒失後江差より三里餘士橋と云ふ處に移轉して現存して居る）

さるにても不思議なるは、禪師の首にて、桶は跡方もなく燒失したが、首だけは顏色生けるが如く、眉毛一本も燒けて居らぬ。檢使の一行は震へ上つて驚き、此の旨を急使を以つて福山城中に報じた。城中では事の意外に、重臣總登城して評議を致した結果、罪なき高德の出家を斬首せる天罰ならん、斯の如き首を城中に入れなば又如何なる障害の起らんも知れず、速かに首を熊石に戾り遺骸と共に厚く葬りて、其の罪を謝するに如かずと、元の庵の傍に丁寧に葬り玆に一字を建立して門昌庵と名づけた、これは柏巖禪師の字を門昌といつたからである。

星移り月かはり爾後二百五十有餘年、代々の藩主は春秋二囘必ず門昌柏巖禪師の菩提を弔うて、鄭重なる法要を勤めた。

（附記）門昌庵の山門は今を去る凡そ三百五十年前、天正十九年二月朔日、豐臣秀吉公より、松前藩五世慶廣へ賜られし桃山別殿の裏門なりしが、後十六代藩主昌廣の當庵へ寄進せるものにして實に歷史的建造物である。後明治十八年改築したが、金具及門扉等は往時のものを使用したのである。

（門昌庵十三世伊藤重雄「門昌庵緣起」に據る）

一七、雲石の由来

後奈良天皇の享祿年間、工藤九郎左衛門尉祐兼の館が瀬田内（現今の瀬棚町）にあつた。祐兼は武田信廣と共に渡島した工藤祐長の四世の孫で松前家の重臣であつた。二世光廣が永正十五年七月十二日に福山で卒したので、嫡男義廣が家を繼いだ。

義廣小字を新三郎良廣といひ、長じて民部大輔若狹守と稱した。文明十一年七月勝山（檜山郡上ノ國村字勝山）に生まれ、父の後を嗣いだ時は最早四十歳と言ふ分別盛りであつた。大永元年三月、高廣の子蠣崎太郎基廣をして上ノ國勝山城を守らしめた。高廣は義廣の弟で、基廣はその子であり、義廣の甥である。彼は名族たることを恃んで意驕り放縱の振舞が多かつたので、紀綱大いに紊れた。上が既に然りであつたから、下々も亦暴戻なる者が多く、常に蝦夷を苦しめたのである。

例へば夷人は非常にその墳塋を尊重するのであるが、この墳塋に對して尿をする樣な者さへあつた。夷人が若しこれを責めると、彼等和人は「辨償はしよう、然し本當に墳塋であるかどうか掘起して見るが、よろしいか。」と云つて威嚇するので、夷人は却つて恐れをなし、自分等の方で和人に償ひして許しを請ふといふ樣な有樣であつた。又夷人が神聖視してゐる熊をけがし、その非を責めると常に巧みに理を飾つて逆しまに償ひを出させると言ふ樣な具合であつた。

堪りかねた夷人は大永五年春遂に期せずして東西に蜂起し、和人に向つて猛烈な反抗を試みたのである。このため和人の死傷頗る多く、忽に難を松前及び天の川（上ノ國村）に避けた。

享祿元年五月、蝦夷は勝に乘じて、進んで松前に迫つた。そして城を圍んで毒箭を亂射すること雨の如くであつたから、城兵は一歩も出ることが出來ず、暫くの間持久戰に入つた。ところがその月の二十三日、暴風砂を捲き仏田鼻突くばかりの暗夜、時こそ來れと夷人は百餘人の決死隊を組織して城壁を乘越えようとした。この時義廣は、萬一の事あらばと自ら壯士を率ゐて城中を巡視してゐたのであつたが、正に西柵を踰えんとする夷賊の一隊に出くわした。御座んなれとばかり象綱の偃手槍を揮つて一喝して先登の賊を刺し、その臆甲を貫いた。部下の壯士も亦相ついで城壁に攀附する賊夷を刺した。この勢に驚いた賊は忽ち潰走して、此の亂は自ら平定した。

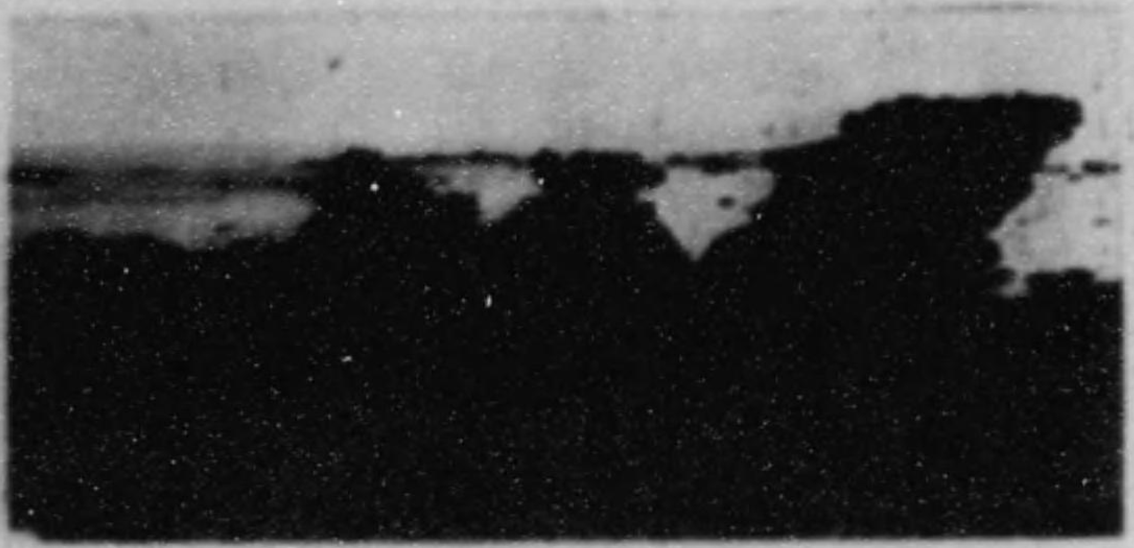
すると翌二年三月、西部の酋長多奈計支と言ふ者が、復仇のためまた〳〵大軍を起して瀬田内の館を襲つたので、變を聞いた義廣は先づ和喜城に入り以て瀬田内を聲援した。

和喜城といふのは、檜山郡上ノ國の河南にある勝山の支城で、頗る險要の地であつた。慶廣の時酒井七之助これを守り、後に南條越中が代り、松前にとつては中々忽せに出來ない要砦である。

多奈計支は先づ衆徒を擁して兵糧攻にしようと持久の策をとつたので、城兵は次第に窮困して來た。その時祐兼の弟に祐致と言ふものがあつた。驍名の高い勇士であつたが、彼は一日主命によつて上ノ國に向かつた。これを知つた蝦夷はこの時と許り決死の壯者七百五十人を以て急に攻め立てた。祐兼は殊死して四門を防いだが、手兵寡きため遂に西柵を破られてしまつた。祐兼は之を視て獅子奮迅の勇を揮つて起ち向かつたが、如何せん、力及ばず賊刄に斃れた。多奈計支の喜びは如何許りであつたらう、彼等は勢に乘じて更に上ノ國をも攻め落さうと南下して來た。

祐兼の弟二郎祐致は上ノ國で此の知らせを聞くや、切齒扼腕遙か北方を睨んで言ふには、

「自分が居さへすれば、兄は殺させぬものを殘念だ。必ずこの仇を討つて兄の恨を報いてやる」と。



第三十一圖版　奇　巖　雲　石

多奈計支の南下するを聞くや手兵を率ゐて途中にこれを邀へ討つた。激戦數刻、賊は戦勝の精鋭なる上に、永く鋒を蓄へたるものであり、而もその數は我に數倍である。結致如何に勇ありとも何分の寡勢、苦戦に苦戦を重ねて遂に敗れんとし、賊に迫られて殆んどその身も危くなつた。進退谷まつた結致は傍の大きな岩に急いで其の身を隠した。夷賊は益々迫つた。

此の時である。黒雲俄に岩間より涌湧して晦冥あたりを辨ぜず、おまけに異臭紛々鼻を撲つて流石の夷賊も近づく事が出来ず、却つてその奇象に怖れをなして逃げ去つた。危くも難を逃れた結致は直に和喜城に入り、終に奇計をめぐらし多奈計支を討取ることが出来たのである。後の人々は此の巨巖を雲石と稱し、又村名の起原となつたと言うて居る。この岩は現在熊石村字掛澗と字畑中の境界なる雲石岬に突出して奇勝を呈し、熊石の史蹟名勝として世に喧傳せられて居る。

貝取澗村（久遠郡貝取澗村役場調）

一八、寄場の話

昔は大罪人を奥尻島に流罪にした。そして天候等に因つて小川の寄場に其の重罪人と輕微の罪人とを留置した相である。

此の寄場を距る南方六町の地點弓山の麓に、是等の囚人で病死せる者を埋葬した箇所がある。

第三十二圖版　貝　取　澗　村　長　磯

安政六年生れの大字平田内村、稲船淺次郎がまだ八、九歳の頃、當時の寄場の主任を丈野六郎、下役を杉山庄右衛門といつた。囚人放免の時は必ず身柄引取人を要したが、因人の中で通稱「日ノ金」と云ふ者は粗暴で誰も引受人がなかつた。

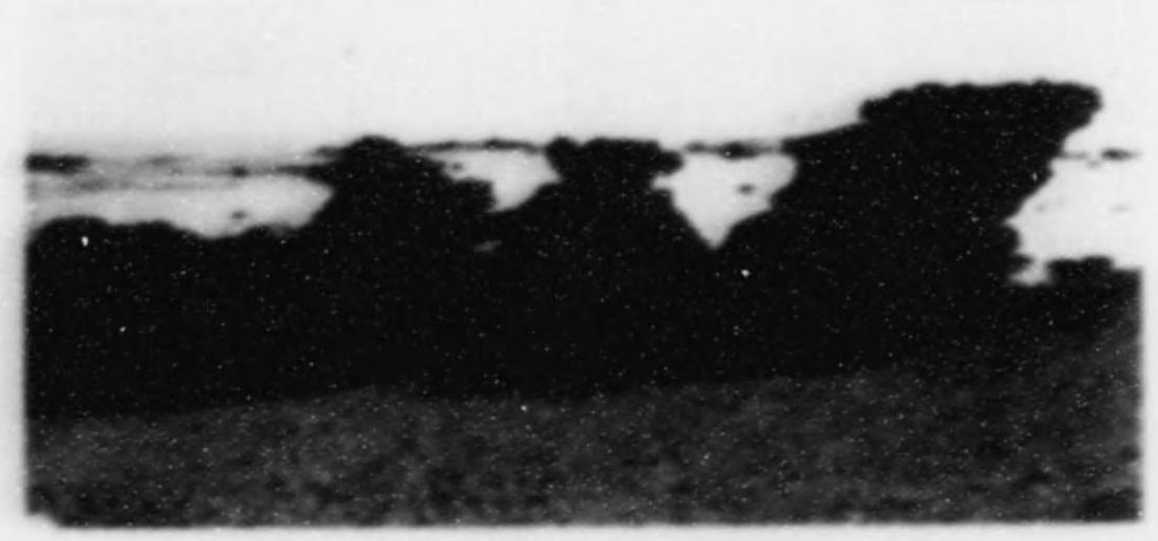
放免の日「日ノ金」は如何にして酒を手に入れたか、酩酊して下役の杉山庄右衛門に對し喧嘩を吹き掛け、杉山は激怒の餘り、竹柄の柄杓を以て毆打して死に至らしめ、之を弓山の麓に埋めたとの事であるが、因人で、殺された者は、この「日ノ金」一人であると云ふ。

丈野の年齢は不明だが杉山は當時三十七八歳であつたと言ふ。寄場は間口五間奥行十二間位の格子附の頑丈なるもので、寄場の南方に丈野の邸宅があつたと云はれる。

其の當時、寄場屋上げの大餅某と云ふ醫者があり、大餅の邸宅も小川にあつたとの事である。

多奈計支の南下するを聞くや手兵を率ゐて途中にこれを迎へ討つた。激戰數刻、賊は戰勝の精鋭なる上に、永く怨を蓄へたるものであり、而もその數は我に數倍である。銃致如何に勇ありとも何分の寡勢、苦戰に苦戰を重ねて遂に敗れんとし、賊に迫られて殆んどその身も危くなつた。進退谷まつた銃致は傍の大きな岩に急いで其の身を匿した。夷賊は益々迫つた。

此の時である。黑雲俄に岩間より發湧して晦冥あたりを鎖ざす。おまけに異臭紛々鼻を撲つて流石の夷賊も近づく事が出來ず、却つてその奇變に怖れをなして逃げ去つた。危くも難を逃れた銃致は直に知内城に入り、終に奇計をめぐらし多奈計支を討取ることが出來たのである。後の人々は此の巨巖を雲石と稱し、又村名の起原となつたと言うて居る。この岩は現在熊石村字掛澗と字畑中の境界なる雲石岬に突出して奇勝を呈し、熊石の史蹟名勝として世に喧傳せられて居る。



第三十一圖版　奇巖雲石

貝取澗村

（久遠郡貝取澗村役場調）

一八、寄場の話

昔は大罪人を奥尻島に流罪にした。そして天候等に因つて小川の寄場に其の重罪人と輕微の罪人とを留置した所である。

此の寄場を距る南方六町の地點弓山の麓に、是等の囚人で病死せる者を埋葬した箇所がある。

第三十二圖版　貝取澗村長磯

安政六年生れの大字平田内村、稻船捷次郎がまだ八、九歳の頃、當時の寄場の主任を丈野六郎、下役を杉山庄右衞門といつた。囚人放免の時は必ず身柄引取人を要したが、囚人の中で通稱「日ノ金」と云ふ者は粗暴で誰も引受人がなかつた。放免の日「日ノ金」は如何にして酒を手に入れたか、酩酊して下役の杉山庄右衞門に對し喧嘩を吹き掛け、杉山は激怒の餘り、竹柵の柵杙を以て毆打して死に至らしめ、之を弓山の麓に埋めたとの事であるが、囚人で、殺された者は、この「日ノ金」一人であると云ふ。

丈野の年齡は不明だが杉山は當時三十七八歳であつたと言ふ。寄場は間口五間奥行十二間位の格子附の頑丈なるもので、寄場の南方に丈野の邸宅があつたと云はれる。

其の當時、寄場屋上げの大餘某と云ふ醫者があり、大餘の邸宅も小川にあつたとの事である。

東瀬棚村　（瀬棚郡東瀬棚村役場調）

一九、兜　野

兜野は東瀬棚村字舘より太櫓村に通ずる道路に沿うた利別川右岸の平坦地であつて、貫駒内を距る三十町の處である。享祿二年三月酋長「タナサカシ」が叛亂を企てた爲に、松前家第三代の武田若狹守義廣は福山を進發して上ノ國和喜館に至り、家臣工藤九郎右衛門祐致及び其の弟九兵衛祐致を遣して「タナサカシ」を瀬田内に進撃させた。ところが衆寡敵せず祐致は賊夷數人を斬つて遂にこの地で戰死してしまつた。これより土人は此處を「ノタツプ」と呼んだ。

明治十八年五月、阿波の住民が移住して來たが、移民の一人、折野源藏なる者が開墾の際、金の鍬形の兜を發見したので、その後人々は、兜野と呼ぶやうになつた。

但し發見された兜の現在の所藏者は不明である。

第三十三圖版　兜　野

江差町　（檜山郡江差町役場調）

二〇、鰊の神樣

江差の町がまだ淋しい片田舍であつた昔のこと、どこで生れどこより來たかおりえ婆さんといふ一人の老婆が住んで居た。不思議な事には此のお婆さん雲を見ては雨の降ることを知り、天を仰いでは風の來らんことを察し、天地の間、四季のことごと皆この老女の豫言のはづれたことはなく、人々は神樣のやうに敬つて居た。お婆さんも人々を愛すること我が子の如くするので、皆おりえ婆さん〳〵と慕つてゐた。

或年の二月の初頃、夜の丑三ツ時、鷗島から橋を渡すやうに光が老女の草屋を射た。老女は目を醒まして驚いて其の光輝にしたがつて鷗島に行き、その光を仰いで見ると、髮の白い老翁が岩の上に坐して柴を焚いて居た。やがて其の老翁はおりえ婆さんを招ぎ、小さい瓶を與へて云ふには「此の瓶の中に白い水がある、汝がこれを海中にまいたなら、忽ち大海の色が變つて、米のとぎ汁のやうになり、鰊といふ小魚が海岸に群來ることであらう。春毎に是を擲つて業とせよ」と、云ひ終つて、忽ち姿を消してしまつた。と焚火も同時に消えてしまつた。

老婆は不思議に思つたが、その老翁の敎のまゝに濱邊に火を焚き手を洗ひ淨め、祈を捧げて小瓶の水を海に撒くと果して水は米のとぎ汁の如くなり、鰊が眞黑く群來て來た。そこで人々に網をうたせると、鰊が網に滿ち〳〵て來る。忽ち江差の濱には鰊の山が築かれた。始終を見屆けた老婆は「毎年の春毎に網をおろして生業となし、決してそれを變へてはいけない」と人々に敎へて行方を晦ましてしまつた。人々は驚いて方々探し廻つたが遂に見當らなかつたので、母親を失つたやうに落膽した。そして泣く〳〵老婆の草屋に集まつて見ると一體の神像が飾られてあつた。何の神である

東瀬棚村 （瀬棚郡東瀬棚村役場調）

一九、兜野

兜野は東瀬棚村字錦より太櫓村に通ずる道路に沿うた利別川右岸の平坦地であつて、眞駒内を距る三十町の處である。享祿二年三月酋長「タナサカシ」が叛亂を企てた爲に、松前家第三代の武田若狹守義廣は福山を進發して上ノ國和喜館に至り、家臣工藤九郎右衞門祐兼及び其の弟九兵衞祐致を遣して「タナサカシ」を瀬田内に邀撃させた。ところが衆寡敵せず祐兼は賊夷數人を斬つて遂にこの地で戰死してしまつた。これより土人は此處を「ノタツプ」と呼んだ。

明治十八年五月、阿波の住民が移住して來たが、移民の一人、折野源藏なる者が開墾の際、金の鍬形の兜を發見したので、その後人々は、兜野と呼ぶやうになつた。

但し發見された兜の現在の所藏者は不明である。

第三十三圖版　兜　野

江差町 （檜山郡江差町役場調）

二〇、鰊の神様

江差の町がまだ淋しい片田舎であつた昔のこと、どこで生れどこより來たかおりえ婆さんといふ一人の老婆が住んで居た。不思議な事には此のお婆さん雲を見ては雨の降ることを知り、天を仰いでは風の來らんことを察し、天地の間、四季のことごと皆この老女の豫言のはづれたことはなく、人々は神様のやうに敬つて居た。お婆さんも人々を愛すること我が子の如くするので、皆おりえ婆さん〳〵と慕つてゐた。

或年の二月の初頃、夜の丑三ツ時、鷗島から橋を渡すやうに光が老女の草屋を射た。老女は目を醒まして驚いて其の光跡にしたがつて鷗島に行き、その光を仰いで見ると、髪の白い老翁が岩の上に坐して柴を焚いて居た。やがて其の老翁はおりえ婆さんを招き、小さい瓶を與へて云ふには「此の瓶の中に白い水がある。汝がこれを海中にまいたなら、忽ち大海の色が變つて、米のとぎ汁のやうになり、鰊といふ小魚が海岸に群來ることであらう。春毎に是を獲つて業とせよ」と、云ひ終つて、忽ち姿を消してしまつた。と焚火も同時に消えてしまつた。

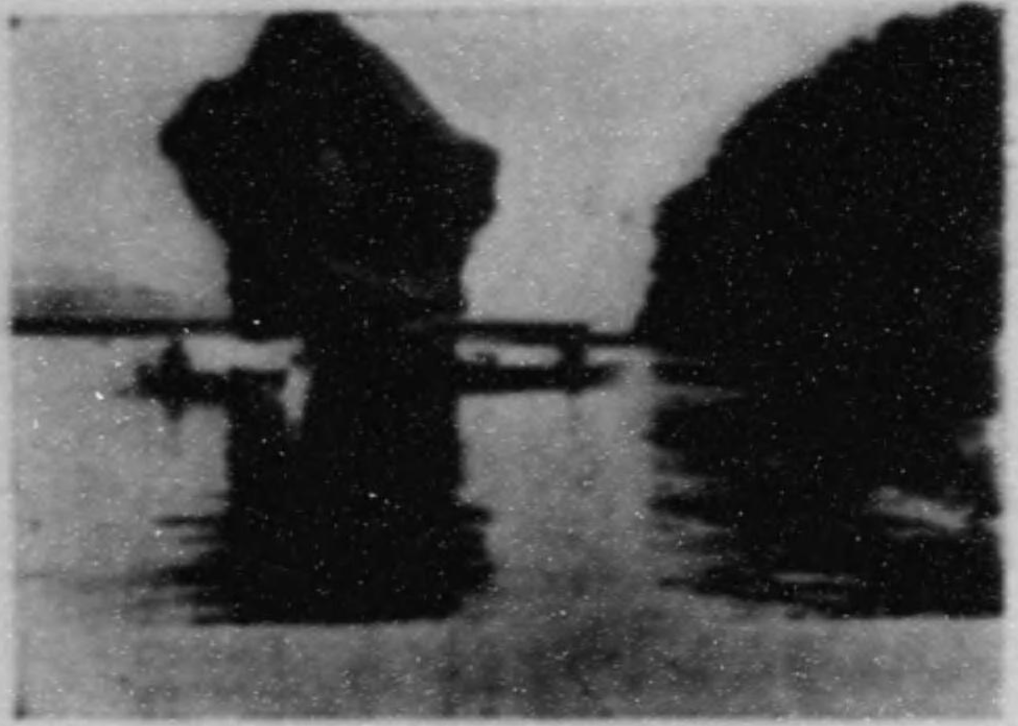
老婆は不思議に思つたが、その老翁の教のまゝに濱邊に火を焚き手を洗ひ淨め、瓶を捧げて小瓶の水を海に撒くと果して水は米のとぎ汁の如くなり、鰊が眞黒く群來て來た。そこで人々に網をうたせると、鰊が網に滿ち〳〵て來る。忽ち江差の濱には鰊の山が築かれた。始終を見屆けた老婆は「毎年の春毎に網をおろして生業となし、決してそれを變へてはいけない」と人々に教へて行方を晦ましてしまつた。人々は驚いて方々探し廻つたが遂に見當らなかつたので、母親を失つたやうに落膽した。そして泣く〳〵老婆の草屋に集まつて見ると一體の神像が飾られてあつた。何の神である

か判斷が着かないが、江差の人々は「姥か神」として祠を造り、永く崇めることになつた。

其の後大分經つてから神職に藤原永武といふ人があつて、彼の姥の神は天照大神、天兒屋根命、住吉大明神の御尊體であると人々に告げたので、正保元年今の場所に遷き祀つた。是が現在の縣社姥神大明神の由來である。

每年七月十一日には今でも盛んな祭典が行はれるが、舊幕時代は遙に盛大なもので、珍らしい舟山車などの山車が二十五六臺以上も曳出され、それに可愛いゝ稚兒の行列があり、松前藩よりは特に祭禮奉行が出張する慣例であつた。

又おりえ婆さんが海に投げた小瓶は岩に化したが、今鷗島の附近にある瓶子岩がそれであると傳へられてゐる。



第三十四圖版　鷗島と瓶子岩

二二、夷宮と姥神

夷人の傳說によると昔、この鷗の濱邊今の江差の地に老人夫婦が忽然と現れた。食ふべき方法を知らなかつたが、或夜夢に神樣があらはれて一箇の船揖を與へて、之で海中を探るべきことを告げた。因つて其のお告げ通りにしたところ、白波が海上に浮かんで其の下から澤山の鯡が出たので、之を採つて食とした。之が卽ち夷人の祖先であつて、今江差に祀つてある夷宮と姥神とは、此の老夫婦を祀つたのであると。

（註）夷宮は、もと鷗島（古名カムイシタ）にあつたが、現在では姥神宮に合祀してある。

（蝦夷風記事、蝦夷見聞、蝦夷民俗彙纂前編に據る）

二三、追分傳說

江差町の名物の一つとして追分節がある。これは多く土地の美女達が粹な厚司姿で蓄音機吹込等で名の賣れた追分の妙手の唄に合はせて、寂びのある蝦夷情調を漂はせながら踊る、地方色豐かな舞踊である。この追分節に絡はる傳說は種々あるが、最も信ずべきものを一つ擧げて見よう。

軍の道にかけては天下無雙の九郞判官義經も、流石兄賴朝の猜疑は如何ともしがたく、吉野山の峯の白雲を踏み分けて、遙々奧州秀衡の許に身を寄せたが、文治五年高館の一戰に本土をすてゝ、海を渡り此の地までやつて來た。當時、此の地の酋長はシタカベといつた。シタカベにはフミキといふ愛くるしい一人の娘が居た。今年十八ですでに婚約の若者があつた。併し一旦此の島に義經が現れてからは、フミキの心はいつしか義經に傾いてしまつた。義經もフミキをいとしく思つたが、大望のある身、或夜ひそかに舟を浮べて岸をはなれた。それと知つてフミキは義經の名を呼びつゝその後を追つた。其の時舟は旣に沖に離れてしまつたので、狂亂の樣になつて斷崖から身を躍らせようとした瞬間、後より抱き留めたのは父のシタカベであつた。父は娘に强いて一切の告白をさせた。驚いた父はこのカムキ島を潰すものだとして忽ち娘を白刄の露と散らしてしまつた。そして翌春になると、フミキの最後を遂げた跡に不思議な草が生えた。いつもその跡に來て歎いてゐた彼の婚約の若者が、一葉を取つて吹いて見ると、嫋々として泣くが如く咽ぶが如く訴ふるが如き、凄艷な音が自然と流れ出た。土人等もやがて其の調子を覺えて舟歌などに唄ひ出した。これが江差追分の濫觴であると傳へられるのである。

追分

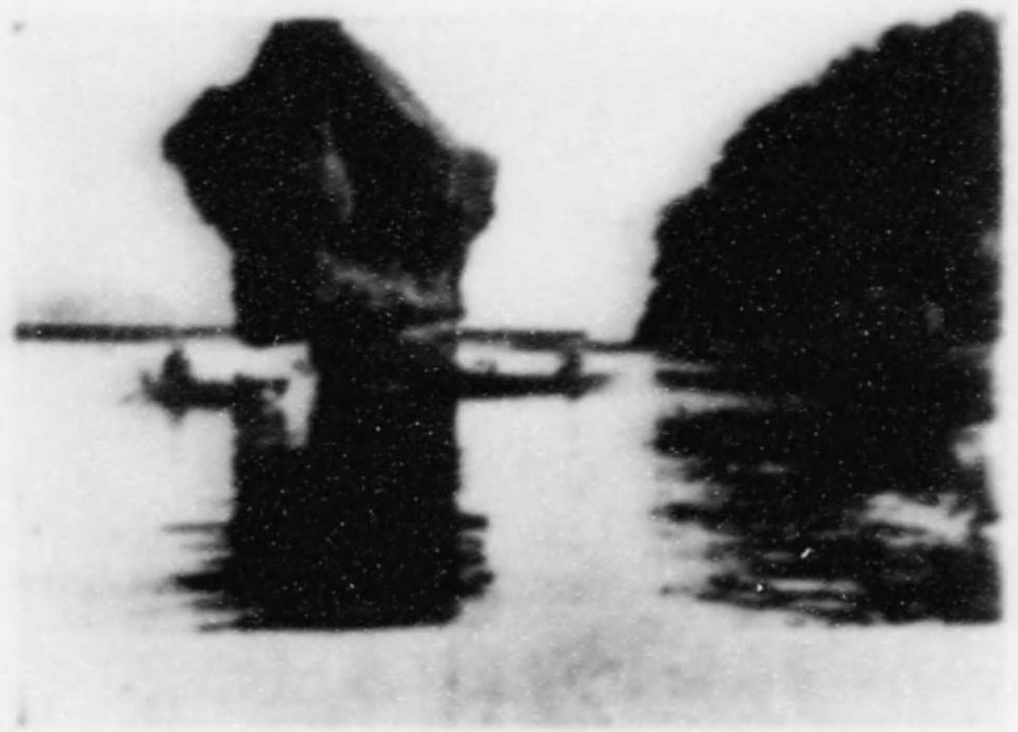
江差町

か判然が着かないが、江差の人々は「姥か神」として祠を造り、永く崇めることになつた。

其の後大分経つてから神職に藤原永武といふ人があつて、彼の姥の神は天照大神、天兒屋根命、住吉大明神の御尊體であると人々に告げたので、正保元年今の場所に鎮き祀つた。是が現在の縣社姥神大明神の由來である。

毎年七月十一日には今でも盛んな祭典が行はれるが、舊幕時代は迄に盛大なもので、珍らしい舟山車などの山車が二十五六臺以上も曳出され、それに可愛いゝ稚兒の行列があり、松前藩よりは特に祭禮奉行が出張する慣例であつた。

又おりえ婆さんが海に投げた小瓶は岩に化したが、今鷗島の附近にある瓶子岩がそれであると傳へられてゐる。



第三十四圖版　鷗島と瓶子岩

二一、夷宮と姥神

夷人の傳説によると昔、この嶋の濱邊今の江差の地に老人夫婦が忽然と現れた。食ふべき方法を知らなかつたが、或夜夢に神様があらはれて一箇の絡掛を與へて、之で海中を探るべきことを告げた。因つて其のお告げ通りにしたところ、白波が海上に浮かんで其の下から澤山の鯡が出たので、之を採つて食とした。之が卽ち夷人の祖先であつて、今江差に祀つてある夷宮と姥神とは、此の老夫婦を祀つたのであると。

（註）夷宮は、もと鷗島（古名カムイシク）にあつたが、現在では姥神宮に合祀してある。

（蝦夷亂記事、蝦夷舊聞、蝦夷風俗彙纂前編に據る）

二二、追分傳説

江差町の名物の一つとして追分節がある。これは多く土地の美女達が粋な厚司姿で蓄音機吹込等で名の賣れた追分の妙手の唄に合はせて、寂びのある蝦夷情調を漂はせながら踊る、地方色豐かな舞踊である。この追分節に絡はる傳説は種々あるが、最も信ずべきものを一つ擧げて見よう。

軍の道にかけては天下無雙の九郎判官義經も、流石兄頼朝の猜疑は如何ともしがたく、吉野山の峯の白雲を踏み分けて、遙々奥州秀衡の許に身を寄せたが、文治五年高館の一戰に本土をすてゝ、海を渡り此の地までやつて來た。當時、此の地の酋長はシタカペといつた。シタカペにはフミキといふ愛くろしい一人の娘が居た。今年十八ですでに婚約の若者があつた。併し一旦此の島に義經が現れてからは、フミキの心はいつしか義經に傾いてしまつた。義經もフミキをいとしく思つたが、大望のある身、或夜ひそかに舟を浮べて岸をはなれた。それと知つてフミキは義經の名を呼びつゝその後を追つた。其の時舟は既に沖に離れてしまつたので、狂亂の様になつて斷岸から身を躍らせようとした瞬間、後より抱き留めたのは父のシタカペであつた。父は娘に強いて一切の告白をさせた。驚いた父はこのカムヰ島を瀆すものだとして忽ち娘を白刄の露と散らしてしまつた。そして翌春になると、フミキの最後を遂げた跡に不思議な草が生えた。いつもその跡に來て歎いてゐた彼の婚約の若者が、一葉を取つて吹いて見ると、嫋々として泣くが如く咽ぶが如く訴ふるが如き、凄艶な音が自然と流れ出た。土人等もやがて其の調子を覺えて舟歌などに唄ひ出した。これが江差追分の濫觴であると傳へられるのである。

追分

江差町

▽忍路高島及びもないがせめて歌棄磯谷まで
▽大島小島の間通る舟は江差通ひか懐しや
▽蝦夷地海路にお神威なくば連れて行きたい場所までも
▽蝦夷の厚司は寒さを凌ぐきても見やんせ都人
▽柴の縁にからまるあの寒さへも落つりや蝦夷地の藪に住む
▽櫓も櫂も波にとられて身は捨小舟どこに取りつく島もない
▽浪の音きくがいやさに山家に住めばまたも聞ゆる鹿の聲
▽船は出て行く鷗は歸る浪は磯うつ日は暮れる
▽西は追分東は關所こゝを越えねば逢はれやせぬ
▽測り知られぬ千尋の海にうかと碇がおろさりよか
▽吹きつけられては寄せくる浪に苦勞絶間のない小舟
▽沖の鷗がものいふならば便りきゝたい聞かせたい
▽蝦夷や松前やらずの雨が七日七夜も降ればよい
▽立田川無理に渡れば紅葉が散るし渡らにや聞かれぬ鹿の聲
▽きた山かはせば江差が見ゆるおも舵たのむよ船頭さん
▽鷗の鳴く音にふと目をさましあれは蝦夷地の山かいな

二三、獅子舞の由來

その舞の面白さ、その扮裝の素晴らしさ、江差五勝手の獅子舞こそ日本一の獅子舞であらう。松前藩の頃には新年毎に姥神神社の神宮が主となり、御役所の表に於て此の獅子舞をやつた。今でも祭禮其の他に出ては人氣を呼んでゐる。これは惡魔除けとか豐漁萬作を壽ぐものである。

五勝手町鹿踊保存會の由來書によると面白い傳說が殘されてゐる。その原文を記せば、

打つや太鼓の音も面白く　舞の手振も拍子も唄も　揃ふ若衆の獅子踊

そも此の獅子踊の濫觴は、今を去ること二百十四年寶永五年、戊子（つちのえね）。天を摩すてふ檜山、繁る樹の間に打ちつどふ、鹿の鳴く音も哀れにて、落葉散りしく秋の末、南部津輕の田舍より松前藩に傭はれて、五勝手村の山林に、每年檜の斫伐に從ふ數多の杣夫の中、狩になれたる杣人が業の休みを幸ひに、弓矢携へ狩に出で、山又山をさまよひて、鮫川越に差掛る。折から前に鹿の群、小山の丘に現れたり。さてこそ獲物ござんなれと、打もの取つて忍び寄り、矢頃を計り引き絞り、打ち放さんとよく見れば、不思議や異樣の鹿の色、何か振舞ふ有樣に、木の間にひそみて見てあれば、青赤黑白四頭の鹿、女鹿を中に面白く遊び廻れるそのうちに、青赤黑の大鹿は、互に女鹿に戯れて勝負を爭ふ如くなり、これを眺めし白しかは、やにはに女し

第三十五圖版　獅子舞

▽忍路高島及びもないがせめて歌棄磯谷まで
▽大島小島の間通る舟は江差通ひか懐しや
▽蝦夷地海路にお神威なくば連れて行きたい場所までも
▽蝦夷の厚司は寒さを凌ぐきても見やんせ都人
▽紫の紐にからまるあの鷹さへも落つりや蝦夷地の藪に住む
▽櫓も櫂も波にとられて身は捨小舟どこに取りつく島もない
▽浪の音きくがいやさに山家に住めばまたも聞ゆる鹿の聲
▽船は出て行く鴎は歸る浪は磯うつ日は暮れる
▽西は追分東は關所こゝを越えねば逢はれやせぬ
▽測り知られぬ千尋の海にうかと碇がおろさりよか
▽吹きつけられては寄せくる浪に苦勞絶間のない小舟
▽沖の鴎がものいふならば便りきゝたい聞かせたい
▽蝦夷や松前やらずの雨が七日七夜も降ればよい
▽立田川無理に渡れば紅葉が散るし渡らにや聞かれぬ鹿の聲
▽きた山かはせば江差が見ゆるおも捌たのむよ船頭さん
▽鴎の鳴く音にふと目をさましあれは蝦夷地の山かいな

二三、獅子舞の由來

その舞の面白さ、その扮裝の素晴らしさ、江差五勝手の獅子舞こそ日本一の獅子舞であらう。松前藩の頃には新年毎に姥神神社の神宮が主となり、御役所の表に於て此の獅子舞をやつた。今でも祭禮其の他に出ては人氣を呼んでゐる。これは惡魔除けとか豐漁萬作を壽ぐものである。

五勝手町鹿踊保存會の由來書によると面白い傳說が殘されてゐる。その原文を記せば、

打つや太鼓の音も面白く　舞の手振も拍子も唄も　揃ふ若衆の獅子踊

そも此の獅子踊の濫觴は、今を去ること二百十四年寶永五年、戊子、天を磨すてふ檜山、鬱る樹の間に打ちつどふ、鹿の啼く音も哀れにて、落葉散りしく秋の末、南部津輕の田舍より松前藩に傭はれて、五勝手村の山林に、毎年檜の斫伐に從ふ數多の杣夫の中、狩になれたる杣人が業の休みを幸ひに、弓矢携へ狩に出で、山又山をさまよひて、鰔川邊に差掛る。折から前に鹿の群、小山の丘に現れたり。さてこそ獲物ござんなれと、打もの取つて忍び寄り、矢頃を計り引き絞り、打ち放さんとよく見れば、不思議や異樣の鹿の色、何か振舞ふ有樣に、木の間にひそみて見てあれば、青赤黑白四頭の鹿、女鹿を中に面白く遊び戯れるそのうちに、青赤黑の大鹿は、互に女鹿に戯れて勝負を爭ふ如くなり、これを眺めし白しかは、やにはに女じ

第三十五圖版　獅　子　舞

かを打透れて叢の繁みに隠れたり。取り殘されし三頭は狂ひ廻りて尋ねけり。暫くありて青しかは漸く女じかを尋ね出し、喜び勇んで連れ來り、己が後へに隠せしに、黒しか一聲猛り立ち、彼の青しかと爭ふて遂に女じかを奪ひ取り己が側へに連れ來り、意氣昂然たる有樣を、先の程より側に控て眺めて居たりし赤しかは、やをら鉢を起すや否、物をも言はず黒しかに角を振り立てゝ突き掛れば黒しか負けじと應戰し、爭ふ樣の物凄く、勝敗更に見えざるが、遂に赤しかに突き捲くられ女じかを奪ひ取られけり。斯く繰返し爭を眺め居たりし白しかは、かくては果てじと仲に入り、しきりに何か囁きしが平和に局や結びけん。一聲高く啼くよと見れば、五頭のしかは打ち揃ひ、踊りつ舞ひつ角振り立て、何處ともなく消え失せぬ。餘り不思議の有樣に或は疑き或は感じ、そのまゝ村に立ち歸り、有りし事ども物語る。村人これを聞き傳へ、斯かる神秘の振舞は神樂てふものにあるならん。傳へ聞くしかは春日明神の甚く愛養し給ふとぞ、いざさらば神を慰む舞の手を仕組みて祭祀に用ゐんと、しかの振舞その儘に、くれの鈴樂にあらねども、彼の行綱の猿樂や金砂に名高き田樂を交へて鼓に踊り初め、笛や太鼓に拍子を合せ、舞ふや目出度きしゝの曲、これこの御樂の由來なり。

五勝手字蝦川越、しかの獅子踊柳と稱する岡には今でも清らかな、芝生が敷かれ自然の舞臺をなして居る。

二四、笹山の神狐

鴎島より眺める時、東北の空を劃つて江差の港に一層の趣を添へるものが笹山である。その頂上に御神體が狐だといふ笹山稲荷が鎮座まし／＼てゐる。六月一日から二日間祭典が行はれて大變賑ふ。境内には處々に狐の穴があつて始終出入りをしてゐる形跡がある。

飯崎廣時の書いた「松前夷談」に笹山狐の傳說が載つてゐる。

寛政の頃、江差の法華寺に一人の美貌の小僧が居た。彼は或る娘に懸想されたが、佛家の身とて、その戒を犯すを怖れて函館の實行寺に身を隠した。然るに間もなくその小僧に狐がつき「俺は笹山の貞滿といふ狐だぞ、然るに人間共は俺の滿の字を論と誤るのが不都合だから片つばしから騙してやる」など云つて氣狂じみた事をやる。經義を論じさせても、文字を書かせても、人間技ではないやうに優れてゐる。然し時々狐の鳴き眞似や油揚を喰ひたがる。これには住職も閉口した。

これこそほんとうに彼の小僧が人を騙したのであつた。一時は娘を避けたものの、遠く離れて見れば、その娘が非常に慕はしくなり、歸心矢の如く思ひ惱んだ擧句、歸る一策を案じて狐つきの眞似をしたのであつた。

二五、順正寺の怪異

江差九艘川町の海に面した所、黑い山門に高い石段といふ構へで大伽藍がある。これが門昌庵に因んだ怪談のある今眞宗大谷派東本願寺別院と呼ばれる順正寺である。

第三十六圖　順　正　寺

松前十代矩廣の享保の頃、福山法憧寺の柏巖峯樹といふ和尚が、殿の御愛妾と通じたといふ奸臣達の讒言により、遂に熊石に配流されて一年ばかり、門昌庵といふ寺に住んでゐた。今熊石の港に面して朱塗の門のあるのがそれである。その

かを打連れて藪の窪みに隱れたり。取り殘されし三頭は狂ひ廻りて尋ねけり。暫くありて靑しかは漸く女じかを尋ね出し、喜び勇んで連れ來り、己が後へに隱せしに、黑しか一聲猛り立ち、彼の靑しかと爭ふて遂に女じかを奪ひ取り己が側へに連れ來り、意氣昂然たる有樣を、先の程より側に寢て眺めて居たりし赤しかは、やをら躰を起すや否、物をも言はず黑しかに角を振り立てゝ突き掛れば黑しか負けじと應戰し、爭ふ樣の物凄く、勝敗更に見えざるが、遂に赤しかに突き捲くられ女じかを奪ひ取られけり。斯く繰返し爭を眺め居たりし白しかは、かくては果てじと仲に入り、しきりに何か囁きしが平和に局や結びけん。一聲高く嘀くよと見れば、五頭のしかは打ち揃ひ、踊りつ舞ひつ角振り立て、何處ともなく消え失せぬ。餘り不思議の有樣に或は驚き或は感じ、そのまゝ村に立ち歸り、有りし事ども物語る。村人これを聞き傳へ、斯かる神秘の振舞は神樂てふものにあるならん。傳へ聞くしかは春日明神の甚く愛養し給ふとぞ、いざさらば神を慰む舞の手を仕組みて祭祀に用ゐんと、しかの振舞その儘に、くれの舞樂にあらねども、彼の行綱の猿樂や金砂に名高き田樂を交へて鼓に踊り初め、笛や太鼓に拍子を合せ、舞ふや目出度きしゝの曲、

これこの舞樂の由來なり。

五勝手字殿川越、しかの獅子踊掲と稱する國には今でも淸らかな、芝生が敷かれ自然の舞臺をなして居る。

二四、笹山の神狐

鷗島より眺める時、東北の空を劃つて江差の港に一層の趣を添へるものが笹山である。その頂上に御神體が狐だといふ笹山稻荷が鎭座ましまして居る。六月一日から二日間祭典が行はれて大變賑ふ。境內には處々に狐の穴があつて始終出入りをしてゐる形跡がある。

蠣崎廣時の書いた「松前夷談」に笹山狐の傳說が載つてゐる。

寬政の頃、江差の法華寺に一人の美貌の小僧が居た。彼は或る娘に戀想されたが、佛家の身とて、その戒を犯すを怖れて函館の實行寺に身を隱した。然るに間もなくその小僧に狐がつき「俺は笹山の直議といふ狐だぞ、然るに人間共は俺の議の字を議と誤るのが不都合だから片つぱしから議してやる」など、云つて氣狂じみた事をやる。經義を論じさせても、文字を書かせても、人間技ではないやうに優れてゐる。然し時々狐の鳴き眞似や油揚を喰ひたがる。これには住職も閉口した。

これこそほんとうに彼の小僧が人を議したのであつた。一時は娘を避けたものの、遠く離れて見れば、その娘が非常に慕はしくなり、歸心矢の如く思ひ惱んだ擧句、歸る一策を案じて狐つきの眞似をしたのであつた。

二五、順正寺の怪異

江差九艘川町の海に面した所、黑い山門に高い石段といふ構へで大伽藍がある。これが門昌庵に因んだ怪談のある今眞宗大谷派東本願寺別院と呼ばれる順正寺である。

松前十代矩廣の享保の頃、福山法幢寺の柏巖峯樹といふ和尙が、殿の御愛妾と通じたといふ奸臣達の讒言により、遂に熊石に配流されて一年ばかり、門昌庵といふ寺に住んでゐた。今熊石の港に面して朱塗の門のあるのがそれである。その

第三十六圖版　順正寺

中姫廣の江戸滯在の留守中、愛妾が逃げたのは門昌のおびき出す所と更に新臣どもが報告したので、姫廣は討手を熊石に遣はして門昌を討ち、その首を福山城下にさらさうとして持ち歸る途中、此の順正寺に泊つた。その夜首桶を本堂に据ゑて置くと、蓋を刎ねのけて首が現はれ、憤怒の形想物凄く、其の口からは紅蓮の焔を吐いてあつと驚く間もなく、怪火は四方に飛び散り遂に無慘にも此の寺をば灰燼に歸してしまつた。

二六、鷗島の傳說

松前江差の鷗の島は
　地から生えたか浮島か

江差追分で名を得たる鷗島、これこそ江差町の生命である。この島によつて江差は天然の良港となり明媚なる風光をなしてゐると云つてもよい。昔は舟をかりなければこの島に渡れなかつたが、築港竣成後の今日では小波寄せるケーソンを傳ひ、四五町行けばやがてその島に着く。

昔江差のどこの寺にも釣鐘の無かつた頃、始めて禪宗正覺院に大阪から釣鐘を辨天船に載せて持つて來た。そして愈々この鷗島から港に着かうといふ段になつて、どうしても船が動かなくなつてしまつた。

是れ必ず釣鐘の精のさせる業ならんと思ひ、止むなく、釣鐘を海中に投げてしまつた。すると船は忽ち動き、そのまま入港することが出來た。その頃この鷗島に一匹の蛸の主が居た。この蛸の主が釣鐘を欲しくなり、例の足をもつて船を止めてしまつたのである。今も蛸が其の釣鐘を頭に頂いて鷗島を七卷半も捲くことがあり、その時は釣鐘の龍頭さへも見えると噂されて居る。

また九郎判官義經が此の地の酋長シタカベの許を舟に乘じて立去る時、久しく乘り馴んだ白馬と名殘を惜しみつゝ、その愛馬を鷗島の陰に繫いで行つた。馬は雨の日も雪の降る夕も我が主義經の歸るのを待つて居たが、遂に其の儘白い化石となつた。岩となつても生あるものゝ如く、首をあげ義經を待つて嘶いて居るかの樣に見えるので、人々はこれを馬岩と呼んでゐる、遠くから見ると頭部もごくうすく、岩壁に附いた樣に見えるが、舟に乘り近づいて見ると、全く離れた馬狀をなし水面に生じてゐる。夏などは鷗島の岸を石傳ひに行つてみることも出來る。

この馬岩の裏側の、荒海に面した方に恰度草鞋で踏んだ樣な跡がある。是は辨慶の足跡と稱せられてゐる。その偉大な足跡の中には小蟹が泳いで居たり、海藻などが生えてゐる。

その背後の島の上り口の少し右手の方に、鐘乳洞の樣な洞窟があるが、これが赤辨慶が義經から預つた六韜三略の卷物を隱した所だといふので名高い。

第三十七圖版　鷗　島

二七、やらずの明神

鷗島には多岐津姫命、市杵島姫命、田心姫命を祀る嚴島神社がある。今も多くさう呼ばれて居る。昔は辨天樣と呼ばれ、明治元年嚴島神社と改稱した。其の創立は恐らく享保年中であらうと云はれて居る。此の神は、昔は「やらずの明神」とも呼ばれた。それは此の神は非常に錢を惜しんだからである。それで蝦夷地へ出稼に來てどんなに金を蓄へても、必ずこの明神の地に於て遣ひ果してしまはなければ

中矩廣の江戸滯在の留守中、愛妾が逃げたのは門昌のおびき出す所と更に奸臣どもが報告したので、矩廣は討手を鮎石に遣はして門昌を討ち、その首を福山城下にさらさうとして持ち歸る途中、此の順正寺に泊つた。その夜首桶を本堂に据ゑて置くと、蓋を刎ねのけて首が現はれ、憤懣の形想物凄く、其の口からは紅蓮の焰を吐いてあつと驚く間もなく、怪火は四方に飛び散り遂に無慘にも此の寺をば灰燼に歸してしまつた。

二六、鷗島の傳說

松前江差の鷗の島は
　　地から生えたか浮島か

江差追分で名を得たる鷗島、これこそ江差町の生命である。この島によつて江差は天然の良港となり明媚なる風光をなしてゐると云つてもよい。昔は舟をかりなければこの島に渡れなかつたが、築港竣成後の今日では小波寄せるケーソンを傳ひ、四五町行けばやがてその島に着く。

昔江差のどこの寺にも釣鐘の無かつた頃、始めて禪宗正覺院に大阪から釣鐘を辨天船に載せて持つて來た。そして愈々この鷗島から港に着かうといふ段になつて、どうしても船が動かなくなつてしまつた。

是れ必ず釣鐘の精のさせる業ならんと思ひ、止むなく、釣鐘を海中に投げてしまつた。すると船は忽ち動き、そのまゝ入港することが出來た。その頃この鷗島に一匹の蛸の主が居た。この蛸の主が釣鐘を欲しくなり、例の足をもつて船を止めてしまつたのである。今も蛸が其の釣鐘を頭に頂いて鷗島を七卷半も捲くことがあり、その時は釣鐘の龍頭さへも見えると噂されて居る。

また九郎判官義經が此の地の酋長シタカベの許を舟に乘じて立去る時、久しく乘り親んだ白馬と名殘を惜しみつゝ、その愛馬を鷗島の陰に繫いで行つた。馬は雨の日も雪の降る夕も我が主義經の歸るのを待つて居たが、遂に其の儘白い化石となつた。岩となつても生あるものゝ如く、首をあげ義經を待つて嘶いて居るかの樣に見えるので、人々はこれを馬岩と呼んでゐる、遠くから見ると頭部もごくうすく、岩壁に附いた樣に見えるが、舟に乘り近づいて見ると、全く離れた馬狀をなし水面に生じてゐる。夏などは鷗島の岸を石傳ひに行つてみることも出來る。

この馬岩の裏側の、荒海に面した方に恰度草鞋で踏んだ樣な跡がある。是は辨慶の足跡と稱せられてゐる。その偉大な足跡の中には小蟹が泳いで居たり、海藻などが生えてゐる。

その背後の島の上り口の少し右手の方に、鐘乳洞の樣な洞窟があるが、これが弁慶が義經から預つた六韜三略の卷物を隱した所だといふので名高い。

第三十七圖版　鷗島

二七、やらずの明神

鷗島には多岐津姬命、市杵島姬命、田心姬命を祀る嚴島神社がある。今も多くさう呼ばれて居る。昔は辨天樣と呼ばれ、明治元年嚴島神社と改稱した。其の創立は恐らく享保年中であらうと云はれて居る。此の神は、昔は「やらずの明神」とも呼ばれた。それは此の神は非常に錢を惜しんだからである。それで蝦夷地へ出稼に來てどんなに金を蓄へても、必ずこの明神の地に於て遣ひ果してしまはなければ

ば故郷へ歸ることを許されなかつた。そしてもしも此の神の命に逆ふものがあると、歸途には祟りがあつたと云ひ傳へられる。

二八、八方にらみの龍

第三十八圖版　八方にらみの龍

江差の法華寺の本堂は今を去る四百十一年享保元年の建築で、本道に於ける最古の建築物である。

江差に來て見逃してはならないのは、此の寺の寶物となつて居る八方睨みの龍である。此の繪は彼の有名な京都の畫師、池ノ大雅の作と云はれ、本堂の三間四方の天井張に一杯に畫かれたものである。墨繪で龍と金泥をあしらひ、畫の中央に龍の頭があり、何れの側から望んでも、自分の方を睨んで居り鬼氣身に迫るやうに感ずる所から、花向の龍の別名八方睨みの龍と呼ばれてゐる。

その由來をたづねて見るに、今より約百五十年前、江差に住した淺文仲が大雅と親交があつたので、書いて貰つて持ち歸つたのだともいふが、松前五百年史によれば寛政中大雅堂は當時の藩主の弟で繪をよくし、豫て親交のあつた松前廣長に招かれたので、かの有名な玉瀾夫人を伴ひ松前に遊んだ。其の中江差法華寺本堂の天井に寄進するため龍の畫を依囑された。奇人であつたが畫道に熱心な大雅は、福山より便船に乘つて江差に來り、實地に本堂を檢分し、さて色々想を錬つた。或日彼の妻玉瀾が裏の林に行つて見ると大蛇が蟠居してこちらを睨んで居るのを見出し、驚き走り歸つて夫に告げた。不圖何事か胸に浮んだ大雅は早速其の場に行き、暫く大蛇の樣子を凝視して居たが、やがて家に歸るや否や一氣に彼の大作を畫き上げたのである。

二九、雄瀧雌瀧

武田信廣が本道へ渡る途中、天險要害の地を探るべく奥尻島の一端を思ひ立つた。この部落の酋長は魔比羅伽で信廣の便宜をよくはかつて呉れた。その娘の木季尼姫はこの種族には珍らしい美少女であつた。此の娘と信廣の小姓、栗原内記といふ若者が、何時か人目をしのぶ仲となつたのであつた。

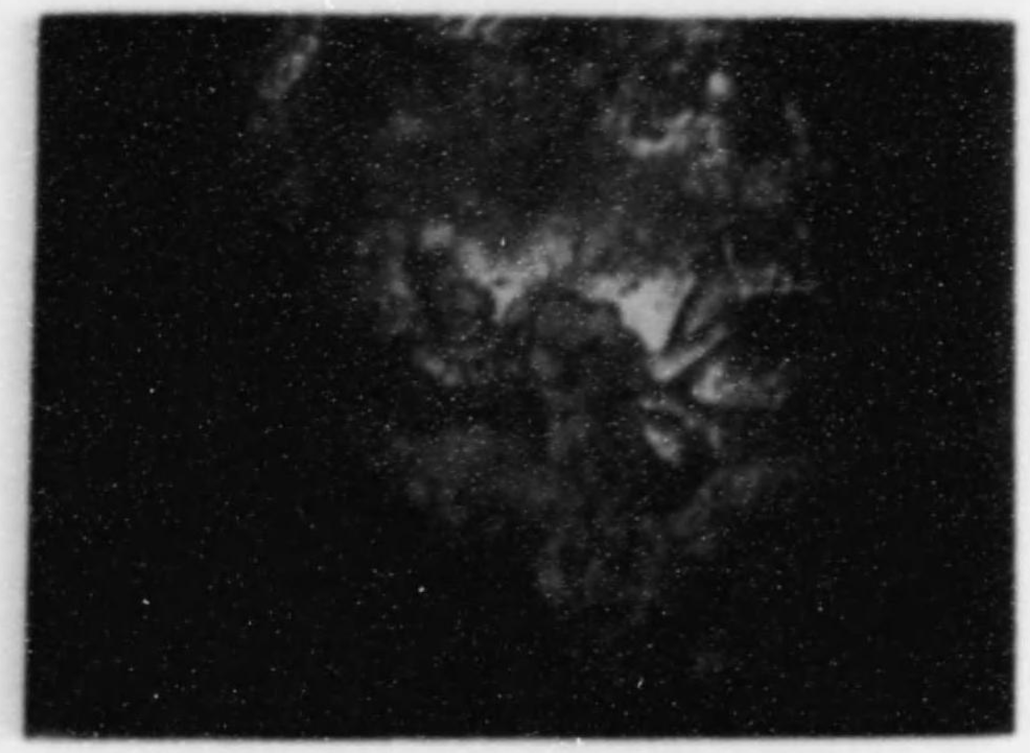
此のことを耳にした信廣は烈火の如く憤つた。内記はさすがに自ら顧みて慚ぢ入り、千歳の恨みを抱いて、斷崖より飛沫花と散る瀧壺に身を躍らして冷い骸となつてしまつた。木季尼姫もこれを傳へ聞き、身も世もあらず歎き悲しみ、少女心の一すぢに世を果敢なみ、同じやうに春未だ淺き瀧壺の泡沫と消えてしまつた。此の地の人達は、その二人を憐んで弔ふためにそれ〲雄瀧、雌瀧と呼ぶやうになつたのである。

（畑山定治編「江差名勝と傳說」に據る）

第三十九圖版　（右）雄　瀧　（左）雌　瀧

ば故郷へ歸ることを許されなかつた。そしてもしも此の神の命に違ふものがあると、歸途には祟りがあつたと云ひ傳へられる。

二八、八方にらみの龍



第三十八圖版　八方にらみの龍

江差の法華寺の本堂は今を去る四百十一年享保元年の建築で、本道に於ける最古の建築物である。

江差に來て見逃してはならないのは、此の寺の寶物となつて居る八方睨みの龍である。此の繪は彼の有名な京都の畫師、池ノ大雅の作と云はれ、本堂の三間四方の天井張に一杯に畫かれたものである。墨繪で龍と金泥をあしらひ、畫の中央に龍の頭があり、何れの側から望んでも、自分の方を睨んで居り鬼氣身に迫るやうに感ずる所から、花向の龍の別名八方睨みの龍と呼ばれてゐる。

その由來をたづねて見るに、今より約百五十年前、江差に住した港文仲が大雅と親交があつたので、書いて貰つて持ち歸つたのだともいふが、松前五百年史によれば寛政中大雅堂は當時の藩主の弟で繪をよくし、豫て親交のあつた松前廣長に招かれたので、かの有名な玉瀾夫人を伴ひ松前に遊んだ。其の中江差法華寺本堂の天井に寄進するため龍の畫を依囑された。奇人であつたが畫道に熱心な大雅は、福山より便船に乘つて江差に來り、實地に本堂を檢分し、さて色々想を練つた。或日彼の妻玉瀾が裏の林に行つて見ると大蛇が蟠居してこちらを睨んで居るのを見出し、驚き走り歸つて夫に告げた。不圖何事か胸に浮んだ大雅は早速其の場に行き、暫く大蛇の樣子を凝視して居たが、やがて家に歸るや否や一氣に彼の大作を畫き上げたのである。

二九、雄瀧雌瀧

武田信廣が本道へ渡る途中、天險要害の地を探るべく奥尻島の一端を思ひ立つた。この部落の酋長は魔比羅伽で信廣の便宜をよくはかつて吳れた。その娘の木季尾姫はこの種族には珍らしい美少女であつた。此の娘と信廣の小姓、栗原內記といふ若者が、何時か人目をしのぶ仲となつたのであつた。

此のことを耳にした信廣は烈火の如く憤つた。內記はさすがに自ら顧みて愧ぢ入り、千歳の恨みを抱いて、斷崖より飛沫花と散る瀧壺に身を躍らして冷い骸となつてしまつた。木季尾姫もこれを傳へ聞き、身も世もあらず歎き悲しみ、少女心の一すぢに世を果敢なみ、同じやうに春まだ淺き瀧壺の泡沫と消えてしまつた。此の地の人達は、その二人を憐んで弔ふためにそれ〴〵雄瀧、雌瀧と呼ぶやうになつたのである。

（畑山定治編「江差名勝と傳說」に據る）

第三十九圖版　（右）雄　瀧　（左）雌　瀧

後志支廳

倶知安町（虻田郡倶知安町役場調）

一、マツカリヌプリの語源

倶知安町の南方に位するマツカリヌプリの別名後方羊蹄山は、羊蹄の麓があるので、此の名があると傳へられ、なほこの邊りには昔山羊が棲息してゐたといふ傳說がある。

余別村（積丹郡余別村役場調）

二、神威神社の緣起

當社の創立は今を去ること七百年前と云はれる。文治年間源廷尉義經が、奧州平泉の泰衡の邸を逃れ、思出多い東稻山に名殘りを惜しみ、北上の旅に哀愁と無念の淚を呑みつゝ、南部地方より津輕を經て、三厩の地から本道に渡り、今の爾志郡乙部に居住した和人桧林勘五右衛

第四十圖版　後方羊蹄山

門宅に逗留した。後、日高平取の酋長宅に暫く留まつたが、胸中の壯圖抑へ難く、秘かに岩内雷電の麓に屯營して糧舟を整へた。積丹半島の神威岬に差掛るや、俄然颶風は變じて大荒れとなり、舟は一歩も進まず舟人一同引返すべきことを献言したが、公は靈感ありと稱して聽入れなかつた。そして、岬角近き海中に恰も人の衣冠して立てるに似た立岩を見出して、舟を近づけ色々な幣帛を供へて、大海積神と風の神とを此の立岩に奉齋して、只管海上の安全と成功とを祈願し、無事北航する事が出來たといふ。

卽ち義經公が神威岩に祈誓を込めて以來、積丹在住の夷民は「カムヰ」と稱して、厚く之を信仰し、神社創建は爰にその基を開いたと云はれる。

これよりさき、公が平取の酋長宅に留まつて居た時、酋長の娘は公を慕つて居たが、公が秘かに北進せるを知つて跡を追ひ、神威岬迄來たが、既に義經主從は滿帆を張つて出帆してしまつてゐた。如何に呼んでも及ばず、悲しみ哭いても徒らに風は吹き荒び、激浪の凄い答があるばかりなので、彼女は遂に狂つて神威岩より海中に飛入り化石となつたと言傳へられ、現在「メノコ岩」の稱ある岩がある。

「和人の船、婦女を乘せて此處を過ぐれば則ち覆沒せむ！」これぞ遂に投身した彼女の最後に遺した呪詛の言葉なりといはれ、爾來御神威樣は女人禁制となつたものである。（事實は松前藩の政策なりとの說もあるが今は略す）是より此處を通過する際愛奴はイナホ（木を削つて作つた一種の幣）を捧げ、樂一遇烏由而詩客詩と口誦み、又和人も小舟を作り、米酒、藁人形を供じて衆人一樣に沈默の上體容を崩さず、心中一意無難を祈願し、戰々兢々としてこの岬を通過するのを常とした。男子すら斯の如くであつたから、和人の婦女は一切此の處を通行しなかつた。從つて漁民達も婦女を

後志支廳

倶知安町（虻田郡倶知安町役場調）

一、マツカリヌプリの語原

倶知安町の南方に位するマツカリヌプリの別名後方羊蹄山は、羊蹄の稱があるので、此の名があると傳へられ、なほこの邊りには昔山羊が棲息してゐたといふ傳説がある。

余別村（積丹郡余別村役場調）

二、神威神社の緣起

當社の創立は今を去ること七百年前と云はれる。文治年間源廷尉義經が、奧州平泉の泰衡の邸を遁れ、思出多い東稻山に名殘りを惜しみ、北上の旅に哀愁と無念の涙を呑みつゝ、南部地方より津輕を經て、三厩の地から本道に渡り、今の爾志郡乙部に居住した和人秋林勘五右衛

第四十圖版　後方羊蹄山

門宅に逗留した。後、日高平取の酋長宅に暫く留まつたが、胸中の壯圖抑へ難く、秘かに岩内雷電の邊に屯營して糧舟を整へた。積丹半島の神威岬に差掛るや、俄然颶風は變じて大荒れとなり、舟は一歩も進まず舟人一同引返すべきことを諫言したが、公は靈感ありと稱して聽入れなかつた。そして、岬角近き海中に恰も人の衣冠して立てるに似た立岩を見出して、舟を近づけ色々な神酒を供へて、大海積神と風の神とを此の立岩に奉祭して、只管海上の安全と成功とを祈願し、無事北航する事が出來たといふ。

卽ち義經公が神威岩に祈誓を込めて以來、積丹在住の夷民は「カムヰ」と稱して、厚く之を信仰し、神社創建は爰にその基を開いたと云はれる。

これよりさき、公が平取の酋長宅に留まつて居た時、酋長の娘は公を慕つて居たが、公が秘かに北進せるを知つて跡を追ひ、神威岬迄來たが、既に義經主從は滿帆を張つて出帆してしまつてゐた。如何に呼んでも及ばず、悲しみ哭いても徒らに風は吹き荒び、濤浪の凄い答があるばかりなので、彼女は遂に狂つて神威岩より海中に飛入り化石となつたと言傳へられ、現在「メノコ岩」の稱ある岩がある。

「和人の船、婦女を乘せて此處を過ぐれば則ち覆沒せむ！」これぞ遂に投身した彼女の最後に遺した呪詛の言葉なりといはれ、爾來御神威樣は女人禁制となつたものである。（事實は松前藩の政策なりとの說もあるが今は略す）是より此處を通過する際愛奴はイナホ（木を削つて作つた一種の幣）を捧げ、榮一媽呂由尙咨咨許と口誦み、又和人も小舟を作り、米酒、藁人形を投じて衆人一樣に沈默の上體容を崩さず、心中一意無事を祈願し、戰々兢々としてこの岬を通過するのを常とした。男子すら斯の如くであつたから、和人の婦女は一切此の處を通行しなかつた。從つて漁民達も婦女を

伴ふことが出來なかつた關係より、

蝦夷地海路にお神威なくば通れて行きたい場所までも。

忍路高島及びもないがせめて歌棄磯谷まで。

等の俚謠が生れたのであると云はれる。

後年松前藩の地頭藤倉近兵衞が、今の余別村大字神岬村に神威の神を奉祀すべき神殿を創建し、夷民の尊崇を其のまゝ傳へ、志屋古丹於賀武意（シャコタンオカムイ）明神と稱した。これが積丹郡の名の起原と傳へられる。尚「シヤコタン」とは夏場所の意で鰊、海鼠其他の魚や貝類が非常に多く棲息して居る漁場といふ意味の夷語であるさうだ。

寛文三年出稼の漁民達が神殿を再建し、文化二年松前の神主白鳥遠江守が祭主として奉祭した。同四年松前氏の采邑後志十八領が、箱館奉行の直轄となるや、果然第二期幕政に際して堀織部正、村垣淡路守は松前氏從來の政策を一變し、大いに拓殖を奬勵して社寺の創建、婦女の移住解禁、道路宿驛漁業商舖の奬勵等々大いに施設を行つた。同十二年には幕吏松浦武四郎が神威神社に拓殖の方針を奏上し、神威岬の女人禁制の解除を絶叫した。然し衆人は尚オカムヰの靈驗を畏み、婦女の通航は依然として なかつたが、安政三年箱館奉行の 屬吏梨本彌五郎が下僚と共に其の妻女を携へ「宗谷詰め」として赴任の途中、船子の恐るゝをも聽かず神威岬に差掛るや、世の迷夢を醒ます爲に銃を放つた。海波を破り岬角に響きわたつた此の一發の銃聲は、永年の迷妄を破るに最も効果的であつた。これより次第に婦女の奥地に入り込む者が多く、遂に今日在るを致したのである。

後慶應二年丙寅の歳に、社殿を今の余別村大字來岸村に移して神威明神と稱し、積丹郡中の守護神として一般の崇敬をあつめ、明治三年には本殿と拜殿とを改築し、明治八年來郷社と社格を定められて、今に航海者及び近郷の者の崇敬の的となつて居る。

美國町（美國郡美國町役場調）

三、女郎子岩

昔、「女が通れば海が荒れて魚が獲れない」と云ふので、神威岬は女人の通行が嚴禁されて居た。嚴しい掟、光る監視の目、たとへそれが幼い小供でも、女と名のついた者は一歩も近づくことが出來なかつた。そして年中魚がどん／＼獲れて、半島全體には毎日平和な日が續いて居た。

或日「オーイみんな沖を見ろ、船脚が亂れてゐるぞ、禁を破つて女を乘せて居るんだ」角長の聲が靜かな空氣を破つて響きわたつた。なる程沖を見ると一艘の大和船が帆を一杯にはつて神威岬を乘切らうとしてゐる。「いまに見ろ嵐が來るぞ」と叫ぶ人々の聲に誘はれるやうに水平線の彼方からムク／＼と眞黒な雲が湧いて來た。間もなく地軸が折れたやうな物凄い音と共に浪は天に冲し、人々はその恐しさにたゞ顏色も青ざめて土にひれ伏した。大和船は勿論またゝく間に海原の底深く呑まれてしまつた。

恐しい一夜は明け、翌日は素晴らしい上天氣となつた。浪打際に異樣な姿をした男が打あげられて居るのを發見した村人は大騷ぎをした。女は海に沈んだのかあがらなかつた。「これが日本人と云ふのだらう」と誰も近づくものはなか

つた。

この村の酋長に一人の娘があつた。人々の騒ぎをききつけて馳せつけた娘は「まあ可哀想に――」とこの男を自分の家へかつぎ込んで手當をした。幸ひ日本人はやがて息をふきかへした。

この村こそ美國の西北端に位し、伴島随一の漁場と云はれて居る幌武意である。若い日本人と酋長の娘とは、間もなく相愛の仲になつた。だが日本人の顔は晴ればれしなかつた。

「また何か考へて居るの」

第四十一圖版　女郎子岩

可愛いゝ眼をくるくるさせて娘は話しかけた。

「女の人と一緒に船に乗つて居たんでせう。何處へ行くつもりだつたの？」

しかし日本人は答へない。月日は夢のやうに流れた。多近いある日、メノコとシヤモは沖合四町あまりの岩へ遊びに行つた。二人共我を忘れて遊んで居るうち、どうしたのかシヤモの着物が綻びた。

「すみませんが針を持つて來てくれませんか」

愛する者のためにいそいそと出かける娘を見送る日本人の顔は、ある決心にふるへて居た。

メノコの姿が遠ざかると日本人は海上目がけて躍り込んだ。そしてそれ限り浮びあがらなかつた。おそらくは大和船に一緒に乗つて居た女のあとを追うたのであらう。半時あまりして其の場所へ歸つて來たメノコは、日本人を求めて狂氣のやうに泣いた。いつまでもいつまでも岩の上に立つて沖を見詰めて泣き續けた。そして可哀想に石になつて了つたのである。

今に殘る幌武意沖の「女郎子岩」が、そのメノコの姿だと人々は語り傳へて居る。この岩が出現してから、メノコに同情してか、魚類が今までより一層澤山こゝへ集まつて來るやうになり、四季を通じて色々な魚が豐富に獲れるとのことである。（後田入舸村、飯樋とレラう氏參照）

高島町　（高島郡高島町役場調）

四、高島のお化け

弘化丙午の歳シホヤの海上に蜃氣樓が現れた。船頭が言ふには、「今日は高島のおばけが出るぞ、あれを見られよ」と彼方の岬を指した。纔に一點の島と見えた岬が忽ち大きくなり、やがて青黄赤白の色を顯はして美しい光を放ち、此方より帆をかけて進む巌帆は急に金銀綾羅の帳と變じ、彼方の苫家と思つた漁舍は宮殿樓閣となり、珊瑚瑠璃の甍を葺いたやうに見えたが、あれよあれよと指して眺めて居る間に、一陣の西風のために吹消された。かの船頭の言ふには、今晩若しくは明日きつと雨が降るだらうと云つた。そこで其の理由を聞くと、「此のおばけの出る時は必ず雨がある」と云つたが、果してその言葉通り、翌朝より微雨を催したとのことである。（大日本地名辭書續編に據る）

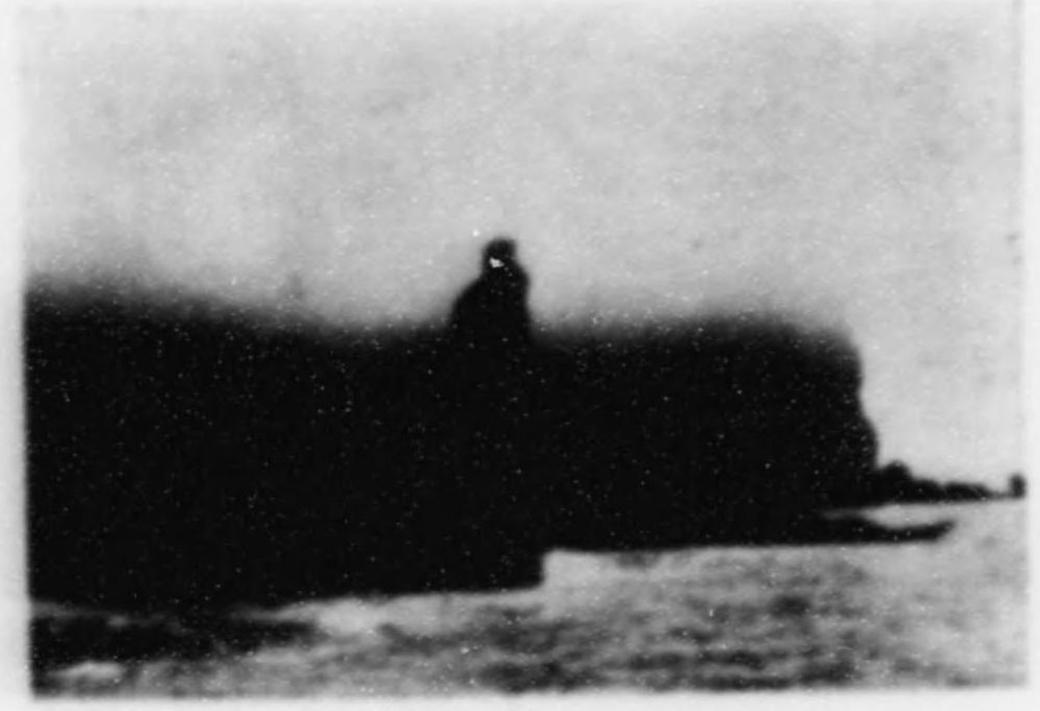
五、メノコ、フミキの傳説

つた。

この村の酋長に一人の娘があつた。人々の騒ぎをききつけて馳せつけた娘は「まあ可哀想に――」とこの男を自分の家へかつぎ込んで手當をした。幸ひ日本人はやがて息をふきかへした。

この村こそ美國の西北端に位し、半島隨一の漁場と云はれて居る積丹である。若い日本人と酋長の娘とは、間もなく相愛の仲になつた。だが日本人の顔は晴れ晴れしなかつた。

「また何か考へて居るの」



第四十一圖　女郎子岩

可愛いゝ瞳をくる〳〵させて娘は話しかけた。

「女の人と一緒に船に乘つて居たんでせう。何處へ行くつもりだつたの？」

しかし日本人は答へない。月日は夢のやうに流れた。多匠いある日、メノコとシヤモは沖合四町あまりの岩へ遊びに行つた。二人共我を忘れて遊んで居るうち、どうしたのかシヤモの着物が綻びた。

「すみませんが針を持つて來てくれませんか」

愛する者のためにいそ〳〵と出かける娘を見送る日本人の顔は、ある決心にふるへて居た。

メノコの姿が遠ざかると日本人は海上目がけて躍り込んだ。

そしてそれ限り浮びあがらなかつた。おそらくは大和船に一緒に乘つて居た女のあとを追うたのであらう。半刻あまりして其の場所へ歸つて來たメノコは、日本人を求めて狂氣のやうに泣いた。いつまでも〳〵岩の上に立つて沖を見詰めて泣き續けた。そして可哀想に石になつて了つたのである。

今に殘る積丹岬の「女郎子岩」が、そのメノコの姿だと人々は語り傳へて居る。この岩が出現してから、メノコに同情してか、魚類が今までより一層澤山こゝへ集まつて來るやうになり、四季を通して色々な魚が豐富に獲れるとのことである。（後志入舸村、高田とレクラ原參照）

高島町（高島郡高島町役場調）

四、高島のお怪

弘化丙午の歳シホヤの海上に蜃氣樓が現れた。船頭が言ふには、「今日は高島のおばけが出るぞ、あれを見られよ」と彼方の岬を指した。纔に一點の島と見えた岬が忽ち大きくなり、やがて青黃赤白の色を顯はして美しい光を放ち、此方より帆をかけて進む蓬帆は急に金繡綾羅の帳と變じ、彼方の苫家と思つた漁舍は宮殿樓閣となり、珊瑚瑠璃の發を弄いたやうに見えたが、あれよあれよと指して眺めて居る間に、一陣の西風のために吹消された。かの船頭の言ふには、今晩若しくは明日きつと雨が降るだらうと云つた。そこで其の理由を聞くと、「此のおばけの出る時は必ず雨がある」と云つたが、果してその言葉通り、翌朝より微雨を催したとのことである。（大日本地名辭書續編に據る）

五、メノコ、フミキの傳說

砂のやうな雪の降る灰色の黄昏だつた。ピリカ、メノコのフミキは男の袖に縋つて泣いた。

「最後のお願ひでござります。この胸の血潮は空に燃える夕燒け雲の炎よりも熱く、酋長シタカベの娘フミキが命をかけての思ひ、シヤモのニシパにも情があらう。私の一期の願ひです。ヨシツネさま」

乙女の眞珠の瞳は涙にぬれて、うるほふ袖に粉雪がとけた。しかし男の脣は堅く結ばれて、冷かで清澄の眼は雪にくもつた石狩の對岸を凝視してゐる。

「これほど頼んでも――」女はひしと泣きすがつた。だが男はたゞひと言、

「さらばぢや、フミキ、空が惡い」男は從者をつれて石狩へ。――

フミキはたゞ一人、切りたつた千仭の斷崖にうつ伏して泣いた。嗚咽にゆるぐか細く圓い小さな肩に、折から雪は一入降りしきつて霏々とちつた。――黑い〳〵海に、白い牙の怒濤が斷崖の根を物すごくかんだ。やがて一と時。立ち上つたフミキの姿は一天に舞ふ鷲毛の雪と共に空に躍つた。黑髮がなびいたのも一瞬、絕壁の底へ、狂亂の波濤の渦へ、そして深い〳〵海原の眞下へ――可憐なフミキの姿は永劫に消えた。フミキを慕つて居たアイヌの若者が、彼女のあとを追つて赤岩の頂に來たとき、そこにはいとしい女の代りに彼女が履いてゐた小さな草履が雪をかぶつて殘されてゐた。若者はその草履を手に天を仰いで泣いた。やがて悲しい聲で彼は唄つた。

あしたくるか

やなさてくるか

シヤマニ　シヤマニ

その年も暮れて春が來た。赤岩の雪がとけて山櫻の蕾がふくらんだ頃。フミキが身を投げた斷崖の下に、その年はじめて見知らぬ花が一輪さいた。

×　　×　　×

「これがその花なんです。祝津の村人は古くからフミキ草と呼んでゐます。若者の悲しい唄は、今でも孫を眠かす婆さんが子守唄に唄つてゐます」その花は赤く小さく可憐に咲いてフミキの脣のやうに眞赤に――床しい香りに悲しいフミキの昔物語を思ひ出させるかの如くである。

六、玄武丸の遭難

赤い岩肌が日に輝つて屹立數百尺、峨々としてそびゆる岩の針、天にそゝり立ち雲をもつらぬくその姿は、俯せば忽ち北海深淵の龍を呼び、仰げば卽ち雲中の雷を降さんばかりである。土人之を畏んで「赤岩はこれ白龍殿」と傳へいうた。

祝津の漁りの濱の宴も、翁も媼も語り傳へられた白龍の畏れに、日夜赤岩樣におのゝいた。德川幕府が瓦解し、世は文明開化の明治九年六月十日の事であつた。オカムイの岬を越えて石狩の灣に黑煙悠々その英姿を現したのは、當時北洋航海に名を轟かした政府御用船玄武丸であつた。

船には時の開拓使長官黑田淸隆が乘つてゐた。

「神威より忍路、赤岩祝津は女人禁制の海ときく、白龍巢して棲みて人間を害ふや、これひとへに愚昧の迷信のみ、何

ぞあらん文明の利器たる大砲を放つて赤岩をこぼて」と命令一下、御用船玄武丸の砲門は開かれた。今はたゞ最後の命を待つのみ、龍神果して赤岩に棲めるや否や。

ところは名にし負ふ黒汐渦巻く北海神威岬の沖合五海里、潮のうねりは幾重の山のたゝなはりか、その果知らず、たゞ眼路もはるか波路も遠き北洋大海の眞只中。

「撃てツ――」艦長の叱咤一聲、大船玄武の舷が波間に揺ぐと見る間に、轟然一發、たちまち濛々たる砲煙は四方を蔽つた。

× × ×

あはれ、たゞ一發の下に人々を畏れしめた白龍大神は、かの赤岩の天上か或は白濤牙をかむ岩根の下の海底に姿を没したか。

第四十二圖　赤岩中腹の白龍門よりポシ赤岩海岸を望む

船上の黒田長官はじめ乘組の人々は、凝視の瞳を赤岩にそゝいで居た。一陣の疾風吹き來つて視界は明朗かつ清澄、しかし赤岩の岩には一點の龜裂もなかつた。それはそのまゝ太古の造物主が手すさびの姿である。恰度その時、祝津村の茅漁師の家では、今年二十歳の美しい娘がやがて間近い喜びの婚禮に着飾る晴着の針の運びに餘念がなかつた。遠雷の轟く如き遥かなる響音にいぶかしの耳を傾けた瞬間、屋上に雷獣が走るか、裂々さく〳〵の響、天井を貫き梁を裂いて落下した砲彈は、無慘や娘の胸を打ち碎いて地中に没した。

玄武丸の發彈は艦長の巧みな標的瞄準にもかゝはらず、赤岩を越え日和山の峠の上を飛んで祝津の濱に落ちたのであつた。

× × ×

七、赤岩洞窟の行者

その夜は物すごい暴風雨、礫のやうな雨が車軸も流さん許りに大地をうち、ほえ狂ふ大風は怒濤と戰ひ樹々を倒し岩をうち、屏風の如き赤岩の岩々は轟々として右に左にゆれ動き、波濤は闇黒の中に白いしぶきを飛ばして巨巖を呑み、さながらこの世の最後を思はせるやうな夜であつた。

× × ×

祝津村青山漁場第一の力男萬助は、足ごしらへも厳重に、腰にマキリを打ちこんでこの大風雨の闇の中を何を思つてか、唯一人嶮しい赤岩の頂上目かけて樹々の枝を手蔓に岩根を匐ひ登つて行つた。雨も風も更に荒れ狂つた物凄い山鳴りに、岩根はとゞろと揺れて萬助のからだは毬の如く宙に躍り、幾度か巨巖の下にたゝかれた。しかし力自慢の彼は少しも怯ます、一途に頂上の洞窟目指して岩をよぢた。

× × ×

大龍のあぎとにも似た岩の大門をくゞり、九十九に折れた岩穴、龍の胎内も兩手の爪を岩にたてて、一寸進みに匐つて通つた。

ぞあらん文明の利器たる大砲を放つて赤岩をこぼて」と命令一下、御用船玄武丸の砲門は開かれた。今はたゞ最後の命を待つのみ、龍神果して赤岩に棲めるや否や。

ところは名にし負ふ黑汐渦卷く北海神威忍路の沖合五海里、潮のうねりは幾重の山のたゝなはりか、その果知らず、たゞ眼路もはるか波路も遠き北洋大海の眞只中。

「撃てッ――」砲長の叱咤一聲、大船玄武の舷が波間に搖ぐと見る間に、轟然一發、たちまち濛々たる砲煙は四方を奪つた。

× × ×

あはれ、たゞ一發の下に人々を畏れしめた白龍大神は、かの赤岩の天上か或は白諸牙をかむ岩根の下の海底に姿を沒したか。

第四十二圖　赤岩中腹の白龍門
よりボン赤岩海岸を望む

船上の黑田長官はじめ乘組の人々は、凝視の瞳を赤岩にそゝいで居た。一陣の夜風吹き來つて視界は明朗かつ清澄、しかし赤岩の岩には一點の龍姿もなかつた。それはそのまゝ太古の造物主が手すさびの姿である。恰度その時、祝津村の某漁師の家では、今年二十歳の美しい娘がやがて間近い喜びの婚禮に着飾る晴着の針の運びに餘念がなかつた。遠雷の轟く如き遙かなる砲聲にいぶかしの耳を傾けた瞬間、屋上に雷獸が走るか、裂々

さく／＼の響、天井を貫き梁を裂いて落下した砲彈は、無慘や娘の胸を打ち碎いて地中に沒した。

× × ×

玄武丸の發彈は砲長の巧みな標的觀中にもかゝはらず、赤岩を越え日和山の峠の上を飛んで祝津の濱に落ちたのであつた。

七、赤岩洞窟の行者

その夜は物すごい暴風雨、礫のやうな雨が車軸も流さん許りに大地をうち、ほえ狂ふ大風は怒濤と戰ひ樹々を倒し岩をうち、屛風の如き赤岩の岩々は轟々として右に左にゆれ動き、波濤は闇黑の中に白いしぶきを飛ばして巨巖を呑み、さながらこの世の最後を思はせるやうな夜であつた。

× × ×

祝津村青山漁場第一の力男萬助は、足ごしらへも嚴重に、腰にマキリを打ちこんでこの大風雨の闇の中を何を思つてか、唯一人嶮しい赤岩の頂上目かけて樹々の枝を手蔓に岩根を這ひ登つて行つた。雨も風も更に荒れ狂つた物凄い山鳴りに、岩根はとゞろと搖れて萬助のからだは毬の如く宙に躍り、幾度か巨巖の下にたゝかれた。しかし力自慢の彼は少しも怯まず、一途に頂上の洞窟目指して岩をよぢた。

× × ×

大龍のあぎとにも似た岩の大門をくゞり、九十九に折れた岩穴、龍の胎内も兩手の爪を岩にたてて、一寸進みに這つて通つた。

遙か地獄谷の底では、鬼の群でも笑ふか、怪奇な叫びが風にまじつて聞えて來る。樹々の枝が岩塊の落下に折られ、風に吹き倒される音なのだ。さすがの萬助も全身が戰いた。かくて「龍の胎內」を生きた心地もなく匍出たとき、萬助の耳に響いたのは、澄み切つた、手振りの鈴の音であつた。ぬれ鼠の萬助の總身には雨よりも冷たい汗が走つた。

× × ×

鈴の音はたしかに頂上の洞窟から……、萬助は勇を鼓して立ち上つた。目指すはかの洞穴、それはすぐ頭の上ではないか——、一寸また一寸、彼は岩にしがみついてのぼつた。のぼりつめて洞窟へ頭が出たその瞬間だつた。暗々たる穴の奥から鈴の音は更に力強くなり響き、朗ながらはつきりと神にも似た淸く美しい白衣の行者の姿を見た。——もう一步、萬助は岩を踏む兩足に力をこめて洞窟へ入らうとした次の刹那、地軸も破れるばかり地鳴り震動物凄く、電光一閃洞窟は白晝の如く輝いたと見る間に、突如宙に現れた一頭の白龍が、炎の如く爛々と兩眼を燃やし、龍髯鞭の如く風を切つて、あはや萬助の身體をたゞ一と呑みにするかと見えた。

どこをどうして逃げ歸つたものか、その夜もはやあけ方に近い頃、萬助は殆んど息もかよはぬ體を青山漁場の軒下に橫たへてゐた。見れば身には一片の布もなく、裸體の全身は皮が破れ肉がさけ骨が碎けてさながら血達磨、番屋の漁夫達は驚いて萬助を家にかつぎ込み、いろ〳〵手當を加へるとはじめて息を吹き返した。彼は未だに恐怖の瞳をおののかせて赤岩岩窟の出來事を物語つた。

「——そしてあの白衣の行者はたしかに高尾了範ぢや、なんで小樽の北の廓に通ふどころか、この雨風の恐しい夜も、あゝして行を修めてござる。あゝ勿體なや了範さま、赤岩籠りと許つてその實は北廓通ひに浮身をやつす生臭坊主ぢやなどと、口汚なう罵つたに、ようもこの口が曲らなんだわ。それさへあるに、お籠りの實否を確めやうと、淨い尊い佛のほこらをこの萬助は穢したのぢや、あゝ白龍のたゝりが恐しいわ、許して下され、了範さま」

第四十三圖　赤岩山頂の不動岩

× × ×

眞言の若き僧高尾了範が、赤岩山頂に修驗を積んだのは明治二十一年のこと、その滿願三七二十一日の日に夢に大日如來の尊像を拜して、手づからノミ一梃で彫り刻んだ弘法大師の木像は、いま赤岩神社の奧殿に安置されてゐる。

了範は、その後小樽の富岡町に日光院を開いた。この事はよく人の知るところ、そして彼が籠つた洞窟は今は「緣結びの岩」と呼ばれて緣遠い男女の參詣が絕えない。

八、忍路高島七地藏

昔最も早く蝦夷地に渡つたのは近江商人と富山の藥賣りである。近江商人にはそのまゝ蝦夷地に止まつて、直接開拓事業に貢獻した者が多い。中にも建部七郎右衞門、田付秋助、田付新兵衞、岡田彌右衞門、西川傳右衞門等は有名であつた。西川傳右衞門は祝津村の鰊漁場請負漁があたつて產を興した。その謝恩を兼ねて神威の海に每年々々沈んで行つた難破船の人々の靈を弔ふために、百體の地藏建立を發願した。それは嘉永初年の事である。

遙か地獄谷の底では、鬼の群でも笑ふか、怪奇な叫びが風にまじつて聞えて來る。樹々の枝が岩塊の落下に折られ、風に吹き倒される音なのだ。さすがの萬助も全身が戰いた。かくて「龍の胎内」を生きた心地もなく這出たとき、萬助の耳に響いたのは、澄み切つた、手振りの鈴の音であつた。ぬれ鼠の萬助の總身には雨よりも冷たい汗が走つた。

× × ×

鈴の音はたしかに頂上の洞窟から……、萬助は勇を鼓して立ち上つた。目指すはかの洞穴、それはすぐ頭の上ではないか――、一寸また一寸、彼は岩にしがみついてのぼつた。のぼりつめて洞窟へ頭が出たその瞬間だつた。暗々たる穴の奥から鈴の音は更に力強くなり響き、闇ながらはつきりと神にも似た清く美しい白衣の行者の姿を見た。――もう一歩、萬助は岩を踏む兩足に力をこめて洞窟へ入らうとした次の刹那、地軸も破れるばかり地鳴り震動物凄く、電光一閃洞窟は白晝の如く輝いたと見る間に、突如宙に現れた一頭の白龍が、炎の如く爛々と兩眼を燃やし、旋風颷の如く風を切つて、あはや萬助の身體をたゞ一と呑みにするかと見えた。

どこをどうして逃げ歸つたものか、その夜もはやあけ方に近い頃、萬助は殆んど息もかよはぬ體を青山漁場の軒下に横たへてゐた。見れば身には一片の布もなく、裸體の全身は皮が破れ肉がさけ骨が碎けてさながら血達磨、番屋の漁夫達は驚いて萬助を家にかつぎ込み、いろ〳〵手當を加へるとはじめて息を吹き返した。彼は未だに恐怖の瞳をおののかせて赤岩岩窟の出來事を物語つた。

「――そしてあの白衣の行者はたしかに高尾了範ぢや、なんで小樽の北の廓に通ふどころか、この雨風の恐しい夜も、あゝして行を修めてござる。あゝ勿體なや了範さま、赤岩籠りと詐つてその實は北廓通ひに浮身をやつす生臭坊主ぢやなどと、口汚なら罵つたに、ようもこの口が曲らなんだわ。それさへあるに、お籠りの官舍を確めやうと、淨い尊い佛のほこらをこの萬助は穢したのぢや、あゝ白龍のたゝりが恐しいわ、許して下され、了範さま」

第四十三圖版　赤岩山頂の不動岩

× × ×

眞言の若き僧高尾了範が、赤岩山頂に錫輪を植んだのは明治二十一年のこと、その滿願三七二十一日の日に夢に大日如來の尊像を拜して、手づからノミ一梃で彫り刻んだ弘法大師の木像は、いま赤岩神社の奧殿に安置されてゐる。

了範は、その後小樽の富岡町に日光院を開いた。この事はよく人の知るところ、そして彼が籠つた洞窟は今は「緣結びの岩」と呼ばれて緣遠い男女の參詣が絕えない。

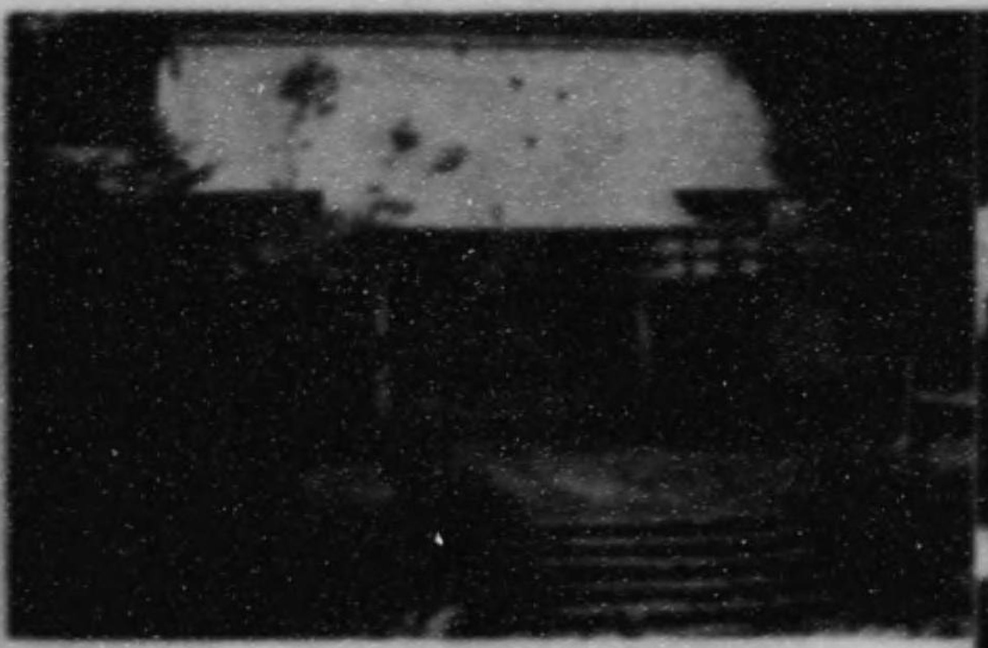
八、忍路高島七地藏

昔最も早く蝦夷地に渡つたのは近江商人と富山の藥賣りである。近江商人にはそのまゝ蝦夷地に止まつて、直接間接開拓事業に貢献した者が多い。中にも建部七郎右衞門、田村秋助、田付新兵衞、岡田彌右衞門、西川傳右衞門等は有名であつた。西川傳右衞門は祝津村の鰊漁場請負漁があたつて產を興した。その謝恩を兼ねて神威の海に毎年々々沈んで行つた難破船の人々の靈を弔ふために、百體の地藏建立を發願した。それは嘉永初年の事である。

年遡り人も變つた明治初年の頃、祝津に宣淵と云ふ名僧が庵を結んで教化に當つてゐた。月澄と號したが村人がつけた梅坊主の名の方が通りがいゝ程、彼は梅の繪を巧みに書いた。やがて宣淵は一寺をつくつて遷座したが、これが今殘る祝津龍泉寺であつて、寺内の地藏尊は西川傳右衛門の發願にかゝる百體地藏の一つであると傳へられる。

× × ×

近年になつて滋賀縣八幡町の西川吉之助と云ふ人が、ふと先祖の殘した古文書の中から蝦夷地に百體の地藏を建てた事を知り、昭和三年遙々祝津を訪れて漸くその七體を發見する事が出來た。卽ち今は忍路高島七地藏で名高い一番高島正林寺の延命地藏、二番祝津龍泉寺の地藏、三番小樽稻穗町無量寺の地藏、四番忍路山中の御腸惠地藏、五番忍路の桃内地藏、六番忍路大忠寺の地藏、七番津古丹地藏の七ッである。殊に御腸惠地藏は有名で、緣起由來の芝居までも仕組まれ、龍泉寺地藏と共に男女の緣組と女の乳乞ひなら、必ずきゝとゞけて下さると言ふあらたかな靈驗から、毎日千人近いお參りがある。



（左）第四十四圖版　龍泉寺
（右）第四十五圖版　同寺の地藏尊

九、赤岩の惠比須像

昭和四年の春の話である、北海道は全體に鰊が不漁であつて、祝津村も勿論その例には漏れなかつた。ところが、この村にたゞ一軒不思議にも豐漁をする刺網漁場があつた。昨夜も百石、けさも二百石と小さな漁場でありながら、建網漁場も及ばぬ景氣、村人はひとしくそれを羨んだ。そねみ羨みは人の心の常である。口と心とうらはらで「お目出度う」を言ひながら、直ぐその口で「何か仕掛けでもあるのか」と、つひ誰でもが羨ましい質問をした。すると彼はニタ〳〵と笑を浮べながら、「ありますともね、大ありサ、だが、こいつをいつちやあこつちが飯の食ひあげだよ」と、何か奥齒にはさまつた返事をしてゐた。

昔から漁師の心理は單純だ。曰く有りげな彼の言葉を眞に受けて、その手品の種を必ず明かしてやらうと村人は何れも心に堅く誓つた。中でも氣の合つた血氣の若者四五人は、互にそれと諜し合せて彼の家のまはりとその行動とを、夜となく晝となくひそかに監視してゐた。

或夜、例によつてこの若者たちが彼の家を窺つてゐると、人もはや寢靜まつた夜更け、奥座敷と覺しいあたりから奇妙不思議な聲が漏れる。若者は拔き足さし足で寄り添ひ、じつと耳をすました。たしかに聲の主はこの家のあるじだが、言葉の意味は判らない。全く得體の知れぬ聲である。見とがめられたらそれまでと、覺悟をきめた若者たちは障子に孔をあけて聲する方をすかして見た。これはまた何といふ怪奇なことであらう。

床の間に向つて端座したこの家の主人は、手に大きな御幣を持つて祓ひの手ぶりもいと嚴かに、低頭いくたびかしてしきりに何物かを拜んでゐる。若者たちは障子の孔から瞳を凝らして床の間の物を見た。彼等は再び仰天した。床の間にあるは、まさしく惠比須天の尊像、しかもそれはその年の雪解け頃、赤岩の高い〳〵巖頭からいつの間にか紛失したものであつた。正體を見とゞけた血氣の若者たちは、何條猶豫すべき「惠比須泥棒見つけたぞ。そこ動くなッ！」とば

（右）第四十五圖版　同寺の地藏尊
（左）第四十四圖版　龍泉寺

年遥り人も變つた明治初年の頃、祝津に宜洲と云ふ名僧が庵を結んで教化に當つてゐた。月澄と號したが村人がつけた梅坊主の名の方が通りがいゝ程、彼は梅の繪を巧みに書いた。やがて宜洲は一寺をつくつて遷座したが、これが今殘る祝津龍泉寺であつて、寺内の地藏尊は西川傳右衛門の發願にかゝる首體地藏の一つであると傳へられる。

×　　×　　×

近年になつて滋賀縣八幡町の西川吉之助と云ふ人が、ふと先祖の殘した古文書の中から蝦夷地に首體の地藏を建てた事を知り、昭和三年遥々祝津を訪れて漸くその七體を發見する事が出來た。卽ち今は忍路高島七地藏で名高い一番高島正林寺の延命地藏、二番祝津龍泉寺の地藏、三番小樽稲穂町無量寺の地藏、四番忍路山中の御賜惠地藏、五番忍路の桃内地藏、六番忍路大忠寺の地藏、七番津古丹地藏の七ツである。殊に御賜惠地藏は有名で、稼穡山來の守居までも仕組まれ、龍泉寺地藏と共に男女の緣組と女の乳乞ひなら、必ずきゝとどけて下さると言ふあらたかな靈驗から、毎日千人近いお參りがある。

九、赤岩の惠比須像

昭和四年の春の話である、北海道は全體に鰊が不漁であつて、祝津村も勿論その例には漏れなかつた。ところが、この村にたゞ一軒不思議にも豊漁をする刺網漁場があつた。昨夜も百石、けさも二百石と小さな漁場でありながら、建網漁場も及ばぬ景氣、村人はひとしくそれを羨んだ。そねみ羨みは人の心の常である。口と心とうらはらで「お目出度う」を言ひながら、直ぐその口で「何か仕掛けでもあるのか」と、つひ誰でもが淺ましい質問をした。すると彼はニタ〳〵と笑を浮べながら、「ありますともね、大ありサ、だが、こいつをいつちやあこつちが飯の食ひあげだよ」と、何か奥齒にはさまつた返事をしてゐた。

昔から漁師の心理は單純だ、曰く有りげな彼の言葉を眞に受けて、その手品の種を必ず明かしてやらうと村人は何れも心に堅く誓つた。中でも氣の合つた血氣の若者四五人は、互にそれと諜し合せて彼の家のまはりとその行動とを、夜となく晝となくひそかに監視してゐた。

或夜、例によつてこの若者たちが彼の家を窺つてゐると、人もはや寢靜まつた夜更け、奥座敷と覺しいあたりから奇妙不思議な聲が漏れる。若者は拔き足さし足で寄り添ひ、じつと耳をすました。たしかに聲の主はこの家のあるじだが、言葉の意味は判らない。全く得體の知れぬ聲である。見とがめられたらそれまでと、覺悟をきめた若者たちは障子に孔をあけて聲する方をすかして見た。これはまた何といふ怪奇なことであらう。

床の間に向つて端座したこの家の主人は、手に大きな御幣を持つて祓ひの手ぶりもいと厳かに、低頭いくたびかしてしきりに何物かを拜んでゐる。若者たちは障子の孔から眸を凝らして床の間の物を見た。彼等は再び仰天した。床の間にあるは、まさしく惠比須天の尊像、しかもそれはその年の雪解け頃、赤岩の高い〳〵絶頂からいつの間にか紛失したものであつた。正體を見とゞけた血氣の若者たちは、何條猶豫すべき「惠比須泥棒見つけたぞ。そこ動くなツ！」とば

かり、戸障子を蹴破つて踏込むと拳をそろへて主人を袋叩きにした。

話は遡つて一昔まへ、歌津村三浦吉郎の老母が或夜突磯の巖頭に立つ惠比須天の姿を夢に見て以來、同家の漁場では毎年鰊の豐漁が續いた。その謝恩と海上安全の祈願とに、天に聳り立つ赤岩の頂に惠比須天の石像を祭つた。それ以來同家の漁場は、よそが不漁の年でも常に多くの鰊を漁した。そして後々には歌津鰊場の守り神として、例年赤岩開きの日に盛大な祭をするのが、村人のならはしとなつた。それが去年の春急に姿を消してしまつたが、いつの間にか、かの不德漢が盜み取つてゐたのである。

だがこの惠比須さまも今では昔通りに、高い赤岩の頂に歌津村に漁運あれと鎭座ましましてゐる。尊像には「明治三十八年八月二十九日歌津村三浦吉郎建之」と彫つてある。（昭和五年七月小樽新聞所載「赤岩の傳說」に據る）

入舸村　（積丹郡入舸村役場調）

一〇、義經とシララ姫

昔、源義經が此の地に來た時、酋長の娘シララ姫と親しくなつた。シララ姫は雄々しい義經を心から慕ひ、義經も亦優しいシララ姫の純情を素直に受けいれた。然し數奇な義經の運命は尙續いて、漸く迫る嚴しい探索の目を逃るべく更に北上することになつた。そして流石にシララ姫との生別の悲みには堪へ得られず、夜陰密かに義經主從は月明を便りに海岸に出たのであつた。斯くと知つたシララ姫は狂氣の如く絕壁に立つて叫び招いたが、主從の船は只遠ざかり行くばかりであつた。純情なシララ姫は、義經の變心を恨むよりも戀ひ慕ふ餘り、失心せんばかりであつた。今はこれ迄と海中めがけて飛び込んだが、其の身は遂に石と化した。之が、現在の女郎子岩であるといふのである。

喜茂別村　（虻田郡喜茂別村役場調）

一一、シリベシ政廳の址

胆振鐵道留産驛直前、尻別川を隔てゝ獨立した丸山と稱する小丘がある。周圍二十町餘、平地を拔くこと二百餘尺、山頂の平坦部五千餘坪に及び、東南に尻別川の急流が迂曲して斷崖實に百餘尺、西北は目名川の深谷に劃せられ、廣漠たる目名原野を隔てゝ後方羊蹄山を仰ぎ、西南は曠野幾百町、尻別の岳麓に連行してゐる。丘腹に比羅夫神社があつて、一見古城址を想起せしめる。附近所々に扁頂にして、古墳に類する地線を存し、且洞穴竪窟等穴居の昔を偲ばしむるものも少しとしない。丸山の西南方約半里、尻別岳の麓に五町歩に餘る階段型平地を存し、泉水、築山等の壇址と想像し得べきものも少くない。尚附近の耕地より刀劍類の發掘せらるゝものも多く、口碑に依ると比羅夫將軍政廳の地斯

第四十六圖版　比羅夫神社